

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年6月21日

【事業年度】 第131期(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

【会社名】 住友理工株式会社

【英訳名】 Sumitomo Riko Company Limited

【代表者の役職氏名】 社長 松井 徹

【本店の所在の場所】 愛知県小牧市東三丁目1番地

【電話番号】 0568-77-2121(代表)

【事務連絡者氏名】 決算税務部長 佐藤 剛司

【最寄りの連絡場所】 愛知県名古屋市中村区名駅一丁目1番1号J Pタワー名古屋

【電話番号】 052-571-0200(代表)

【事務連絡者氏名】 決算税務部長 佐藤 剛司

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

株式会社名古屋証券取引所
(名古屋市中区栄三丁目8番20号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次		国際会計基準				
		第127期	第128期	第129期	第130期	第131期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高	百万円	401,016	424,485	422,630	462,885	469,705
税引前当期利益	百万円	6,452	11,896	13,300	11,285	700
親会社の所有者に帰属する当期利益又は親会社の所有者に帰属する当期損失()	百万円	1,141	2,901	5,195	3,528	5,022
親会社の所有者に帰属する当期包括利益	百万円	16,303	12,967	3,279	5,162	5,585
親会社の所有者に帰属する持分	百万円	174,761	159,893	161,293	164,379	158,319
資産合計	百万円	399,441	385,371	404,799	414,233	397,279
1株当たり親会社所有者帰属持分	円	1,683.11	1,539.94	1,553.44	1,583.17	1,524.82
基本的1株当たり当期利益又は基本的1株当たり当期損失()	円	10.98	27.94	50.04	33.98	48.37
希薄化後1株当たり当期利益	円					
親会社所有者帰属持分比率	%	43.8	41.5	39.8	39.7	39.9
親会社所有者帰属持分当期利益率	%	0.7	1.8	3.2	2.1	3.1
株価収益率	倍	95.9	35.1	22.5	31.7	
営業活動によるキャッシュ・フロー	百万円	21,331	29,854	33,161	31,622	31,462
投資活動によるキャッシュ・フロー	百万円	22,774	33,990	32,534	27,445	28,251
財務活動によるキャッシュ・フロー	百万円	11,234	1,106	10,715	6,127	8,368
現金及び現金同等物の期末残高	百万円	38,307	30,981	43,854	41,973	38,371
従業員数 (ほか、平均臨時雇用人員)	名	23,568 (2,511)	23,790 (1,951)	24,453 (1,786)	25,689 (1,633)	26,156 (1,770)

(注) 1. 第128期より国際会計基準(以下、「IFRS」という。)に基づいて連結財務諸表を作成しております。

2. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

3. 希薄化後1株当たり当期利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

4. 金額の表示は、表示単位未満の端数を四捨五入して記載しております。

また、第一部第1、第2、第3及び第5の連結財務諸表及びその他の事項の金額表示についても、表示単位未満の端数を四捨五入して記載しております。

回次		日本基準	
		第127期	第128期
決算年月		2015年3月	2016年3月
売上高	百万円	400,930	424,485
経常利益	百万円	8,408	10,936
親会社株主に帰属する 当期純損失()	百万円	4,429	815
包括利益	百万円	13,167	19,762
純資産額	百万円	199,225	172,665
総資産額	百万円	406,777	378,178
1株当たり純資産額	円	1,731.04	1,485.17
1株当たり当期純利益金額又は 1株当たり当期純損失金額()	円	42.66	7.85
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額	円		
自己資本比率	%	44.2	40.8
自己資本利益率	%	2.5	0.5
株価収益率	倍		
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	19,547	25,512
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	17,184	29,648
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	2,692	1,106
現金及び現金同等物の期末残高	百万円	47,518	30,981
従業員数 (外、平均臨時雇用者数)	名	23,568 (2,511)	23,790 (1,951)

- (注) 1. 第128期の諸数値については、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査は受けておりません。
2. 売上高には、消費税等は含まれておりません。
3. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、第127期及び第128期は1株当たり当期純損失金額であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
4. 株価収益率については、第127期及び第128期は1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。
5. 金額の表示は、表示単位未満の端数を四捨五入して記載しております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第127期	第128期	第129期	第130期	第131期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高	百万円	159,801	166,657	168,875	175,064	177,439
経常利益	百万円	6,413	5,076	6,203	5,084	16,627
当期純利益又は当期純損失()	百万円	11,694	6,340	5,953	5,676	6,278
資本金	百万円	12,145	12,145	12,145	12,145	12,145
発行済株式総数	千株	104,042	104,042	104,042	104,042	104,042
純資産額	百万円	102,243	93,183	96,593	100,206	91,891
総資産額	百万円	257,021	250,281	270,414	275,661	263,361
1株当たり純資産額	円	984.70	897.44	930.30	965.10	885.03
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額)	円	18.00 (9.00)	18.00 (9.00)	19.00 (9.00)	20.00 (10.00)	14.00 (10.00)
1株当たり当期純利益金額又は 1株当たり当期純損失金額()	円	112.62	61.06	57.34	54.66	60.47
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額	円					
自己資本比率	%	39.8	37.2	35.7	36.4	34.9
自己資本利益率	%	10.6	6.5	6.2	5.8	6.5
株価収益率	倍			19.6	19.7	
配当性向	%			31.4	36.6	
従業員数 (外、平均臨時雇用者数)	名	3,013 (824)	2,923 (553)	2,889 (473)	2,948 (482)	3,033 (609)
株主総利回り (比較指標：配当込みTOPIX)	%	101.3 (130.7)	96.2 (116.5)	111.7 (133.7)	109.0 (154.9)	96.2 (147.1)
最高株価	円	1,187	1,168	1,235	1,321	1,283
最低株価	円	851	863	770	1,001	829

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、第129期及び第130期は潜在株式が存在しないため、第127期、第128期及び第131期は1株当たり当期純損失金額であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
3. 株価収益率及び配当性向については、第127期、第128期及び第131期は1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。
4. 金額の表示は、表示単位未満の端数を四捨五入して記載しております。
また、第一部第4、第5の財務諸表及びその他の事項の金額表示についても表示単位未満の端数を四捨五入して記載しております。
5. 第128期より、ヘッジ会計の方法を変更したため、第127期については、当該会計方針の変更を反映した遡及適用後の数値を記載しております。
6. 第129期より、外国源泉税の表示方法を変更したため、第128期については、当該表示方法の変更を反映した遡及適用後の数値を記載しております。
7. 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

2 【沿革】

- 1929年 12月 資本金100万円を以て三重県四日市市に、昭和興業(株)として設立し、ゴムベルトの製造に従事。
- 1930年 1月 社名を蒲田調帯(株)に改称し、平型ベルト・コンベヤベルトの製造を開始。
- 1937年 10月 (株)住友電線製造所(現・住友電気工業(株))の経営参加により、社名を東海護謨工業(株)に改称、ゴムベルト以外の工業用ゴム製品の製造にも着手。
- 1942年 4月 岡山県岡山市の(株)渡邊ゴム工業所を合併、岡山工場(後に岡山製作所)とした。
4月 編上式・布巻式ホースの製造を開始。
- 1943年 8月 三重県松阪市の笹川紡織(株)を合併、松阪工場(現・松阪製作所)とした。
- 1949年 7月 名古屋証券取引所に株式を上場。
- 1954年 2月 防振ゴムの試作に成功、製造を開始。
- 1960年 11月 愛知県小牧市で小牧工場(現・小牧製作所)操業開始。
- 1961年 11月 社名を東海ゴム工業(株)に改称。
- 1964年 12月 本社を愛知県小牧市に移転。
- 1966年 10月 生産合理化のため、四日市工場の設備を小牧及び松阪工場へ品種別に集中し、同工場を閉鎖。
- 1968年 5月 愛知県小牧市に東海化成工業(株)を設立。
- 1981年 6月 液体封入式エンジンマウントの製造を開始。
- 1984年 3月 OA機器用樹脂部品の製造を開始。
- 1988年 1月 米国にDTR Industries, Inc.(現・SumiRiko Ohio, Inc.)を設立。
- 1990年 6月 静岡県裾野市の富士裾野工場(現・富士裾野製作所)の操業を開始。
- 1994年 2月 東京証券取引所市場第二部に株式を上場。
- 1995年 7月 タイにTokai Eastern Rubber (Thailand) Ltd.(現・SumiRiko Eastern Rubber (Thailand) Ltd.)を設立。
12月 中国に東海橡塑(天津)有限公司を設立。
- 1996年 9月 東京・名古屋両証券取引所の市場第一部銘柄に指定。
- 1998年 2月 大分県豊後高田市に(株)TRI大分AE(現・(株)住理工大分AE)を設立。
- 1999年 7月 ポーランドにTRI (Poland) Sp. z o.o.(現・SumiRiko Poland Sp. z o.o.)を設立。
- 2007年 12月 大分県豊後高田市に(株)TRI九州(現・(株)住理工九州)及び(株)東海化成九州を設立。
- 2008年 5月 インドにTokai Rubber Auto-Parts India Private,Ltd.を設立。
- 2010年 3月 生産拠点集約のため、岡山製作所の設備を小牧製作所及び(株)TRI九州へ移し、同製作所を閉鎖。
- 2011年 8月 インドネシアにPT.Tokai Rubber Indonesia及びPT.Tokai Rubber Auto Hose Indonesiaを設立。
- 2013年 2月 イタリアのDytech-Dynamic Fluid Technologies S.p.A.(現・SumiRiko Italy S.p.A.)を買収。
4月 タイのInoac Tokai (Thailand) Co., Ltd. を子会社化。
5月 ドイツのAnvis Group GmbH(現・SumiRiko AVS Holding Germany GmbH)を買収。
7月 ブラジルのProdulflex Minas Industria de Borrachas Ltda.(現・SumiRiko do Brasil Indústria de Borrachas Ltda.)を買収。
12月 京都府綾部市に(株)TRI京都(現・住友理工ホーステックス(株))を設立。
- 2014年 10月 社名を住友理工(株)に改称。
11月 燃料電池自動車に搭載されるセル用ガスケットを開発し、製造を開始。
- 2015年 4月 山形県米沢市に住理工山形(株)を設立。
10月 名古屋市中区に一般産業用品の販売会社、住理工商事(株)を発足。
- 2016年 1月 名古屋市中村区にグローバル本社を開設。
- 2017年 7月 タイにSumitomo Riko (Asia Pacific) Ltd.を設立。
- 2018年 7月 (株)住理工ホーステックスが住理工ホース販売(株)を吸収合併し、住友理工ホーステックス(株)に改称。
- 2019年 4月 (株)住理工ファインエラストマーを合併、埼玉事業所とした。

3 【事業の内容】

当社グループ(当社及び当社の関係会社)は、当社、親会社、子会社79社及び関連会社8社により構成されており、自動車用品及び一般産業用品の製造販売を主な事業とし、その製品は多岐にわたっております。

当社グループの事業に係わる位置付け等は以下のとおりであります。

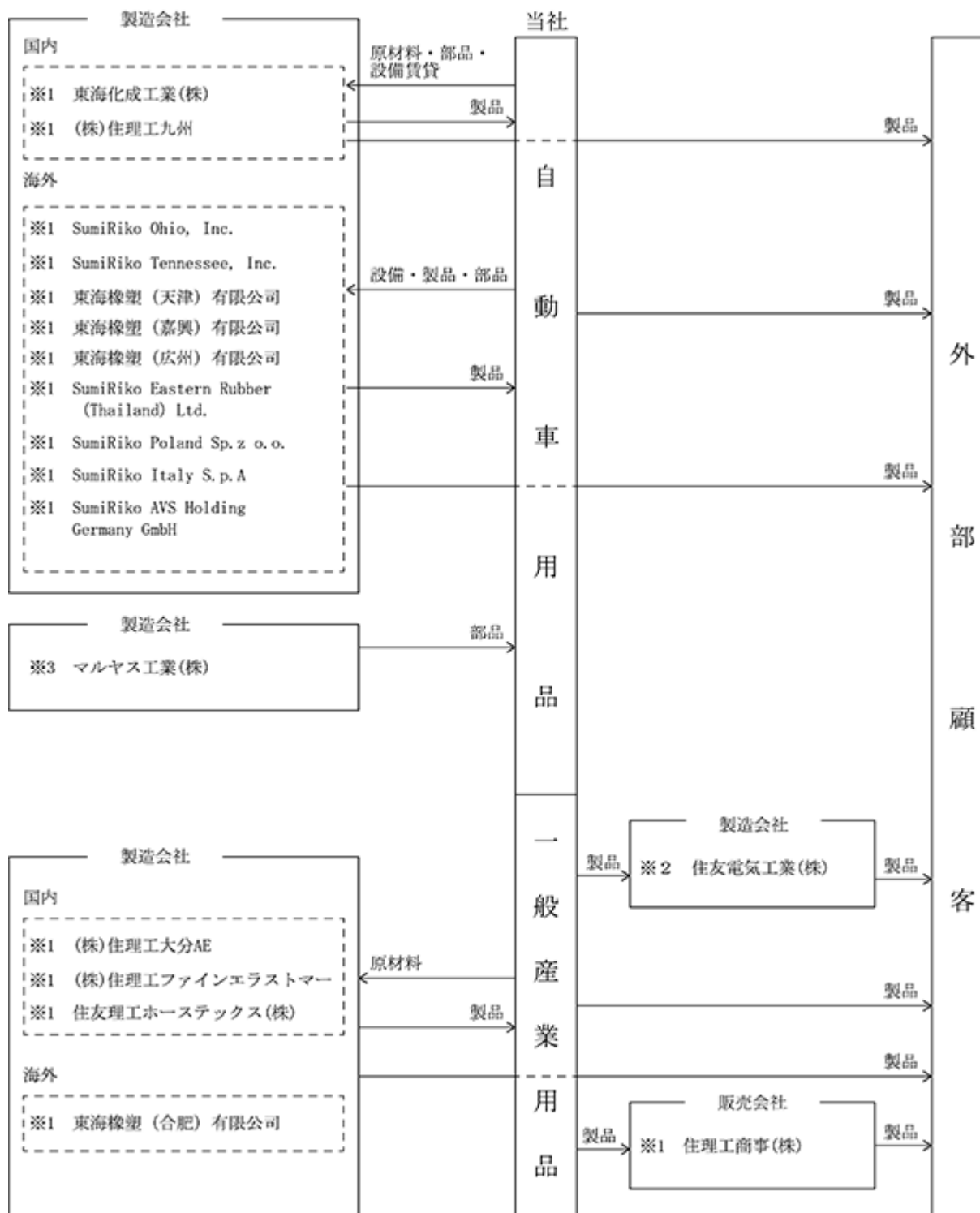
なお、「事業区分」は「第5 経理の状況 連結財務諸表注記「6. セグメント情報」」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

事業区分	内容	主要会社名
自動車用品	防振ゴム、ホース、制遮音品、内装品等	当社 東海化成工業(株) (株)住理工九州 SumiRiko Ohio, Inc.(米国) SumiRiko Tennessee, Inc.(米国) 東海橡塑(天津)有限公司(中国) 東海橡塑(嘉興)有限公司(中国) 東海橡塑(広州)有限公司(中国) SumiRiko Poland Sp. z o.o.(ポーランド) SumiRiko Eastern Rubber (Thailand) Ltd.(タイ) SumiRiko Italy S.p.A.(イタリア) SumiRiko AVS Holding Germany GmbH(ドイツ) その他55社 (当事業に携わる会社総数 67社)
一般産業用品	精密樹脂ブレード・ロール、車両用・住宅用・橋梁用・電子機器用防振ゴム、高圧ホース・搬送用ホース、ゴムシール材等	当社 住友電気工業(株) (株)住理工大分AE (株)住理工ファインエラストマー (注) 住友理工ホーステックス(株) (株)住理工商事 東海橡塑(合肥)有限公司(中国) その他25社 (当事業に携わる会社総数 32社)

(注) (株)住理工ファインエラストマーは、2019年4月1日付で当社が吸収合併しております。

事業系統図

主要な関係会社等を事業系統図に示すと次のとおりであります。



(注) ※1 連結子会社
※2 親会社
※3 主要株主(会社等)

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金	主要な事業 の内容	議決権の 所有又は 被所有割合	関係内容			摘要
					役員の 兼任等	資金援助等 (注)3	営業上の取引等	
(親会社) 住友電気工業(株)	大阪市 中央区	百万円 99,737	一般産業用品	% 被所有 50.7 (1.0)	転籍あり	なし	当社製品の販売	(注)5
(連結子会社) 東海化成工業(株)	岐阜県 可児郡	百万円 825	自動車用品	80.0	なし	CMS	当社製品の製造	
(株)住理工九州	大分県 豊後高田市	百万円 3,500	自動車用品	100.0	なし	CMS	当社製品の製造 土地を貸与	(注)4
(株)住理工ファイ ンエラストマー	埼玉県 上尾市	百万円 71	一般産業用品	100.0	なし	CMS	当社製品の製造	(注)7
(株)住理工大分AE	大分県 豊後高田市	百万円 450	一般産業用品	100.0	兼任あり	CMS	当社製品の製造	
住友理工 ホーステックス(株)	京都府 綾部市	百万円 3,000	一般産業用品	100.0	兼任あり	CMS	当社製品の製造	(注)4 (注)6
(株)住理工メテックス	愛知県 小牧市	百万円 30	自動車用品	100.0	兼任あり	CMS	当社製品の部品製造 原材料の支給	
住理工商事(株)	愛知県 名古屋	百万円 100	一般産業用品	100.0	兼任あり	CMS	当社製品の販売	
(株)住理工ロジテック	愛知県 小牧市	百万円 70	一般産業用品	90.0	兼任あり	CMS	当社の物流業務を委託 土地及び設備を貸与	
Sumitomo Riko America, Inc.	米国 ミシガン州	米ドル 879	自動車用品	100.0	なし	資金の貸付	当社製品の営業	
SumiRiko Tennessee, Inc.	米国 テネシー州	米ドル 446	自動車用品	100.0 (100.0)	兼任あり	なし	当社製品の製造	(注)9
SumiRiko Ohio, Inc.	米国 オハイオ州	百万米ドル 5	自動車用品	100.0 (100.0)	なし	なし	当社製品の製造	
SumiRiko Technical Center America, Inc.	米国 ミシガン州	米ドル 35	自動車用品	100.0 (100.0)	なし	債務保証	当社製品の評価・開発	
S-Riko de Querétaro, S.A.P.I. de C.V.	メキシコ ケレタロ州	百万米ドル 55	自動車用品	100.0 (62.3)	兼任あり	なし	当社製品の製造	(注)4
SumiRiko Poland Sp. z o.o.	ポーランド マウオポルス カ県	百万ユーロ 7	自動車用品	77.1	兼任あり	なし	当社製品の製造	
Sumitomo Riko Europe GmbH	ドイツ ヘッセン州	百万ユーロ 12	自動車用品	100.0	兼任あり	債務保証 資金の貸付	当社製品の営業	(注)4
SumiRiko AVS Holding Germany GmbH	ドイツ ヘッセン州	百万ユーロ 5	自動車用品	100.0	兼任あり	なし	なし	
SumiRiko Italy S.p.A.	イタリア ピエモンテ州	百万ユーロ 30	自動車用品	100.0	兼任あり	なし	当社製品の開発	(注)4
東海軟管(大連) 有限公司	中国遼寧省 大連市	百万人民元 58	自動車用品	90.0	兼任あり	なし	当社製品の製造	
東海橡塑(天津) 有限公司	中国 天津市	百万人民元 116	自動車用品	86.4	兼任あり	なし	当社製品の製造	(注)4

名称	住所	資本金又は 出資金	主要な事業 の内容	議決権の 所有又は 被所有割合	関係内容			摘要
					役員の 兼任等	資金援助等 (注)3	営業上の取引等	
東海化成(天津) 汽車部品有限公司	中国 天津市	百万人民元 28	自動車用品	84.6 (64.6)	なし	債務保証	当社製品の製造	
住友理工企業管理(中国) 有限公司	中国浙江省 嘉興市	百万人民元 5	一般産業用品	100.0	兼任あり	余裕資金の 受入	当社製品の営業	
東海橡塑(嘉興) 有限公司	中国浙江省 嘉興市	百万人民元 243	自動車用品	100.0	兼任あり	なし	当社製品の製造	(注)4
東海橡塑技術中心(中国) 有限公司	中国浙江省 嘉興市	百万人民元 89	自動車用品	100.0	兼任あり	なし	当社製品の評価・開発	(注)4
東海橡塑(合肥) 有限公司	中国安徽省 合肥市	百万人民元 257	一般産業用品	89.2 (64.17)	兼任あり	なし	当社製品の製造	(注)4
東海橡塑(広州) 有限公司	中国広東省 広州市	百万人民元 181	自動車用品	100.0	兼任あり	なし	当社製品の製造	(注)4
SumiRiko Eastern Rubber (Thailand) Ltd.	タイ ラヨン県	百万バーツ 153	自動車用品	66.0 (6.67)	兼任あり	余裕資金の 受入	当社製品の製造	(注)8
Sumitomo Riko (Asia Pacific) Ltd.	タイ バンコク都	百万バーツ 20	自動車用品	100.00	兼任あり	余裕資金の 受入	当社製品の営業	
Inoac Tokai (Thailand) Co.,Ltd.	タイ アユタヤ県	百万バーツ 45	自動車用品	50.6	兼任あり	なし	当社製品の製造	
PT. Tokai Rubber Indonesia	インドネシア 西ジャワ州	億インドネ シアルピア 3,506	自動車用品	91.5	兼任あり	債務保証 資金の貸付	当社製品の製造	(注)4
その他 50社								
(持分法適用関連会社) ㈱大興R&T	韓国 慶尚南道	百万ウォン 784	自動車用品	30.0	兼任あり	なし	当社製品の製造	
その他 7社								

- (注) 1. 連結子会社の「主要な事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載しております。
2. 「議決権の所有又は被所有の割合」欄の(内書)は間接所有割合であります。
3. 当社と国内連結子会社は、CMS(キャッシュ・マネジメント・システム)を通じて当社グループ企業相互間で余剰・不足資金を融通し、資金の効率化を図っております。
4. 特定子会社であります。
5. 有価証券報告書提出会社であります。
6. 住友理工ホーステックス(株)は、2018年7月1日付で住理工ホース販売(株)を吸収合併し、(株)住理工ホーステックスから商号変更しております。
7. (株)住理工ファインエラストマーは、2019年4月1日付で当社が吸収合併しております。
8. SumiRiko Eastern Rubber (Thailand) Ltd. は、2018年6月1日付でTokai Eastern Rubber (Thailand) Ltd. から商号変更しております。
9. SumiRiko Tennessee, Inc.については、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等 (単位:百万円)

会社名	SumiRiko Tennessee, Inc.
売上高	66,415
税引前当期利益	301
当期利益	314
資本合計	26,832
総資産額	36,070

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社における状況

(2019年3月31日現在)

セグメントの名称	従業員数(名)
自動車用品	21,820 (1,245)
一般産業用品	3,499 (357)
全社(共通)	837 (168)
合計	26,156 (1,770)

(注) 従業員数は就業人員(当社グループからグループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含む。)であり、臨時雇用者数(季節工、パートタイマー及び嘱託契約の従業員を含み、派遣社員を除く。)は、年間の平均人員を()外数で記載しております。

(2) 提出会社の状況

(2019年3月31日現在)

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
3,033 (609)	40.3	16.2	7,091

セグメントの名称	従業員数(名)
自動車用品	1,715 (344)
一般産業用品	481 (97)
全社(共通)	837 (168)
合計	3,033 (609)

(注) 1. 従業員数は就業人員(当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含む。)であり、臨時雇用者数(季節工、パートタイマー及び嘱託契約の従業員を含み、派遣社員を除く。)は、年間の平均人員を()外数で記載しております。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

労働組合は、全日本ゴム産業労働組合総連合等に所属しており、労使関係は安定しております。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営方針・経営戦略等

当社グループは、2022年度を最終年度とする中期経営ビジョン「2022年 住友理工グループVision (2022V)」に基づき「自動車」「インフラ・住環境」「エレクトロニクス」「ヘルスケア」の4分野に注力し、また、「事業環境が大きな変革期を迎える中で、着実な成長と体質強化を目指す」をVisionのテーマとして、以下の内容を遂行していきます。

< 経営戦略 >

「新事業・新規顧客創出」

新事業創出

グローバル拡販

「モノづくり革新」

競争を勝ち抜く強い現場づくり (SRIM 22 Act)

技術革新 (環境技術)・世界No. 1 品質

「グローバル経営基盤強化」

グローバル人材力強化

グローバルインフラ強化

これらの取り組みにより、「人・社会・地球の安全・快適・環境に貢献する企業」を目指すべき姿として“Global Excellent Manufacturing Company”の実現を追求し続けます。2022年度の財務目標としては、売上高5,300億円、営業利益率5%を掲げています。

(2) 経営環境及び対処すべき課題

当社グループを取り巻く環境においては、中国や欧州などで景気減速への懸念が高まっていることに加え、米中貿易摩擦や英国のEU離脱が予断を許さない状況となっていることから、世界経済の先行きに対する不透明感が増しています。当社グループの主要取引先である自動車業界では、米国自動車販売の減速が懸念されるほか、中国自動車市場についても成長の鈍化が見込まれます。

当社グループにおきましては、近年の収益力低下を真摯に受け止め、早期の収益力回復に取り組みます。

〔自動車用品部門〕

当会計年度においては、事業計画の遅れを受け、欧州など海外子会社のれん等の減損損失を計上しました。当社グループとしましては、買収した子会社の持つ海外自動車メーカー向けの顧客ネットワークなどを活用し、海外自動車メーカーに対しての拡販活動をはじめ、買収した子会社の生産拠点を活用することで日系自動車メーカー向けの受注をさらに拡大させるなど、グローバルでの成果を着実にあげており、これらグローバル拡販に加え、生産性改善、原価低減を実行し、今後も業績改善に努めます。

自動車業界においては、CASE「C：コネクテッド（つながる）」「A：オートノマス（自動運転）」「S：シェアリング（共同所有）」「E：エレクトリシティー（電動化）」のもとに技術革新が生まれています。世界各国で厳しい環境規制や新エネルギー車の導入目標が設定され、EV（電気自動車）シフトが進んでいます。

このようなCASEやEVをはじめとする電動車の急速な普及に伴い、新たなビジネスチャンスが到来するものと考えています。当社グループとしましては、長年培ってきた「高分子材料技術」「総合評価技術」をもとに、防振ゴム開発で積み重ねてきた振動騒音制御技術や、ホース開発で磨きをかけてきた流体搬送技術を駆使し、車室における居心地の良い空間づくりに貢献するなど、これからの自動車に新たな快適性を提供する製品の創出と開発を進めます。

また、EV向け製品だけでなく、「究極のエコカー」と言われる燃料電池自動車（FCV）向けの基幹部品をすでに供給しているほか、体圧を検知する「スマートラバー（SR）センサ」を自動車のシートに埋め込んだ新製品の開発を、2016年に設置した自動車新商品開発センターが主体となって進めています。これは、呼吸や心拍などの生体情報（バイタルデータ）によってドライバーの異変を検知し、危険を回避させるなど乗員状態検知機能の実用化を目指すもので、来たる自動運転時代を見据えた新たな挑戦と位置付けています。加えて、次世代の先進車両向け製品の開発強化と戦略的拡販を加速するため、今年4月に「NEVデバイス事業部」を新設し、組織の改編を推し進めています。

さらに、これからの自動車事業をグローバルかつ、よりスピーディに運営するため、昨年6月に自動車関連の各事業本部を統合する「自動車事業統合本部」を設置し、事業部間の連携強化を進めています。自動車用防振ゴム事業については、機動的な運営と適正な規模での管理を行うため「防振事業部」を地域ごとに「日本・アジア事業部」「中国事業部」「米州事業部」「欧州事業部」へと再編しました。特に欧州事業部ではグローバル拡販の推進を、米州事業部では北米・中南米拠点での生産性の改善に引き続き努めます。

世界最大の自動車市場である中国は、当社グループにとっても最重要エリアの一つです。同国内12の生産・開発拠点、そして今年4月に新設した中国自動車営業本部が一体となって、中国系自動車メーカーを中心に、上海モーターショーへの出展などを契機に、同国内に拠点を持つ全ての自動車メーカーに向けて拡販活動を強力に進めます。

加えて、各事業部の調達機能を「グローバル調達本部」に集約し、グローバルネットワークと調達活動の強化を図ることにより、グローバルでの原価低減活動を推し進め、収益改善に努めます。

当社グループは、快適な車室内空間を提供する自動車用防振ゴムのトップメーカーとして、自動車を利用する全ての人々にとって快適な車とは何かを考え、これまで以上に、高付加価値の製品の開発・販売に努めます。

〔一般産業用品部門〕

一般産業用品部門では、昨年7月に産業用ホース事業において、製造・販売子会社である株式会社住理工ホーステックス（京都府綾部市）と、同ホースのアセンブリ加工・国内販売子会社、住理工ホース販売株式会社（愛知県小牧市）を統合し、住友理工ホーステックス株式会社（本社：京都府綾部市）に商号を変更しました。この統合により、グループの経営資源を集約し、意思決定の迅速化、事業の効率化による収益力の向上と事業基盤の強化を図ります。加えて、製販一体化により、多様化するニーズに即応できる体制の構築を進めます。また、インフラ需要の旺盛な中国・インドでの拡販のみならず、欧州市場での認知度の向上を図るため、ハノーバーメッセなどの展示会にも積極的に出展しています。

化工品事業では、北米での鉄道車両用防振ゴムの拡販、住宅用制震ダンパーの販促強化、ロボット安全センサの開発促進に努めます。

〔新規事業部門〕

新規事業部門では、IoT化技術開発推進、センサ、アクチュエータ新商品の開発効率および製法開発を含めた開発スピード向上のため、昨年9月に「IoTデバイスセンター」を新設しました。今年3月には心拍や呼吸など生体情報を同時に計測できる診断用機器である「体動センサ」を開発、圧電ゴム技術を応用したバイタルセンシング機器として、世界で初めて実用化しました。今後は、医療分野のほか、介護や健康、スポーツなど幅広い分野での活用が期待されます。この体動センサについては、研究開発者向けにモニター販売を開始しており、医療機関や研究開発機関、介護施設や企業などへの提供を通じて、ヘルスケア分野での新たな商品開発に繋げ、人々の暮らしへのさらなる貢献を目指します。

このような中、当社グループは、「事業環境が大きな変革期を迎える中で、着実な成長と体質強化を目指す」をテーマに中期経営ビジョン「2022年 住友理工グループVision」（2022V）のもと、「新事業・新規顧客創出」「モノづくり革新」「グローバル経営基盤強化」を経営戦略の柱として、引き続き企業価値向上に取り組めます。

私たちは、住友事業精神が謳う「信用確実」「不趨浮利(ふすうふり)」を忠実に守りながら、世界中で必要とされる“Global Excellent Manufacturing Company”への飛躍を目指し、進化を続けてまいります。皆様におかれましては、当社グループの企業活動についての一層のご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2 【事業等のリスク】

当社グループの経営成績及び財政状態等に影響を及ぼす可能性のある主要なリスクには、以下のものがあります。本項における将来に関する記載は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものです。

(政治経済情勢・需要変動等に係るリスク)

部品メーカーである当社グループの経営成績は、顧客である完成品メーカーの生産動向の影響を受けますが、特に売上高の8割以上を占める顧客である自動車メーカーの国内外での生産動向の影響を大きく受けます。中長期的には自動車メーカーを取り巻く環境の変化が当社製品の需要に影響を及ぼす可能性があります。

加えて、顧客ニーズの多様化、製品ライフサイクルの短期化、グローバル化の進展による競争構造の変化等により、当社グループの経営成績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

また、当社グループでは、海外売上高が連結売上高の約6割を占めており、海外の政治経済や社会情勢が経営成績等に影響を与える可能性があります。

(法律・規制の変更等によるリスク)

当社グループの事業は、国内外の法律・規制の変更等があった場合、その影響を完全に回避することができないため、経営成績等に影響が及ぶ可能性があります。これらの要因としては、輸出入規制や関税率の引き上げ、各国の国内及び国際間取引に係る租税制度の変更、外貨規制などがあります。

(訴訟、規制当局による措置その他の法的手続きに係るリスク)

当社グループは、事業を遂行するうえで、訴訟、訴訟規制当局による措置その他の法的手続きにより、当社グループが損害賠償請求を受け、罰金その他の制裁金を賦課され、又は事業の遂行に制約が課される可能性があります。当社グループは、これらの法的リスクを未然に防止し、また顕在化したリスクに適切に対応する体制の整備を進めていますが、かかる対応にもかかわらず、法的リスクが顕在化した場合には経営成績等への影響が及ぶ可能性があります。

また、当社は海外での事業展開や新事業への進出を積極的に進めており、一方、消費者等の権利意識の高まりや国内外における競争政策、贈賄防止、移転価格、消費者保護等の分野での規制当局の法執行が積極化していることから、国内外における集団訴訟や当局の調査に対し適切に対応するために要する費用により財務負担が増加する可能性があります。

(災害等のリスク)

当社グループは、地震、火災、落雷、破裂・爆発、風・雪・水災、航空機の墜落、伝染病の流行、テロその他の犯罪、内戦等により被災することにより直接・間接の損失を被る可能性があります。特に、当社グループの主要な生産・営業拠点が、東海及び東南海・南海地震の防災対策強化地域や首都直下型地震の地域に所在しているため、地震発生も想定した事業継続計画を策定するなどの対策を進めていますが、顧客、原材料等の供給元の被災、電力・情報通信・物流網等の復旧の状況等により、影響が長期化する可能性があります。

(資金調達に係るリスク)

当社グループは、資金需要、金融市場環境及び調達手段のバランスを考慮し資金調達を行っています。当社グループの資金調達は、設備投資を目的とした長期固定金利の社債発行や長期借入による調達を中心としています。そのため、金利の短期的な変動による影響は比較的受けにくいものの、金利が中長期的に上昇した場合は、社債等による資金調達コストを上昇させ、当社グループの経営成績等に影響を及ぼす可能性があります。

また、当社グループの借入金に係る金融機関との契約には、財務制限条項が付されているものがあります。当該財務制限条項に抵触した場合、当社グループの経営成績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(為替レートの変動によるリスク)

当社グループは、在外連結子会社及び在外持分法適用関連会社の個別財務諸表を主に現地通貨ベースで作成し、連結財務諸表の作成時に円換算しています。従って、現地通貨ベースでの業績に大きな変動がない場合でも、円換算時の米ドル、ユーロ等の為替レート変動が経営成績等に影響を及ぼす可能性があります。

また、中長期にわたる大幅な為替変動は、経営成績等に影響を及ぼす可能性があります。

(原材料等の調達に係るリスク)

当社グループの製品は、天然ゴム、合成ゴムや鋼材等を原材料として使用しています。これら原材料や副資材、燃料等の市況価格の急激な上昇等があった場合は、製品価格に適切に反映させることができず、経営成績等に影響を及ぼす可能性があります。

また、原材料等の供給元の倒産や罹災により、必要量の調達が困難になる可能性があります。

(知的財産に係るリスク)

当社グループは、特許権、意匠権、その他の知的財産権の取得により自社技術の保護を図るとともに、他社の知的財産権に対しても注意を払っています。

しかしながら、新事業分野における製品開発の増加や海外での事業活動の拡大に伴う流通経路の複雑化等により、当社グループの製品が意図せず他社の知的財産権を侵害した場合に、販売中止、設計変更等の処置をとらざるを得ない可能性があり、その場合、当社グループの経営成績等に影響を及ぼす可能性があります。

(情報の流出によるリスク)

当社グループは、事業遂行に関連して多くの個人情報や機密情報を有しています。これらの情報の秘密保持については必要な対策を講じていますが、不測の事態により、情報が漏洩する可能性があります。このような事態が生じた場合、事業戦略の遂行に支障が生じたり、損害拡大防止費用や損害賠償責任の負担が生じたりすることにより、当社グループの経営成績等に影響を及ぼす可能性があります。

(情報システム・セキュリティに係るリスク)

当社グループが事業活動を行う上で、情報システム及び情報ネットワークは欠くことのできない基盤であり、構築・運用に当たっては十分なセキュリティの確保に努めていますが、ハッカーやコンピュータウイルスによる攻撃、不正使用やインフラ障害等により、当社グループの経営成績等に影響を及ぼす可能性があります。

(製品の欠陥によるリスク)

当社グループは、全社的な品質管理の体制を構築・運用することにより、製品の品質保持に万全の注意を払っていますが、予期せぬ事態により、大規模な市場改修や製造物責任による賠償費用等の負担が生じる可能性があります。

また、顧客との間での品質問題に関する交渉等のために要する費用の負担により、経営成績等に影響を与える可能性があります。

(人事・労務に係るリスク)

当社グループは、事業領域の拡大やグローバル化に対応するため、人材確保・人材育成に努めていますが、事業領域・規模の拡大や新規事業への投資等に伴いグループの人員が増加していることから、人材不足や人事・労務問題が生じた場合には、当社グループの経営成績等に影響を及ぼす可能性があります。

(新事業展開によるリスク)

当社グループは、2022Vに基づき、「自動車(モビリティ)」「インフラ・住環境」「エレクトロニクス」「ヘルスケア」の4つの成長分野において既存事業の強化と新規事業の展開を進めており、新規事業には既存事業と異なる事業リスクが存在するため、事業化の検討の各段階において必要に応じ外部専門家の意見も取り入れ、十分な調査に基づく慎重な判断を行うものとしています。

しかしながら、当社グループは新規事業分野での十分な事業経験を有していないことから、事業化の遅延やマーケティング手法の不備などの原因で投資回収の遅延や不能が生じ、経営成績等に影響を与える可能性があります。また、同様の理由から、既存事業と比べ、訴訟、規制当局による措置その他の法的手続きに係るリスクが高まる可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度における当社グループ（当社、連結子会社及び持分法適用会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の概況並びに経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末において判断したものであります。

(1) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」第93条の規定によりIFRSに準拠して作成しております。この連結財務諸表の作成にあたって、必要と思われる見積りは、合理的な基準に基づいて実施しております。

なお、当社グループの連結財務諸表で採用する重要な会計方針は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等

(1)連結財務諸表 連結財務諸表注記 3.重要な会計方針」に記載しております。

(2) 経営成績

当連結会計年度の世界経済は、米国では保護主義的な経済政策が強まる中、良好な雇用・所得環境を背景に個人消費は堅調に推移、企業の設備投資も回復傾向が続くなど景気拡大が継続しました。欧州では英国のEU離脱をめぐる混乱もあり、景気は減速局面を迎えています。安定的な成長が続いていた中国でも、米中貿易摩擦の影響などから景気の減速傾向が鮮明になりました。一方、国内経済は米中貿易摩擦や中国経済の減速により輸出については減速傾向にありましたが、自然災害の影響の収束から企業の生産活動は緩やかに回復し、個人消費においても雇用・所得環境の改善から回復が見られました。

当社グループを取り巻く経営環境は、主要取引先である自動車業界においては、米国でピックアップトラックなど大型車や多目的スポーツ車（SUV）は好調でしたが、セダン、小型車を中心に新車販売が減少しました。中国では環境規制強化や米中貿易摩擦の影響により、新車販売は減少しました。また、欧州でも景気減速を受け、市場が縮小しました。一方、国内は軽自動車の販売が好調でした。

また、一般産業用品部門においては、エレクトロニクス分野で需要の低迷により販売が減少したものの、インフラ分野の主要市場となる建機市場は、中国・インドを中心に引き続き需要が堅調に推移しました。

このような中、当社グループは、「事業環境が大きな変革期を迎える中で、着実な成長と体質強化を目指す」をテーマに新中期経営ビジョン「2022年 住友理工グループVision」のもと、「新事業・新規顧客創出」「モノづくり革新」「グローバル経営基盤強化」を経営戦略の柱として、企業価値向上へ取り組んでいます。

当連結会計年度における売上高は、469,705百万円（前期比1.5%増）と、中国・アジア市場で自動車、インフラ分野向けの販売が好調だったことなどから、増収となりました。事業利益は、日本、欧州で収益性が改善しましたが、米国での人手不足に端を発する生産性悪化が当期も継続したことや、アルゼンチン自動車市場縮小の影響によるブラジル子会社の損益悪化により、9,379百万円（前期比27.1%減）と減益になりました。

営業利益は、減損損失計上によるその他の費用の増加により1,153百万円（前期比90.5%減）となりました。減損損失については、2013年に買収した防振ゴム事業の子会社への投資の回収に長期間を要すると判断したため、のれんおよび固定資産に対する損失を計上したものです。また、メキシコ、ブラジル子会社などでも事業環境変化に伴う収益性の低下により固定資産の減損損失を計上しました。税引前当期利益は700百万円（前期比93.8%減）、親会社の所有者に帰属する当期損失は5,022百万円（前期は3,528百万円の黒字）となりました。

セグメントごとの経営成績は、次のとおりであります。

<自動車用品>

国内では、軽自動車の生産台数増加により売上高は増加しました。海外では、第2四半期まで売上が堅調に推移しましたが、第3四半期以降、中国自動車市場の縮小、欧州での新排ガス試験法(WLTP)導入、および通貨安に端を発して経済が低迷しているアルゼンチンの自動車市場の縮小などによる自動車生産減速の影響を受けました。

以上の結果、外部顧客への売上高は、398,160百万円(前期比1.2%増)と増収となりました。事業利益は、米国で生産性悪化、鋼材価格上昇や販売減速により収益性が悪化したほか、ブラジルでの急激な売上減少、メキシコでの新製品立ち上げコストの増加などにより収益性が悪化したことから、7,771百万円(前期比20.4%減)と減益になりました。

<一般産業用品>

インフラ分野では、中国における建設・土木機械の需要が増加したことから、高圧ホースの販売が増加しました。一方、エレクトロニクス分野のプリンター向け機能部品は、需要減速により減収となりました。住環境分野は、制震ダンパーが減収となりました。

以上の結果、外部顧客への売上高は71,545百万円(前期比3.0%増)となりました。事業利益は、プリンター向け機能部品、鉄道部品や制震ダンパーの販売減少により生産性が低下したため、1,608百万円(前期比48.0%減)と減益になりました。

生産、受注及び販売の実績は、次のとおりであります。

当社グループの生産・販売品目は広範囲かつ多種多様であり、同種の製品であっても、その容量、構造、形式等は必ずしも一様ではなく、また受注生産形態をとらない製品も多く、セグメントごとに生産規模及び受注規模を金額あるいは数量で示すことはしておりません。

このため生産、受注の状況については、セグメントの業績に関連付けて示しております。

販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比(%)
自動車用品(百万円)	398,160	1.2
一般産業用品(百万円)	71,545	3.0
合計(百万円)	469,705	1.5

(注) 1. セグメント間の取引16,452百万円については相殺消去しております。

2. 主な相手先の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
	金額	割合	金額	割合
トヨタ自動車(株)	百万円 62,018	% 13.4	百万円 61,941	% 13.2

3. 本表の金額には、消費税等は含まれておりません。

(3) 財政状態

< 資産 >

流動資産は199,016百万円(前連結会計年度末比2,802百万円減)となりました。これは、現金及び現金同等物が3,602百万円減少したことなどによるものです。非流動資産は198,263百万円(前連結会計年度末比14,152百万円減)となりました。これは主に、のれんや固定資産の減損損失を計上したことなどによるものです。

以上の結果、資産合計は、397,279百万円(前連結会計年度末比16,954百万円減)となりました。

< 負債 >

流動負債は116,140百万円(前連結会計年度末比2,656百万円増)となりました。これは1年内返済予定の長期借入金が増加したことなどによるものです。非流動負債は104,541百万円(前連結会計年度末比11,749百万円減)となりました。これは主に長期借入金が増加したことなどによるものです。

以上の結果、負債合計は220,681百万円(前連結会計年度末比9,093百万円減)となりました。

< 資本 >

資本合計は、176,598百万円(前連結会計年度末比7,861百万円減)となりました。これは㈱住理工ファインエラストマーの完全子会社化により資本剰余金が増加した一方、非支配持分が減少したほか、利益剰余金が配当により減少したことなどによるものです。親会社所有者帰属持分比率は39.9%となりました。

(4) キャッシュ・フロー

キャッシュ・フロー

当連結会計年度におけるキャッシュ・フローの状況について、現金及び現金同等物は、営業活動により31,462百万円の増加、投資活動により28,251百万円の減少、財務活動により8,368百万円減少、現金及び現金同等物に係る換算差額により1,555百万円の増加の結果、当連結会計年度末には38,371百万円となり、前連結会計年度末(41,973百万円)に比べ3,602百万円(8.6%)の減少となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動により得られた資金は、前連結会計年度(31,622百万円)に比べ160百万円減少し、31,462百万円となりました。これは、引当金の増減額が1,097百万円減少したことなどによるものです。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動により使用した資金は、前連結会計年度(27,445百万円)に比べ806百万円増加し、28,251百万円となりました。これは、株式売却によるその他の金融資産の売却による収入が883百万円減少したことなどによります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動により使用した資金は、前連結会計年度(6,127百万円)に対して2,241百万円増加し、8,368百万円となりました。これは、㈱住理工ファインエラストマーの完全子会社化に伴い、非支配持分からの子会社持分取得による支出を1,461百万円計上したことなどによるものです。

資本の財源及び資金の流動性

当社グループの資金需要のうち主なものは、事業運営に必要な設備資金や運転資金であり、必要資金については自己資金の充当及び金融機関からの借入や社債発行等により、調達しております。

なお、突発的な資金需要の発生や市場の流動性が著しく低下したときなどの緊急的な事態に備えてコミットメントラインを設定しております。

(5) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因や当該事項への対応については、「第2 事業の状況 1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」に記載のとおりであります。

(6) 経営方針、経営戦略、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループは、「売上高」、「事業利益」、「営業利益」、「営業利益率」、「ROA（総資産営業利益率）」、「ROE（親会社所有者帰属持分利益率）」を重要な指標として位置付けております。2018年5月24日公表の中期経営ビジョン「2022年 住友理工グループVision（2022V）」においては、2022年度の目標として、売上高530,000百万円、事業利益25,000百万円、営業利益25,000百万円、営業利益率5%、ROA6%、ROE7%をそれぞれ掲げております。

当連結会計年度においては、売上高469,705百万円（前連結会計年度比6,820百万円増）、事業利益9,379百万円（前連結会計年度比3,481百万円減）、営業利益1,153百万円（前連結会計年度比11,043百万円減）、営業利益率0.2%（前連結会計年度比2.4ポイント低下）、ROA0.3%（前連結会計年度比2.6ポイント低下）、ROE 3.1%（前連結会計年度は2.1%）でした。

(7) 経営成績等の状況の概要に係る主要な項目における差異に関する情報

IFRSにより作成した連結財務諸表における主要な項目と日本基準により作成した場合の連結財務諸表におけるこれらに相当する項目との差異に関する事項

（のれんの償却）

日本基準においては、のれんを定期的に償却しておりましたが、IFRSでは移行日以降の償却を停止しております。この影響により、当連結会計年度にて、IFRSでは日本基準に比べて、販売費及び一般管理費が1,205百万円減しております。

（無形資産）

日本基準において費用処理しておりました一部の開発費について、IFRSにおいては資産計上要件を満たすことから、無形資産に計上しております。この影響により、当連結会計年度にて、IFRSでは日本基準に比べて、無形資産が9,927百万円増加しております。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

当社グループは、事業を取り巻く環境がダイナミックに変化する中、将来に向けて持続的に成長・発展するために新事業の創出が不可欠であることから、当社グループのコア技術である高分子材料技術と総合評価技術をベースに外部技術との融合・協業を促進し、スピーディーな新技術の創出とタイムリーな商品開発を目指しています。

研究開発にあたっては、新機能・高品質の材料設計開発を担う材料技術部と、当社グループのコア技術の深化、データサイエンス、シミュレーション技術開発を担う基盤材料開発研究所で進めています。また、福岡県糸島市および九州大学との3者協定に基づき2016年4月に開所した「九州大学ヘルスケアシステムLABO糸島」（愛称：ふれあいラボ）において医療・介護・日常生活をつなぐ新たな製品やシステム、サービスの創出を目指し、実証研究と実用化促進に引き続き取り組んでいます。

なお、当連結会計年度における当社グループ全体の研究開発費の総額は15,002百万円であります。

セグメント別の研究開発活動を示すと、次のとおりであります。

自動車用品

自動車用品分野においては、「新規顧客開拓」を推進する体制を整え、「防振ゴム」「ホース」「ウレタン製品（制遮音品・内装品）」の既存3分野以外の自動車用新商品を開発・育成していくために、2016年8月に設置した「自動車新商品開発センター」において、体圧を検知する「スマートラバー（SR）センサ」を自動車のシートに埋め込み、呼吸や心拍などのバイタル情報によってドライバーの異変を検知、危険を回避する乗員状態検知機能の実用化に向けた開発や、電気自動車（EV）および燃料電池自動車（FCV）向けの環境対応製品の技術開発などに引き続き取り組んでおります。EV化によって、モーターやバッテリーの過熱を防ぐ製品の需要が増大すると見ており、これらの開発を進めています。特に熱マネジメントシステムの開発においては、2017年4月に名古屋大学との間で、「有機材料の熱マネジメント展開に関する共同研究」契約を締結し、自動車の電動化を見据えた共同研究を進めています。

当連結会計年度における自動車用品に係る研究開発費は、12,204百万円であります。

一般産業用品

エレクトロニクス分野においては水現像フレキシソ版材や、高機能、高精度部品の材料開発を積極的に進めております。インフラ・住環境分野およびヘルスケア分野では、鉄道車両用防振ゴム・高圧ホース等のコア技術の強化・再構築を図るとともに、住宅市場といった新たな分野での展開を行い、事業体質の強化・新規事業の創出を図っております。このような中、IoT化技術開発推進、センサ、アクチュエータ新商品の開発効率及び製法開発含めた開発スピード向上のため、「IoTデバイスセンター」を2018年9月に新設しました。

当連結会計年度における一般産業用品に係る研究開発費は、2,798百万円であります。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度における設備投資は、全体で31,074百万円（有形固定資産及び無形資産受入ベースの数値）でありました。

自動車用品事業では、当社及び海外子会社の自動車用防振ゴム、ホースの生産設備を中心に24,225百万円の投資を行いました。一般産業用品事業では、当社及び国内子会社の精密樹脂製品生産設備を中心に6,849百万円の投資を行いました。

なお、当連結会計年度において、重要な設備の除却、売却等はありません。

2 【主要な設備の状況】

当社及び連結子会社における主要な設備は、以下のとおりであります。

なお、IFRSに基づく帳簿価額にて記載しております。

(1) 提出会社

(2019年3月31日現在)

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)
			建物 及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積千㎡)	その他	合計	
本社及び 小牧製作所 (愛知県小牧市 及び名古屋市)	自動車用品、 一般産業用品 及び全社(共通)	防振ゴム、ホース、 樹脂製品及びその他 の生産設備他	9,732	8,786	3,238 (361)	3,610	25,366	2,250 (452)
松阪製作所 (三重県松阪市)	自動車用品	ホースの生産設備	1,927	1,748	1,161 (66)	81	4,917	402 (81)
富士裾野製作所 (静岡県裾野市)	自動車用品及び 一般産業用品	防振ゴム、樹脂 製品の生産設備	3,057	2,918	2,682 (124)	170	8,827	381 (76)

(注) 本社及び小牧製作所の土地には、(株)住理工九州に賃貸している土地710百万円(57千㎡)が含まれております。

(2) 国内子会社

(2019年3月31日現在)

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)
				建物 及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積千㎡)	その他	合計	
東海化成工業(株)	本社 (岐阜県可児郡)	自動車 用品	制遮音、 内装品の 生産設備	949	967	961 (51)	847	3,724	434 (166)
(株)住理工大分AE	本社 (大分県 豊後高田市)	一般産業 用品	精密樹脂ブ レード・ロー ルの生産設備	2,405	2,244	1,958 (115)	174	6,781	276 (4)
(株)住理工ファイ ン エ ラ ス ト マー	本社 (埼玉県上尾市)	一般産業 用品	ゴムシール材 の生産設備	2,048	2,618	591 (19)	691	5,948	276 (27)
(株)住理工九州	本社 (大分県 豊後高田市)	自動車 用品	防振ゴムの 生産設備	1,652	1,165	()	198	3,015	188 (9)
住友理工ホース テックス(株)	本社 (京都府綾部市)	一般産業 用品	高圧ホース・ 搬送用ホース の生産設備	1,033	2,694	116 (131)	135	3,978	406 (39)

(3) 在外子会社

(2019年3月31日現在)

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)
				建物 及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積千㎡)	その他	合計	
SumiRiko Ohio, Inc.	本社 (米国オハイオ州)	自動車 用品	防振ゴムの 生産設備	1,211	2,941	89 (227)	849	5,090	606 (62)
SumiRiko Tennessee, Inc.	本社等 (米国テネシー州)	自動車 用品	防振ゴム、 ホースの 生産設備	4,671	8,114	60 (444)	1,508	14,353	1,566 (200)
S-Riko de Querétaro, S.A.P.I. de C.V.	本社 (メキシコ ケレタロ州)	自動車 用品	防振ゴムの 生産設備	1,275	3,109	577 (102)	352	5,313	971 ()
東海橡塑 (天津)有限公司	本社 (中国天津市)	自動車 用品	防振ゴム、 ホースの 生産設備	1,164	1,769	()	893	3,826	1,300 ()
東海橡塑 (嘉興)有限公司	本社 (中国浙江省 嘉興市)	自動車 用品	防振ゴムの 生産設備	846	1,750	()	1,814	4,410	1,391 ()
東海橡塑 (広州)有限公司	本社 (中国広東省 広州市)	自動車 用品	防振ゴム、 ホースの 生産設備	876	2,898	()	1,150	4,924	1,357 ()
SumiRiko Eastern Rubber (Thailand) Ltd.	本社等 (タイ ラヨーン県)	自動車 用品	防振ゴム、 ホースの 生産設備	865	1,325	599 (137)	1,107	3,896	1,377 ()
SumiRiko Poland Sp. z o.o.	本社等 (ポーランド マウウォポルスカ県)	自動車 用品	防振ゴムの 生産設備	2,345	2,574	29 (81)	381	5,329	1,411 ()
SumiRiko Italy S.p.A.	本社等 (イタリア ピエモンテ州)	自動車 用品	ホースの 生産設備	1,271	2,715	235 (27)	195	4,416	648 (12)

(注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品、建設仮勘定の合計であります。

なお、金額には消費税等は含まれておりません。

2. 現在休止中の主要な設備はありません。

3. 従業員数は、就業人員であります。また、()は、臨時雇用者数を外書しております。

4. 上記の他、主要な賃借設備として、以下のものがあります。

在外子会社

(単位：百万円)

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	リース 期間	年間 リース料	リース 契約残高
SumiRiko Technical Center America, Inc.	本社 (米国ミシガン州)	自動車用品	土地・建屋	240ヶ月	39	135

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

重要な設備の新設等の計画はありません。

(2) 重要な設備の除却等

経常的な設備の更新のための除却等を除き、重要な設備の除却等の計画はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	400,000,000
計	400,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2019年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2019年6月21日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	104,042,806	104,042,806	東京証券取引所市場第一部 名古屋証券取引所市場第一部	1 単元(100株)
計	104,042,806	104,042,806		

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2003年4月1日～ 2004年3月31日	8,683	104,042	4,993	12,145	4,993	10,867

(注) 転換社債の株式転換による増加であります。

(5) 【所有者別状況】

(2019年3月31日現在)

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	26	22	419	135	7	3,972	4,581	
所有株式数(単元)	-	86,409	6,564	707,179	138,977	35	100,687	1,039,851	57,706
所有株式数の割合(%)	-	8.3	0.6	68.0	13.4	0.00	9.7	100.0	

- (注) 1. 自己株式214,409株は、「個人その他」に2,144単元及び「単元未満株式の状況」に9株含まれております。
 なお、自己株式214,409株は株主名簿記載上の株式数であり、期末日現在の実質的な所有株式数と一致して
 おります。
 2. 「その他の法人」欄には、証券保管振替機構名義の株式が2単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

(2019年3月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
住友電気工業(株)	大阪市中央区北浜四丁目5番33号	51,534	49.63
マルヤス工業(株)	名古屋市昭和区白金二丁目7番11号	10,901	10.50
フコク物産(株)	東京都大田区大森西二丁目32番7号	2,719	2.62
住友理工共栄持株会	名古屋市中村区名駅一丁目1番1号	2,311	2.23
日本マスタートラスト信託銀行(株)(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	1,969	1.90
STATE STREET LONDON CARE OF STATE STREET BANK AND TRUST, BOSTON SSBTC A/C UK LONDON BRANCH CLIENTS- UNITED KINGDOM (常任代理人 香港上海銀行東京支店)	ONE LINCOLN STREET, BOSTON MA USA (東京都中央区日本橋三丁目11番1号)	1,856	1.79
住友理工社員持株会	名古屋市中村区名駅一丁目1番1号	1,755	1.69
NORTHERN TRUST CO.(AVFC) RE NV101 (常任代理人 香港上海銀行東京支店)	50 BANK STREET CANARY WHARF LONDON E14 5NT, UK (東京都中央区日本橋三丁目11番1号)	1,681	1.62
STATE STREET BANK AND TRUST COMPANY 505019 (常任代理人 香港上海銀行東京支店)	AIB INTERNATIONAL CENTRE P.O. BOX 518 IFSC DUBLIN. IRELAND (東京都中央区日本橋三丁目11番1号)	1,407	1.36
日本トラスティ・サービス信託銀行(株)(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	1,340	1.29
計		77,473	74.63

(注) 2018年8月1日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書において、日本バリュー・インベスターズ株式会社が2018年7月31日現在で以下の株式を所有している旨が記載されているものの、当社として2019年3月31日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。

なお、大量保有報告書の内容は以下のとおりであります。
 大量保有者 日本バリュー・インベスターズ株式会社
 住所 東京都千代田区丸の内一丁目8番1号
 保有株券等の数 株式 5,575千株
 株券等保有割合 5.36%

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

(2019年3月31日現在)

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 214,400		1単元(100株)
完全議決権株式(その他)	普通株式 103,770,700	1,037,707	1単元(100株) (注1)
単元未満株式	普通株式 57,706		1単元(100株) 未満の株式(注2)
発行済株式総数	104,042,806		
総株主の議決権		1,037,707	

(注) 1. 「完全議決権株式(その他)」欄には、証券保管振替機構名義の株式200株(議決権2個)が含まれております。
2. 「単元未満株式」欄には、当社所有の自己株式9株が含まれております。

【自己株式等】

(2019年3月31日現在)

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数(株)	他人名義所有 株式数(株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式総数に対する 所有株式数の割合(%)
住友理工(株)	愛知県小牧市 東三丁目1番地	214,400		214,400	0.21
計		214,400		214,400	0.21

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	757	824,146
当期間における取得自己株式	116	114,540

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日からのこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消去の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他 (単元未満株式の売渡請求による売渡)				
保有自己株式数	214,409		214,525	

(注) 当期間における保有自己株式には、2019年6月1日からのこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式及び単元未満株主の売渡請求に基づく売渡しによる株式数は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社は、株主に対する利益還元を経営の重要政策の一つとして位置づけ、業績等を勘案した上で、長期にわたり安定的な配当を維持することを基本方針としております。また、内部留保については、財務体質の向上と国際競争力のある商品開発やコスト競争力を高めることに有効投資し、企業体質の強化などに活用していきます。

配当の実施については、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としており、これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。また、当社は、「取締役会の決議により、毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めております。

当事業年度の期末配当金は、連結財務状況や通期の連結業績等を勘案した結果、1株当たり4円とし、中間配当の10円と合わせて、年間配当金は前期比6円減配の1株当たり14円といたしました。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2018年10月30日 取締役会決議	1,038	10
2019年6月20日 定時株主総会決議	415	4

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

住友の事業は、今から約400年前に住友家初代住友友友が遺した商いの心得「文殊院旨意書（もんじゅいんしいがき）」を礎とし住友の先人により何代にもわたって深化・発展させてきた「住友事業精神」を精神的基盤として営まれてきました。住友事業精神の要諦は、明治期に「営業の要旨」に以下の2か条として端的に示されています。

第一条 我が住友の営業は、信用を重んじ確實を旨とし、以てその鞏固隆盛を期すべし（信用確實）

第二条 我が住友の営業は、時勢の変遷、理財の得失を計り、弛張興廃することあるべしと雖も、苟も浮利に趨り、軽進すべからず（不趨浮利）

当社は、自動車用品分野では海外企業の買収などにより新たな地域と顧客への事業展開を進め、産業用品分野では新領域の事業への進出を積極化させています。この第3の創業ともいべき事業の変革期における健全なリスクテイクを支えるために、取締役会機能の充実を中心としたガバナンス機能の強化を図ってまいります。

また、当社と成長の機会とリスクを共有する株主やその他のステークホルダーに対し財務情報や経営戦略・経営課題など非財務情報の適時適切な開示を行い、また経営陣幹部が株主との建設的な対話を行うための体制を整えてまいります。

当社は、住友電気工業株式会社を親会社としています。事業上の意思決定は親会社から独立して行っています。多数の海外拠点や多様な技術・顧客基盤を持つ親会社を有することで、当社の海外事業や新事業展開において支援を受けることができます。当社のガバナンスにおいては、株主共同の利益に配慮し親会社との健全な関係を維持してまいります。

さらに、当社は「住友事業精神」に基づき、SDGsなどに代表される社会的課題に対し、技術革新を通じて解決を図ります。そして、企業価値と公益価値を同時に向上させることで、社会的価値を創造し、社会とともに持続的に成長することを目指してまいります。

企業統治の体制

イ．企業統治の体制の概要と採用の理由

当社は、監査役設置会社の機構を採用し、取締役会の監督と監査役会の監視により業務執行の適法性及び妥当性を確保するものとしています。

取締役会の構成は、当社の事業分野、事業環境や規模を前提として、適切な経営の監視監督機能を果たすことができるかという視点で決定するものとしています。

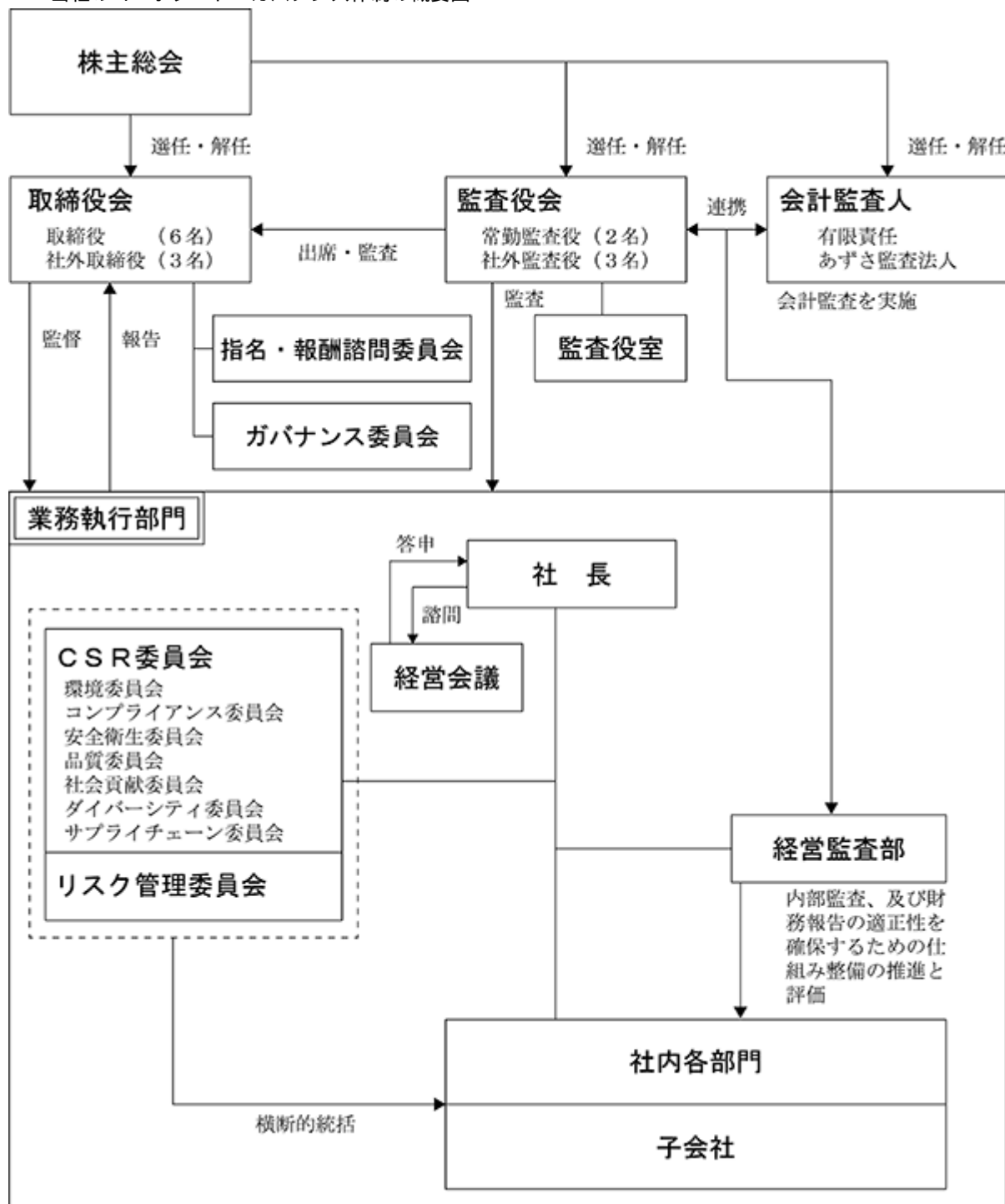
専門性の観点からは、現在、当社は既存事業のグローバル展開と新事業展開を積極的に進めており、これに対応して財務規模も拡大し、また潜在的な法務リスクも増加していることから、グローバル経営、新規事業、財務、会計及び法務分野における高度な知識や豊富な経験を有する人材を選任しています。

独立性の観点からは、独立役員要件を満たし、かつ高い専門性と見識を有する社外取締役及び社外監査役をそれぞれ複数選任しています。

ジェンダーや国際性の観点からは、女性の取締役を1名選任しています。現時点で外国人の取締役は選任していませんが、将来、社内からの登用の基盤として幹部社員の多様性を進めるためダイバーシティ委員会を設置し様々な施策を講じています。なお、執行役員としては3名の外国人を選任しています。

現在の取締役会は、取締役9名（うち社外取締役3名）と、監査役5名（うち社外監査役3名）からなる体制であり、事業分野を網羅し必要な専門性と社内外の役員数のバランスを確保しつつ実質的な討議を行うことができる適切な規模となっています。

当社のコーポレート・ガバナンス体制の概要図



ロ．企業統治に関するその他の事項

内部統制システムの整備の状況

・コンプライアンス体制の整備の状況

当社グループにおける取締役その他の役員及び使用人(以下、役職員)の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制(以下、コンプライアンス体制)は、信用確実及び不趨浮利を旨とする住友事業精神に基づき取締役会が決定する経営理念、事業運営の基本(「安全・環境・コンプライアンス・品質(S.E.C.-Q)」、グループ行動憲章、住友理工グループガバナンス・コード及びグローバルコンプライアンス行動指針(以下、行動指針等)に準拠して整備しております。当該体制は、当社各部門及び子会社において整備し、すべての役職員により運用されるものとしております。

子会社におけるコンプライアンス体制は、住友理工グループガバナンス・コード及びこの下で当社が定めるグループ規程により、その整備、運用がなされることを確保しております。グループ規程では、子会社の規模や事業内容に応じて整備すべきコンプライアンス体制の基準を定めております。また、当社グループにおけるコンプライアンスは、「単に法令遵守にとどまらず、社会の期待に応えること」という共通理解に基づき、社内規程及びその運用等は、定期的に見直し、これを整備しております。

法令及び社内規程に違反した役職員へは、当社又は子会社の規程に基づく懲戒を含め厳正に対処しております。また、当社グループは、贈収賄・腐敗行為防止をコンプライアンスにおける最重要課題のひとつとして位置付けており、贈収賄・腐敗行為防止に対する取組み及び社内体制の整備を強化しております。

当社グループは、グループのコンプライアンス体制の整備、運用を主導、統括する組織としてコンプライアンス委員会(以下、委員会)を当社に設けております。委員長は、取締役会決議により選任し、その活動状況は取締役会に報告しております。委員会は定期に開催し、監査役及び社外取締役が出席して意見を述べられるものとしております。委員会の委員又は事務局には、弁護士その他の企業法の専門知識を有する役職員を配置しております。委員会には独立した予算を設けております。

委員会は、定期に当社グループのコンプライアンスリスクを識別・評価し、対応計画を定め、委員会、当社各部門及び子会社における対応を把握し検証しております。委員会は、当社グループの役職員に対し行動指針やリスク評価に基づくコンプライアンス教育等を定期的に実施しております。また、役職員のコンプライアンス対応を支援するため、法務部門及び各分野のコンプライアンス対応を分掌する部門にコンプライアンス相談窓口を設けております。反社会的勢力に対しては、人事総務部門を中心として、当社及び子会社がこれとの一切の関係を遮断する体制を整備しております。

・リスク管理体制の整備の状況

当社グループにおけるリスク管理に関する体制は、取締役会が、当社グループのリスク選好、リスク許容度、経営に重大な影響を及ぼすすべてのリスクの規模及びそれらへの対応状況の認識を共有することで、当社グループ全体の戦略を最適化し、経営リスクを極小化するため適時に適切な判断を行えるものとしております。これらの体制は、取締役会が制定する当社の規程及びグループ規程に基づき以下のとおり整備しております。

当社グループは、リスク管理委員会を当社に設置し、グループのリスク管理体制の整備及び運用を統括しております。リスク管理委員会の委員長は、取締役会決議により選任し、そのリスク管理の状況は取締役会に報告しています。リスク管理委員会は定期に開催し、監査役及び社外取締役が出席して意見を述べられるものとし、委員会には委員又は事務局に企業のリスク管理の専門知識を有する役職員を置き、又は社外専門家の助言を受けられる体制とします。

リスク管理委員会は、定期的当社グループのリスクの識別、評価を実施し、各部門・子会社が策定するリスクの対応計画の妥当性を確認し、その遂行状況をモニターします。また、当社グループにおける重要なリスクを選定し、当該リスク、その対応計画及び対応の状況を取締役に報告します。なお、リスクの識別にあたっては、事業の国際化、新規事業分野への進出や外国法令の運用動向など内外の事業環境の変化を考慮しております。

また、リスク管理委員会は、震災、火災など急激かつ外来の災害によるリスクに対して、当社各部門及び子会社における災害対策計画及び不測事態対応計画の策定及び定期的な訓練・検証の状況を統括しております。

・子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

当社グループにおける子会社の業務の適正を確保するための体制は、「内部統制システムの整備に関する基本方針」に基づく体制の運用の状況の確認を行うとともに、内外の環境の変化等に対応し、その見直しを行うこととしております。主な整備の状況は以下のとおりです。

「当社及び子会社の取締役・使用人の職務執行が法令・定款に適合することを確保するための体制」に関して、「住友事業精神」の下、当社グループのグループガバナンスに関する基本的な指針等を規定した「住友理工グループガバナンス・コード」を制定し、グループ一体での経営体制の強化を進めております。

「当社及び子会社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制」に関して、競業取引および利益相反取引について、その管理の範囲に取締役に加えて執行役員および重要な使用人等も含める等、管理体制の拡張を図り、グループガバナンスの強化を進めております。

「監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制」に関して、基本方針に定める体制がすべて整備され適切に機能していることを確認しました。

八．責任限定契約の内容の概要

当社と社外取締役及び社外監査役は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、会社法第425条第1項に定める最低責任限度額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該社外取締役または社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

取締役の定数

当社は取締役の員数を3名以上とする旨定款に定めております。

取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。

取締役会にて決議できる株主総会決議事項

当社は、以下について株主総会の決議によらず、取締役会で決議することができる旨定款に定めております。

イ．自己株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議をもって、自己株式を取得することができる旨を定款に定めております。これは、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行を可能とするため、市場取引等により自己株式を取得することを目的とするものであります。

ロ．中間配当

当社は、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨定款に定めております。これは、株主への機動的な利益還元を可能にするためであります。

株主総会の特別決議要件

当社は、株主総会の円滑な運営を行うことを目的として、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。

(2)【役員の状況】

役員一覧

男性13名 女性1名(役員のうち女性の比率8%)

役名及び職名	氏名 (生年月日)	略歴	任期	所有 株式数 (千株)
代表取締役 (社長)	松井 徹 (1954年6月20日生)	1979年 4月 当社入社 1999年 2月 同自動車技術統括本部 防振技術本部 第2 技術部長 2001年 6月 同防振事業部 防振技術本部長 2004年 6月 同取締役、防振事業部長 2005年 6月 同執行役員 2007年 6月 DTR Tennessee, Inc.(現 SumiRiko Tennessee, Inc.)社長 2009年 6月 当社常務執行役員 2013年 6月 当社専務執行役員 2014年 3月 同グローバル自動車営業本部長 2014年 6月 同取締役 2015年 6月 同代表取締役、C S R委員会 委員長(現) 同社長兼 C O O 2016年 1月 同リスク管理委員会 委員長(現) 2017年 6月 同社長(現)	(注3)	19
代表取締役 (執行役員副社長)	鈴木 洋治 (1954年9月5日生)	1977年 4月 トヨタ自動車工業(株)(現 トヨタ自動車(株))入社 2006年 1月 同上郷工場 第1 エンジン製造部長 2007年 1月 同上郷工場 工務部長 2011年 1月 Toyota Motor Manufacturing, West Virginia, Inc.社長 2014年 3月 当社常務執行役員 2014年 6月 Dytech-Dynamic Fluid Technologies S.p.A. (現 SumiRiko Italy S.p.A.)社長 2015年 6月 当社専務執行役員 2016年 1月 同自動車用ホース事業本部 欧州地域センター長 2017年 6月 同自動車用ホース事業本部長、環境委員会 委員長(現) 同取締役 2018年 6月 同代表取締役、執行役員副社長(現) (重要な兼職の状況) 東海橡塑(広州)有限公司 董事長 東海軟管(大連)有限公司 董事長 SumiRiko Italy S.p.A. 会長	(注3)	5
代表取締役 (執行役員副社長)	清水 和志 (1961年6月29日生)	1984年 4月 住友電気工業(株)入社 2001年 10月 (株)アドヴィックス 出向 2007年 2月 住友電気工業(株) 豊田支店第一電装システム営業部長 2010年 4月 同自動車事業本部 中部営業統括部長 2013年 6月 同執行役員、自動車事業本部 副本部長 2016年 6月 同常務執行役員 2018年 4月 当社専務執行役員 2018年 6月 同自動車事業統括本部 副本部長(現) 2019年 4月 同防振事業本部長、社会貢献委員会 委員長(現) 2019年 6月 同代表取締役、執行役員副社長(現)	(注3)	8
取締役 (専務執行役員)	大橋 武弘 (1955年9月16日生)	1986年 10月 当社入社 1999年 2月 同化成産事業部 生産本部 生産技術部長 2003年 6月 同化成産事業部 生産本部長 2007年 6月 東海橡塑(天津)有限公司 総経理 2009年 6月 当社執行役員 2010年 6月 同化成産事業部長 2012年 6月 同常務執行役員、I T・エレクトロニクス事業本部長 2014年 6月 同取締役(現) 2015年 6月 同専務執行役員(現) 2016年 6月 同研究開発本部長 同エレクトロニクス事業本部長 2019年 4月 同生産機能本部長、安全衛生委員会 委員長(現)	(注3)	6

役名及び職名	氏名 (生年月日)	略歴	任期	所有 株式数 (千株)
取締役 (専務執行役員)	前田 裕久 (1958年1月14日生)	1981年 4月 住友電気工業(株)入社 2007年 6月 同財務部長 2010年 1月 当社経理部長 2010年 6月 同執行役員 2013年 6月 同常務執行役員 2015年 6月 同取締役(現) 2018年 6月 同専務執行役員、ダイバーシティ委員会 委員長(現) (重要な兼職の状況) 住友理工企業管理(中国)有限公司 董事長 Sumitomo Riko (Asia Pacific) Ltd. 社長	(注3)	9
取締役 (常務執行役員)	花崎 雅彦 (1958年6月6日生)	1982年 4月 当社入社 2004年 2月 同防振事業部 防振品質保証部長 2008年 2月 同品質保証本部長 2009年 6月 同執行役員 2012年 11月 同自動車用ホース事業本部 自動車用ホース事業部長 2013年 6月 同常務執行役員(現) 2014年 10月 同自動車用ホース事業本部 副事業本部長 2016年 5月 同CQO(最高品質責任者)(現) 2016年 6月 同品質保証統括本部長(現) 2017年 6月 同品質委員会 委員長(現) 2018年 6月 同取締役(現)	(注3)	5
取締役	入谷 正章 (1950年1月4日生)	1976年 4月 弁護士登録 入谷法律事務所入所(現) 2006年 6月 当社社外監査役 2008年 4月 愛知県弁護士会 会長 2011年 6月 当社社外取締役(現) 2016年 7月 愛知県公安委員会 委員長 2019年 2月 同指名・報酬諮問委員会 委員長(現) (重要な兼職の状況) 入谷法律事務所 所長 (株)中央製作所 社外監査役 アイホン(株) 社外取締役 東陽倉庫(株) 社外監査役	(注3)	9
取締役	花形 滋 (1950年10月31日生)	1973年 4月 三井物産(株)入社 1989年 10月 Mitsui Machinery Sales (UK) Limited 社長 1996年 1月 Subaru Italia S.p.A. 社長 1999年 2月 三井物産(株) 本店自動車第2部長 2004年 4月 同本店機械本部 副本部長 2006年 4月 同執行役員 2007年 4月 同自動車本部長 2009年 4月 同常務執行役員、中部支社長 2014年 6月 当社社外取締役(現) 2019年 6月 同ガバナンス委員会 委員長(現)	(注3)	5
取締役	宮城 まり子 (1947年12月19日生)	1971年 4月 聖母病院精神神経科 臨床心理士 1991年 4月 産能大学(現 産業能率大学)経営情報学部 教授 1997年 8月 カリフォルニア州立大学大学院 教育学研究科 客員研究員 2002年 4月 立正大学 心理学部臨床心理学科 教授 2008年 4月 法政大学 キャリアデザイン学部 教授 法政大学大学院 キャリアデザイン学研究科 教授 2011年 4月 法政大学 キャリアセンター長 2012年 4月 日本キャリア教育学会 理事 2012年 10月 日本産業カウンセリング学会 会長 2015年 4月 立正大学大学院 社会心理学研究科 非常勤講師、 日本産業カウンセリング学会 名誉会長(現) 法政大学大学院 キャリアデザイン学研究科 研究科長 2018年 6月 当社社外取締役(現) (重要な兼職の状況) キャリア心理学研究所 代表 公益財団法人 オリックス宮内財団 理事 一般社団法人 ビューティフルエージング協会 副会長	(注3)	

役名及び職名	氏名 (生年月日)	略歴	任期	所有 株式数 (千株)
常勤監査役	岡田 茂弘 (1947年9月6日生)	1970年 4月 当社入社 1996年 4月 同自動車用防振事業部製造本部長 2000年 6月 同取締役 2001年 6月 DTR Industries, Inc.(現 SumiRiko Ohio, Inc.) 社長 2003年 6月 当社常務取締役 2005年 6月 同常務執行役員 2006年 6月 同専務執行役員 2011年 6月 同常勤顧問 2012年 6月 同常勤監査役(現)	(注4)	2
常勤監査役	尾崎 俊彦 (1952年2月12日生)	1975年 4月 住友電気工業(株)入社 1999年 7月 同東京経理部長 2001年 6月 当社経理部長 2003年 6月 同取締役 2005年 6月 同執行役員、経営企画室長 2006年 6月 同常務執行役員 2008年 6月 同専務執行役員 2012年 6月 同執行役員副社長 2014年 6月 同代表取締役 2018年 6月 同常勤監査役(現)	(注5)	15
監査役	増田 宏一 (1944年1月23日生)	1969年 11月 公認会計士登録 1992年 7月 監査法人朝日新和会計社 (現 有限責任 あずさ監査法人)代表社員 2007年 7月 日本公認会計士協会 会長 2012年 6月 当社社外監査役(現) (重要な兼職の状況) 日本取引所自主規制法人 理事 (株)第四北陸フィナンシャルグループ 社外取締役 第一生命ホールディングス(株) 社外取締役	(注4)	11
監査役	長安 弘志 (1947年12月20日生)	1974年 4月 弁護士登録 アンダーソン・毛利・ラビノウィッツ法律事務所 (現 アンダーソン・毛利・友常法律事務所)入所 1984年 1月 同パートナー 1994年 9月 東西総合法律事務所開設 2014年 6月 当社社外監査役(現) (重要な兼職の状況) 日本データカード(株) 監査役 (株)パロックジャパンリミテッド 社外監査役 ヤンセンファーマ(株) 監査役	(注5)	8
監査役	稲山 秀彰 (1952年3月12日生)	1976年 4月 住友電気工業(株)入社 2000年 11月 同資材部長 2007年 6月 同執行役員、人材開発部長 2008年 6月 同常務取締役 2012年 6月 同専務取締役 2014年 6月 同常勤監査役 2017年 6月 同顧問(現) 2018年 6月 当社社外監査役(現) (重要な兼職の状況) 田岡化学工業(株) 社外取締役監査等委員	(注5)	
計				102

- (注1) 取締役 入谷正章、花形滋及び宮城まり子は、社外取締役であります。
- (注2) 監査役 増田宏一、長安弘志及び稲山秀彰は、社外監査役であります。
- (注3) 2019年6月20日開催の定時株主総会の終結から、選任後1年以内に終了する事業年度に関する定時株主総会終結の時まで
- (注4) 2016年6月16日開催の定時株主総会の終結から、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時まで
- (注5) 2018年6月21日開催の定時株主総会の終結から、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時まで
- (注6) 当社は、取締役会の意思決定の迅速化と監督機能の強化並びに権限及び責任の明確化による機動的な業務執行体制の確立を目的として、執行役員制度を導入しております。

執行役員は31名で、執行役員副社長 鈴木洋治、清水和志の2名、専務執行役員 大橋武弘、前田裕久の2名、常務執行役員 花崎雅彦、松岡勉、南野高伸、大島司、矢野勝久、Olaf Hahn、Charles Randall Rumbley、野田太郎、安田日出吉、和久伸一、水上勇夫の11名、執行役員 北村浩一、柴原彰広、高貝淳、仙田弘二、堤田譲治、増田弘和、森永聡、棚橋洋昭、流郷健二、日比野学、山田純一、田中真至、山田祐一、Giovanni Boe、濱田真彰、有賀雄一の16名で構成されております。

社外役員の状況

当社の社外取締役は3名、社外監査役は3名であります。

社外取締役 入谷正章氏は、企業法務の専門家であるとともに愛知県弁護士会会長、愛知県公安委員会委員長を歴任するなど事業を取り巻く幅広い分野で実績を挙げております。法律家として豊富な経験と高い見識を有する同氏は、当社社外取締役として適任であると考えております。また、同氏は入谷法律事務所の所長、(株)中央製作所の社外監査役、アイホン(株)の社外取締役及び東陽倉庫(株)の社外監査役であります。これらの会社と当社との間には特別な利害関係はありません。

社外取締役 花形滋氏は、世界規模で事業を展開する上場企業の執行役員として長年活躍するなど国内外の企業経営と事業運営で実績を挙げております。豊富な経験と高い見識を有する同氏は、当社社外取締役として適任であると考えております。

社外取締役 宮城まり子氏は、心理学やキャリアデザイン論の分野で顕著な業績を挙げております。臨床心理実務、教育研究及び組織運営において豊富な経験と高い見識を有する同氏は、当社社外取締役として適任であると考えております。また、同氏はキャリア心理学研究所の代表、公益財団法人オリックス宮内財団の理事、一般社団法人ビューティフルエイジング協会の副会長であります。これらの会社等と当社との間には特別な利害関係はありません。

社外監査役 増田宏一氏は、公認会計士として専門的かつ広範な会計知識を有しており、当社社外監査役として適任であると考えております。同氏は、当社の会計監査人である有限責任あずさ監査法人に2007年6月まで在籍しておりました。その後、日本公認会計士協会会長、財務会計基準機構評議員などを歴任し、現在は(株)第四北越フィナンシャルグループの社外取締役、第一生命ホールディングス(株)の社外取締役、及び日本取引所自主規制法人の理事であります。これらの会社等と当社との間には特別な利害関係はありません。

社外監査役 長安弘志氏は、弁護士として国際法務や医療ヘルスケア分野を含め広い領域で豊富な経験を有しております。法律家として豊富な経験と高い見識を有する同氏は、当社社外監査役として適任であると考えております。また、同氏は東西総合法律事務所のパートナー、日本データカード(株)の監査役、(株)パロックジャパンリミテッドの社外監査役、及びヤンセンファーマ(株)の監査役であります。これらの会社と当社との間には特別な利害関係はありません。

社外監査役 稲山秀彰氏は、当社の親会社である住友電気工業(株)において専務取締役、常勤監査役などを歴任しております。経営及び事業運営における豊富な経験と高い見識を有する同氏は、当社社外監査役として適任であると考えております。住友電気工業(株)は当社の親会社であります。その他当社との間に記載すべき関係はありません。

なお、当社は社外取締役及び社外監査役の独立性について金融商品取引所が定める独立性基準を満たすことを前提としつつ、企業経営や法務、会計等の専門領域における豊富な経験や知識と高い見識を有することにより、当社の経営課題に対し積極的かつ建設的な提言・提案を期待できることを要件としており、会社及び少数株主を害する事のない体制を構築しております。当社の社外取締役及び社外監査役は、専門分野における広範な知識及び経験に基づき、取締役会及び監査役会において指摘を行っております。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

a. 監査役と会計監査人の連携状況

監査役は、会計監査人と定期的に会合を保つなど、緊密な連携を保ち、積極的に意見・情報を交換しております。

監査役は、会計監査人から監査計画を受領し、会計監査人が把握した内部統制システムの状況等について意見・情報を引っ掛けております。

監査役は、必要に応じて、会計監査人の往査や監査講評に立会い、適宜報告を求めています。

会計監査人から、取締役の職務遂行に関して不正行為がある等の報告を受けた場合には、監査役は審議・調査のうえ、取締役に助言、勧告を行うこととなっています。

b. 監査役と内部監査部門の連携状況

当社では、内部監査部門である経営監査部を設けております。

監査役は、経営監査部から内部監査の結果等について報告を受けるとともに、必要に応じて調査、報告を求めています。

また、必要に応じて、内部監査に同行し、ヒアリングや往査を実施しています。

監査計画等の作成にあたっては、有効かつ効率的な監査を実施するため、経営監査部と協議、意見交換を行っております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

当社における監査役監査は、監査役会制度に基づき実施しております。常勤監査役2名および社外監査役3名で構成されています。

常勤監査役尾崎俊彦は、当社の親会社である住友電気工業(株)及び当社の経理・財務部門における長年の経験があり、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。社外監査役増田宏一は、公認会計士の資格を有しており、財務及び会計に関する相当程度の知識を有しております。また、社外監査役稲山秀彰は、当社の親会社である住友電気工業(株)の経理部門所管取締役としての経験があり、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

監査役会は、当事業年度においては14回開催し、監査計画やその結果等について審議しています。個々の監査役の出席状況については次のとおりです。

氏名	開催回数	出席回数	出席率
岡田 茂弘	14回	14回	100%
尾崎 俊彦	11回	11回	100%
増田 宏一	14回	12回	85.7%
長安 弘志	14回	14回	100%
稲山 秀彰	11回	11回	100%

尾崎俊彦氏及び稲山秀彰氏は、2018年6月21日開催の第130期定時株主総会において新たに監査役に選任され、就任しています。

監査役の監査が実効的に行われることを確保する体制に関しては、取締役会で決定した「内部統制システムの整備に関する基本方針」に基づき以下のような施策を講じています。

執行部門から独立した監査役室（3名）を設け、専任担当者が監査役の職務を補助しています。また、監査役は代表取締役と定期的に意見交換を行っています。さらに常勤監査役は、経営会議やCSR委員会等の重要な会議に出席し、各部門長から定期的に業務の状況を直接、聞き取っています。

監査役は、会計監査人と定期的に会合をもつ等、緊密な連携を保ち、積極的に意見・情報交換を行っております。また、必要に応じて会計監査人の往査や監査講評に立会い、適宜報告を求めています。

監査役は、経営監査部から内部監査の結果等について報告を受けるとともに、必要に応じて個別に調査、報告を求めています。また、必要に応じて、内部監査に同行し、ヒアリングや往査を実施しています。監査計画等の作成にあたっては、有効かつ効率的な監査を実施するため、経営監査部と協議、意見交換を行っております。

監査役は、グループ会社の監査役と定期的に会合をもつ等、積極的に意見・情報交換を行っております。

監査役は、2019年6月1日付で設置した「ガバナンス委員会」にオブザーバーとして出席することとしています。

3名の社外監査役の内、1名は、取締役会の諮問機関である「指名・報酬諮問委員会」にオブザーバーとして出席しております。

社外監査役は、社外取締役との間で、社外役員としての独立した客観的な立場から情報交換・認識共有等を図る目的で、社外役員意見交換会を年2回開催し、当該意見交換会の場で議論された内容を取締役にフィードバックしています。

内部監査の状況

当社は、内部監査の専門部署である経営監査部（13名）を設置し、法令遵守に加え業務やその管理の妥当性に対する継続的な実地監査を実施しております。

さらに経営監査部は、企業会計審議会が公表する評価・監査の基準並びに実施基準に沿った内部統制システムの整備を統括し、当社グループの各部門及び子会社における対応を支援し、財務報告の適正性を確保するための体制の一層の強化を図っています。またその実施状況等について監査役に報告を行っています。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任 あずさ監査法人

b. 業務を執行した公認会計士

福井 淳

川口 真樹

金原 正英

c. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士18名、会計士試験合格者等6名、その他6名であります。

d. 監査法人の選定方針と理由

当社の監査役及び監査役会は、監査関係業務について当該監査法人の対応状況等は妥当と認められること、当該監査法人からの監査品質等に関する説明の内容は妥当であること、及び執行部からも当該監査法人の再任について推薦があったことを踏まえ、会計監査人の解任又は不再任の決定の方針(*)に該当する事情の有無のほか、当該監査法人の内部管理体制、監査報酬の水準、独立性、知識・経験・能力、海外対応力、会社とのコミュニケーションの各項目について評価した結果、当該監査法人を再任することは妥当と判断し、会計監査人として選定しております。

(*)会計監査人の解任又は不再任の決定の方針

当社では、会計監査人が会社法第340条第1項各号のいずれかに該当したと判断した場合には、監査役会は、監査役全員の同意に基づき会計監査人を解任します。また、会計監査人の職務状況等を勘案し、会計監査人が継続してその職務を全うする上で重要な疑義を抱く事象があったと判断した場合には、会計監査人の解任もしくは不再任を株主総会の目的とします。

e. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

監査役及び監査役会は、当該監査法人の内部管理体制、監査報酬の水準、独立性、知識・経験・能力、海外対応力、会社とのコミュニケーションの各項目について評価した結果、それぞれ再任することが妥当な水準にあると判断しております。

監査報酬の内容等

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」（平成31年1月31日 内閣府令第3号）による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56) d (f) から の規定に経過措置を適用しております。

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	86	3	87	13
連結子会社	18		20	
計	104	3	107	13

当社における非監査業務の内容は、次のとおりであります。

（前連結会計年度）

IFRSに関するアドバイザー業務及び社債発行に関する業務

（当連結会計年度）

IFRSに関するアドバイザー業務

b. その他重要な報酬の内容

（前連結会計年度）

当社の連結子会社であるSumitomo Riko America, Inc.、SumiRiko AVS Holding Germany GmbH、SumiRiko Italy S.p.A.、東海橡塑(嘉興)有限公司等は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているKPMGグループに対して、合計218百万円の監査報酬を支払っております。

（当連結会計年度）

当社の連結子会社であるSumitomo Riko America, Inc.、SumiRiko AVS Holding Germany GmbH、SumiRiko Italy S.p.A.、S-Riko de Querétaro, S.A.P.I. de C.V.等は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているKPMGグループに対して、合計242百万円の監査報酬を支払っております。

c. 監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬の決定方針は、当社の事業規模、監査日数及び業務の特性等を勘案して決定しております。

d. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社監査役会は、監査項目別監査時間及び監査報酬の推移並びに過年度の監査計画と実績の状況を確認し、当事業年度の監査時間及び報酬額の見積りの妥当性を検討した結果、会計監査人の報酬につき、会社法第399条第1項の同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する事項

当社は、役員の報酬について、取締役会の諮問機関である指名・報酬諮問委員会の答申に基づき、中長期的な会社業績や潜在リスクを反映させ、健全な企業家精神の発揮に資する観点で方針および制度を定めております。指名・報酬諮問委員会は、当社が取締役会決議に基づき設置している任意機関で、代表取締役1名、社外取締役3名および社外監査役1名（オブザーバー）で構成され、取締役会の諮問により、取締役の報酬および賞与に関する事項ならびに株主総会に提出する取締役および監査役の選任および解任に関する議案の内容等について審議・答申するものとしています。

取締役の報酬については、職位に応じた基本報酬（固定報酬）、ならびに、各取締役の成果および当社グループの業績に応じて変動する賞与（業績連動報酬）で構成しております。また、取締役の固定報酬限度額は、総額350百万円であります。社外取締役に対しては、賞与の支給はしていません。

監査役の報酬については、監査役会の協議により決定しており、経営に対する独立性を確保するため全額を基本報酬（固定報酬）としております。監査役の報酬限度額は、総額100百万円としております。

なお、当期については、業績結果を厳粛かつ真摯に受け止め、経営責任を明確にするため、取締役報酬の減額および賞与の不支給を決定しております。また、監査役から監査役報酬の一部自主返上の申し入れがありました。

役員報酬等

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)			対象となる 役員の員数 (名)
		固定報酬	業績連動報酬	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	279	272	-	7	9
監査役 (社外監査役を除く。)	57	57	-	-	3
社外役員	83	83	-	-	7

(注) 当社は、2006年6月27日開催の第118期定時株主総会の日をもって取締役及び監査役の役員退職慰労金制度を廃止し、同株主総会終結後引続いて在任する取締役及び監査役に対しては、退職慰労金制度廃止まで在任期間に対応する退職慰労金を各氏の退任時に贈呈することを決議しております。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

区分	考え方
政策保有株式	銘柄先との長期的・安定的な関係の維持・強化、事業戦略上のメリットの享受等がはかられ、対象先及び当社の企業価値の向上に資すると判断し、保有する株式（主に持合い株）
純投資株式	専ら株式の価値の変動又は配当の受領によって利益を得ることを目的とする株式

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

- a. 保有方及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容
当社は、政策保有目的で上場株式を保有する場合は、保有の目的が当社の中長期的な企業価値向上の観点から合理性があり、かつその株式数、リターン及び当該株式発行会社との関係が、当該保有目的に照らして妥当なものであることを要するものとしています。

政策保有株式を取得又は処分する場合は、一定規模以上のものについて常務執行役員以上で構成される経営会議又は取締役会に付議又は報告するものとしています。その場合においては、保有のねらい・合理性について具体的な説明を行います。

保有中の個別の政策保有株式については、保有目的に鑑み、毎年定期的リスクとリターン、資本コストなどを踏まえた中長期的な経済合理性や将来の見通しの検証を行い、その結果を取締役に報告するものとしています。

保有中の政策保有株式に対する議決権公使は、その保有目的の達成に資するかという観点により判断します。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	24	190
非上場株式以外の株式	4	164

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	-	-	-
非上場株式以外の株式	3	103	営業上の取引関係の維持・強化

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	1	0
非上場株式以外の株式	1	1,464

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
住友不動産(株)	21,500	-	(保有目的)営業上の取引関係の維持・強化 (定量的な保有効果)(注) (株式数が増加した理由)取引関係の維持・ 強化を目的とした株式の取得	無
	99	-		
東海旅客鉄道(株)	2,000	2,000	(保有目的)営業上の取引関係の維持・強化 (定量的な保有効果)(注)	無
	51	40		
本田技研工業(株)	2,734	2,298	(保有目的)営業上の取引関係の維持・強化 (定量的な保有効果)(注) (株式数が増加した理由)取引先持株会を通 じた株式の取得	無
	8	8		
いすゞ自動車(株)	4,307	3,542	(保有目的)営業上の取引関係の維持・強化 (定量的な保有効果)(注) (株式数が増加した理由)取引先持株会を通 じた株式の取得	無
	6	6		

(注) 定量的な保有効果については記載が困難であります。保有の合理性は、2019年3月31日を基準として、リスクとリターン、資本コストなどを踏まえた中長期的な経済合理性や将来の見通しについて検証しております。

みなし保有株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
トヨタ自動車(株)	-	218,600	-	無
	-	1,492		

(注) 当事業年度において、退職給付信託を解約したことにより、みなし保有株式はありません。なお、解約により返還された株式につきましては、当事業年度において売却しております。

保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号。以下、「連結財務諸表規則」という。)第93条の規定により、国際会計基準(以下、「IFRS」という。)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下、「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人により監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組み及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備について

当社は、以下のとおり連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組み及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成するための体制の整備を行っております。

(1) 会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等に適時かつ的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、研修等へ参加しております。また、IFRSの内容に関する社内勉強会を定期的実施し、実務担当者へのIFRSに関する知識の習得を推進しております。

(2) IFRSの適用においては、国際会計基準審議会が公表するプレスリリースや基準書を随時入手し、最新の基準の把握を行っております。また、IFRSに基づく適正な連結財務諸表等を作成するために、IFRSに準拠したグループ会計方針を作成し、それに基づいて会計処理を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結財政状態計算書】

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産			
流動資産			
現金及び現金同等物	7,19	41,973	38,371
営業債権及びその他の債権	8,19	96,293	92,892
棚卸資産	9	53,599	57,002
未収法人所得税		999	3,290
その他の金融資産	19	550	887
その他の流動資産		8,404	6,574
流動資産合計		201,818	199,016
非流動資産			
有形固定資産	10,12	156,297	154,335
のれん	11	5,622	645
無形資産	11,12	21,834	19,687
持分法で会計処理されている投資	30	4,435	4,014
繰延税金資産	17	2,215	2,199
退職給付に係る資産	16	10,795	8,694
その他の金融資産	19	7,632	6,730
その他の非流動資産		3,585	1,959
非流動資産合計		212,415	198,263
資産合計		414,233	397,279
負債			
流動負債			
営業債務及びその他の債務	13,19	82,566	80,921
社債及び借入金	14,19	9,292	15,065
未払法人所得税		2,508	1,720
引当金	15	3,446	2,375
その他の金融負債	19	1,845	3,980
その他の流動負債		13,827	12,079
流動負債合計		113,484	116,140
非流動負債			
社債及び借入金	14,19	96,755	87,305
繰延税金負債	17	6,513	5,400
退職給付に係る負債	16	7,962	8,224
引当金	15	617	561
その他の金融負債	19	654	523
その他の非流動負債		3,789	2,528
非流動負債合計		116,290	104,541
負債合計		229,774	220,681
資本			
資本金	21	12,145	12,145
資本剰余金	21	10,729	12,051
利益剰余金		142,201	135,284
自己株式	21	270	271
その他の資本の構成要素	21	426	890
親会社の所有者に帰属する持分合計		164,379	158,319
非支配持分	29	20,080	18,279
資本合計		184,459	176,598
負債及び資本合計		414,233	397,279

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	6,18	462,885	469,705
売上原価	22	392,936	402,444
売上総利益		69,949	67,261
販売費及び一般管理費	22	57,242	57,723
持分法による投資利益又は損失()	30	153	159
事業利益	6	12,860	9,379
その他の収益	24	1,405	1,355
その他の費用	24	2,069	9,581
営業利益		12,196	1,153
金融収益	23	365	693
金融費用	23	1,276	1,146
税引前当期利益		11,285	700
法人所得税費用	17	5,482	3,606
当期利益又は損失()		5,803	2,906
当期利益の帰属			
親会社の所有者		3,528	5,022
非支配持分	29	2,275	2,116
当期利益又は損失()		5,803	2,906
1株当たり当期利益			
基本的1株当たり 当期利益又は損失()(円)	26	33.98	48.37

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期利益又は損失()		5,803	2,906
その他の包括利益			
純損益に振り替えられることのない項目			
その他の包括利益を通じて公正価値で測定される 金融資産	25	783	538
確定給付制度の再測定	25	1,074	96
持分法によるその他の包括利益	25	6	6
純損益に振り替えられる可能性のある項目			
在外営業活動体の為替換算差額	25	109	404
キャッシュ・フロー・ヘッジ	25	88	36
持分法によるその他の包括利益	25	188	214
その他の包括利益合計		2,236	414
当期包括利益		8,039	3,320
当期包括利益の帰属			
親会社の所有者		5,162	5,585
非支配持分		2,877	2,265
当期包括利益		8,039	3,320

【連結持分変動計算書】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	注記	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	その他の資本の構成要素	
						その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産	確定給付制度の再測定
2017年4月1日残高		12,145	10,729	139,474	269	3,686	
当期利益又は損失() その他の包括利益	25			3,528		777	1,065
当期包括利益合計				3,528		777	1,065
自己株式の取得及び処分 剰余金の配当 利益剰余金へ振替 その他	21 21			2,077 1,274 2	1	209	1,065
所有者との取引額等合計				801	1	209	1,065
2018年3月31日残高		12,145	10,729	142,201	270	4,254	

	注記	その他の資本の構成要素			親会社の所有者に帰属する持分合計	非支配持分	資本合計
		在外営業活動体の為替換算差額	キャッシュ・フロー・ヘッジ	合計			
2017年4月1日残高		4,108	364	786	161,293	18,496	179,789
当期利益又は損失() その他の包括利益	25	296	88	1,634	3,528 1,634	2,275 602	5,803 2,236
当期包括利益合計		296	88	1,634	5,162	2,877	8,039
自己株式の取得及び処分 剰余金の配当 利益剰余金へ振替 その他	21 21			1,274	1 2,077 2	1,293	1 3,370 2
所有者との取引額等合計				1,274	2,076	1,293	3,369
2018年3月31日残高		4,404	276	426	164,379	20,080	184,459

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	注記	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	その他の資本の構成要素	
						その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産	確定給付制度の再測定
2018年4月1日残高		12,145	10,729	142,201	270	4,254	
会計方針の変更の影響				281			
修正再表示後期首残高		12,145	10,729	142,482	270	4,254	
当期利益又は損失()				5,022			
その他の包括利益	25					545	87
当期包括利益合計				5,022		545	87
自己株式の取得及び処分	21				1		
剰余金の配当	21			2,077			
支配継続子会社に対する持分変動	29		1,322				
利益剰余金へ振替				99		12	87
所有者との取引額等合計			1,322	2,176	1	12	87
2019年3月31日残高		12,145	12,051	135,284	271	3,721	

	注記	その他の資本の構成要素			親会社の所有者に帰属する持分合計	非支配持分	資本合計
		在外営業活動体の為替換算差額	キャッシュ・フロー・ヘッジ	合計			
2018年4月1日残高		4,404	276	426	164,379	20,080	184,459
会計方針の変更の影響				-	281	-	281
修正再表示後期首残高		4,404	276	426	164,660	20,080	184,740
当期利益又は損失()					5,022	2,116	2,906
その他の包括利益	25	33	36	563	563	149	414
当期包括利益合計		33	36	563	5,585	2,265	3,320
自己株式の取得及び処分	21				1		1
剰余金の配当	21				2,077	1,283	3,360
支配継続子会社に対する持分変動	29				1,322	2,783	1,461
利益剰余金へ振替				99			
所有者との取引額等合計				99	756	4,066	4,822
2019年3月31日残高		4,371	240	890	158,319	18,279	176,598

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー			
税引前当期利益		11,285	700
減価償却費及び償却費		28,766	29,781
減損損失		405	7,178
持分法による投資損益(は益)		153	159
受取利息及び受取配当金		333	253
支払利息		986	1,047
営業債権及びその他の債権の増減額(は増加)		5,491	2,706
棚卸資産の増減額(は増加)		3,459	3,811
営業債務及びその他の債務の増減額(は減少)		4,443	661
引当金の増減額(は減少)		88	1,009
その他		2,040	3,988
小計		38,577	39,825
利息及び配当金の受取額		348	303
利息の支払額		1,003	1,033
法人所得税の支払額		6,300	7,633
営業活動によるキャッシュ・フロー		31,622	31,462
投資活動によるキャッシュ・フロー			
有形固定資産及び無形資産の取得による支出		30,145	29,978
有形固定資産及び無形資産の売却による収入		383	453
その他の金融資産の売却による収入		2,347	1,464
その他		30	190
投資活動によるキャッシュ・フロー		27,445	28,251
財務活動によるキャッシュ・フロー			
短期借入金の純増減額(は減少)	20	1,981	1,020
長期借入金及び社債の発行による収入	20	14,921	1,000
長期借入金の返済及び社債の償還による支出	20	15,045	5,012
非支配持分からの子会社持分取得による支出		-	1,461
配当金の支払額		2,077	2,077
非支配持分への配当金の支払額		1,293	1,283
その他	20	652	555
財務活動によるキャッシュ・フロー		6,127	8,368
現金及び現金同等物に係る換算差額		69	1,555
現金及び現金同等物の増減額(は減少)		1,881	3,602
現金及び現金同等物の期首残高	7	43,854	41,973
現金及び現金同等物の期末残高	7	41,973	38,371

【連結財務諸表注記】

1. 報告企業

住友理工(株)(以下、「当社」という。)は、日本に所在する株式会社であります。当社の連結財務諸表は2019年3月31日を期末日とし、当社及び子会社(以下、「当社グループ」という。)並びに当社の関連会社により構成されております。当社グループの主な事業内容は、注記「6.セグメント情報」に記載しております。

なお、当社の親会社は住友電気工業(株)であります。

2. 作成の基礎

(1) 連結財務諸表がIFRSに準拠している旨の記載

当社グループの連結財務諸表は、連結財務諸表規則第1条の2に定める「指定国際会計基準特定会社」の要件をすべて満たすことから、同第93条の規定により、IFRSに準拠して作成しております。

本連結財務諸表は、2019年6月20日に取締役会によって承認されております。

(2) 測定の基礎

連結財務諸表は、注記「3.重要な会計方針」に記載している金融商品等を除き、取得原価を基礎として測定しております。

(3) 表示通貨及び単位

連結財務諸表の表示通貨は、当社の機能通貨である日本円であり、百万円未満を四捨五入しております。

(4) 会計方針の変更

当社グループは、当連結会計年度より以下の基準を適用しております。

IFRS		新設・改訂内容
IFRS第15号	顧客との契約から生じる収益	収益認識に関する会計処理及び開示を規定

当社グループは、当連結会計年度よりIFRS第15号「顧客との契約から生じる収益」(2014年5月公表)及び「IFRS第15号の明確化」(2016年4月公表)(合わせて以下「IFRS第15号」という。)を適用しております。

IFRS第15号の適用にあたっては、経過措置として認められている、本基準の適用による累積的影響を適用開始日に認識する方法を採用しております。

IFRS第15号の適用に伴い、下記の5ステップを適用することにより収益を認識しております。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：取引価格を契約における履行義務に配分する。

ステップ5：履行義務の充足時に(又は充足するにつれて)収益を認識する。

当社グループは、自動車用品セグメントにおいては、防振ゴム、ホース、内装品、制音品などを国内外の顧客に提供しており、一般産業用品セグメントにおいては、精密樹脂ブレード・ロール、車両用・住宅用・橋梁用・電子機器用防振ゴム、高圧ホース・搬送用ホース、ゴムシール材などを国内外の顧客に提供しております。これらの製品については、顧客に製品を引き渡した時点で、履行義務を充足したと判断し、同時点で収益を認識しております。また、収益は、顧客との契約において約束された対価から値引等の見積りを控除した金額で算定しております。

この結果、従前の会計基準を適用した場合と比較して、連結財務諸表の当連結会計年度の期首において、利益剰余金が281百万円増加しております。また、当連結会計年度の連結財務諸表に与える影響は軽微であります。

3. 重要な会計方針

以下に記載されている会計方針は、他の記載がない限り、連結財務諸表に記載されているすべての期間において、継続的に適用されております。

(1) 連結の基礎

子会社

子会社とは、当社グループにより支配されている企業をいいます。支配とは、当社グループがある企業への関与により生じる変動リターンに対するエクスポージャー又は権利を有し、かつ、当該企業に対するパワーにより当該リターンに影響を及ぼす能力を有していることをいいます。子会社は当社グループが支配を獲得した日から連結を開始し、支配を喪失した日以降は連結を中止しております。

当社グループ内の債権債務残高及び取引、並びに当社グループ内取引から生じた未実現損益は、連結財務諸表の作成にあたり消去しております。

子会社の包括利益については、非支配持分が負の残高となる場合であっても、親会社の所有者と非支配持分に帰属させております。

連結財務諸表には、決算日を親会社の決算日に統一することが、子会社の所在する現地法制度上不可能である等の理由により、親会社の決算日と異なる日を決算日とする子会社の財務諸表が含まれております。当該子会社の決算日と親会社の決算日の差異は3ヶ月を超えることはありません。

連結財務諸表の作成に用いる子会社の財務諸表を親会社と異なる決算日で作成する場合、その子会社の決算日と親会社の決算日との間に生じた重要な取引又は事象については調整を行っております。

支配が継続する子会社に対する当社グループの持分変動については、資本取引として会計処理しております。非支配持分の調整額と対価の公正価値との差額は、親会社の所有者に帰属する持分として資本に直接認識しております。

関連会社

関連会社とは、当社グループが当該企業の財務及び経営方針に対して重要な影響力を有しているものの、支配又は共同支配は有していない企業をいいます。関連会社については、当社グループが重要な影響力を有することとなった日から重要な影響力を喪失する日まで、持分法によって会計処理しております。

連結財務諸表には、決算日を親会社の決算日に統一することが、関連会社の所在する現地法制度上不可能である等の理由により、親会社の決算日と異なる日を決算日とする関連会社への投資が含まれております。決算日の差異により生じる期間の重要な取引又は事象については調整を行っております。

(2) 企業結合及びのれん

当社グループは、企業結合の会計処理として取得法を適用しております。企業結合において取得した識別可能資産及び引き受けた識別可能負債と偶発負債は、取得日における公正価値で測定しております。取得に関連して発生した費用は、発生時に費用として認識しております。非支配持分は、当社グループの持分とは別個に識別されます。被取得企業に対する非支配持分の測定については、非支配持分を公正価値で測定するか、被取得企業の識別可能な資産及び負債の純額に対する非支配持分の比例割合で測定するか、個々の企業結合取引ごとに選択しております。

のれんは、移転された企業結合の対価、被取得企業の非支配持分の金額及び取得企業が以前に保有していた被取得企業の資本持分の公正価値の合計額が、取得日における識別可能資産及び負債の正味価値を上回る場合にその超過額として測定しております。

割安購入により、当該金額が取得した識別可能資産及び負債の正味価値を下回る場合、差額は純損益として認識しております。

のれんは償却を行わず、毎年又は減損の兆候が存在する場合にはその都度、減損テストを実施しております。のれんの帳簿価額は取得原価から減損損失累計額を控除した額で表示しております。のれんの減損損失は純損益として認識し、戻し入れは行っておりません。

のれんは、減損テスト実施のために、企業結合からの便益を得ることが期待される個々の資金生成単位又は資金生成単位グループに配分しております。

(3) 外貨換算

外貨建取引

当社グループ各社の財務諸表は、その企業が事業活動を行う主たる経済環境の通貨である機能通貨で作成しております。連結財務諸表は、当社の機能通貨である日本円で表示しております。

外貨建取引は、取引日における為替レートで当社グループ各社の機能通貨に換算しております。期末日における外貨建の貨幣性資産及び負債は、期末日の為替レートで機能通貨に再換算し、換算差額は純損益として認識しております。ただし、その他の包括利益を通じて測定される金融資産及びキャッシュ・フロー・ヘッジから生じる換算差額については、その他の包括利益として認識しております。

在外営業活動体

在外営業活動体の資産及び負債については、期末日の為替レート、収益及び費用については、連結会計期間中の為替レートが著しく変動していない限り、期中平均レートをを用いて日本円に換算しております。

在外営業活動体の財務諸表の換算から生じる為替換算差額は、その他の包括利益として認識しております。当該差額は「在外営業活動体の為替換算差額」として、その他の資本の構成要素に含めております。

(4) 現金及び現金同等物

現金及び現金同等物は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から概ね3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資から構成されております。

(5) 金融商品

デリバティブ以外の金融資産

()分類

当社グループは、デリバティブ以外の金融資産を、償却原価で測定される金融資産、その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産、又は純損益を通じて公正価値で測定される金融資産に分類しております。

償却原価で測定される金融資産

金融資産は、以下の要件を満たす場合に償却原価で測定される金融資産に分類しております。

- ・契約上のキャッシュ・フローを回収するために金融資産を保有することを目的とする事業モデルに基づいて保有されている。
- ・金融資産の契約条件により、元本及び元本残高に対する利息の支払のみであるキャッシュ・フローが所定の日に生じる。

その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産

(a) その他の包括利益を通じて公正価値で測定される負債性金融資産

金融資産は、以下の要件を満たす場合にその他の包括利益を通じて公正価値で測定される負債性金融資産に分類しております。

- ・契約上のキャッシュ・フローの回収と売却の両方によって目的が達成される事業モデルに基づいて保有されている。
- ・金融資産の契約条件により、元本及び元本残高に対する利息の支払のみであるキャッシュ・フローが所定の日に生じる。

(b) その他の包括利益を通じて公正価値で測定される資本性金融資産

償却原価で測定される金融資産、又はその他の包括利益を通じて公正価値で測定される負債性金融資産以外の金融資産のうち、当初認識時に事後の公正価値の変動をその他の包括利益に表示するという取消不能な選択をした資本性金融資産については、その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産に分類しております。

純損益を通じて公正価値で測定される金融資産

償却原価で測定される金融資産又はその他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産以外の金融資産は、純損益を通じて公正価値で測定される金融資産に分類しております。

ただし、純損益を通じて公正価値で測定しない金融資産に対し、純損益を通じて公正価値で測定される金融資産として指定することにより、会計上のミスマッチを除去又は大幅に低減する場合には、当初認識時に、純損益を通じて公正価値で測定される金融資産として指定する取消不能な選択をすることがあります。

() 当初認識及び測定

当社グループは、営業債権及びその他の債権を、これらの発生日に当初認識しております。その他のすべての金融資産は、当社グループが当該金融資産の契約当事者となった取引日に当初認識しております。すべての金融資産は、純損益を通じて公正価値で測定される金融資産に分類される場合を除き、公正価値に取引コストを加算した金額で当初測定しております。

() 事後測定

金融資産の当初認識後の測定は、その分類に応じて以下のとおり測定しております。

償却原価で測定される金融資産

償却原価で測定される金融資産については、実効金利法による償却原価で測定しております。

その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産

(a) その他の包括利益を通じて公正価値で測定される負債性金融資産

その他の包括利益を通じて公正価値で測定される負債性金融資産に係る公正価値の変動額は、減損利得又は減損損失及び為替差損益を除き、当該金融資産の認識の中止が行われるまで、その他の包括利益として認識しております。当該金融資産の認識の中止が行われる場合、過去に認識したその他の包括利益は純損益に振り替えております。

(b) その他の包括利益を通じて公正価値で測定される資本性金融資産

その他の包括利益を通じて公正価値で測定される資本性金融資産に係る公正価値の変動額は、その他の包括利益として認識しております。当該金融資産の認識の中止が行われる場合、又は公正価値が著しく下落した場合、過去に認識したその他の包括利益は利益剰余金に直接振り替えております。なお、当該金融資産からの配当金については純損益として認識しております。

純損益を通じて公正価値で測定される金融資産

純損益を通じて公正価値で測定される金融資産については、当初認識後は公正価値で測定し、その変動額は純損益として認識しております。

() 認識の中止

金融資産は、キャッシュ・フローに対する契約上の権利が消滅したか、譲渡されたか、又は実質的に所有に伴うすべてのリスクと経済価値が移転した場合に認識を中止しております。

また当社グループは、金融資産の全体又は一部分を回収するという合理的な予想を有していない場合には、金融資産の総額での帳簿価額を直接減額しております。

() 減損

当社グループは償却原価で測定される金融資産に係る予想信用損失に対する貸倒引当金を認識しております。

信用リスクの著しい増大の判定

当社グループは、期末日ごとに、金融資産の債務不履行発生のリスクを期末日現在と当初認識日現在と比較し、金融資産に係る信用リスクが当初認識以降に著しく増大しているかどうかを評価しております。

なお、当社グループは、信用リスクが著しく増加しているかどうかを当初認識以降の債務不履行の発生リスクの変化に基づいて判断しており、債務不履行の発生リスクに変化があるかどうかを評価するのにあたっては、主に期日経過の情報を考慮し、以下も考慮しております。

- ・金融資産の外部信用格付の著しい変化
- ・内部信用格付の格下げ
- ・借手の経営成績の悪化

予想信用損失アプローチ

予想信用損失は、契約に基づいて当社グループが受け取るべき契約上のキャッシュ・フローと、当社グループが受け取ると見込んでいるキャッシュ・フローとの差額の現在価値であります。金融資産に係る信用リスクが当初認識以降に著しく増大している場合には、当該金融資産に係る貸倒引当金を全期間の予想信用損失に等しい金額で測定し、著しく増加していない場合には、12ヶ月の予想信用損失に等しい金額で測定しております。

なお、上記にかかわらず、重大な金融要素を含んでいない営業債権については、貸倒引当金を全期間の予想信用損失に等しい金額で測定しております。

金融資産に係る貸倒引当金の繰入額は、純損益で認識しております。貸倒引当金を減額する事象が発生した場合は、貸倒引当金の戻入額を純損益で認識しております。

デリバティブ以外の金融負債

()分類

当社グループは、デリバティブ以外の金融負債を、償却原価で測定される金融負債に分類しております。ただし、当初認識時に、純損益を通じて公正価値で測定される金融負債として指定する取消不能な選択をする場合、当該金融負債は純損益を通じて公正価値で測定される金融負債に分類しております。

()当初認識及び測定

当社グループは、当社グループが発行した負債証券を、その発行日に当初認識しております。その他のすべての金融負債は、当社グループが当該金融負債の契約当事者になる取引日に当初認識しております。すべての金融負債は、純損益を通じて公正価値で測定される金融負債に分類される場合を除き、公正価値に取引コストを加算した金額で当初測定しております。

()事後測定

金融負債の当初認識後の測定は、償却原価で測定される金融負債については、実効金利法による償却原価で測定し、純損益を通じて公正価値で測定される金融負債については、当初認識後は公正価値で測定し、その変動額は純損益として認識しております。

()認識の中止

金融負債は消滅した時、すなわち、契約中に特定された債務が免責、取消し、又は失効となった時に認識を中止しております。

デリバティブ及びヘッジ会計

当社グループは、為替リスクや金利リスクをヘッジするために、為替予約及び金利スワップ等のデリバティブを利用しております。当該デリバティブは、契約が締結された時点の公正価値で当初測定し、その後も公正価値で事後測定しております。

デリバティブの公正価値の変動額は、純損益として認識しております。ただし、キャッシュ・フロー・ヘッジの有効部分はその他の包括利益として認識しております。

()ヘッジ会計の適格要件

当社グループは、ヘッジ関係がヘッジ会計の適格要件を満たすかどうかを評価するために、取引開始時に、ヘッジ手段とヘッジ対象との関係、並びに種々のヘッジ取引の実施についてのリスク管理目的及び戦略について文書化しております。また、ヘッジ取引に利用したデリバティブがヘッジ対象の公正価値、又はキャッシュ・フローの変動を相殺するに際し、ヘッジ有効性の要求をすべて満たしているかどうかについても、ヘッジ開始時に及び継続的に評価し文書化しております。なお、ヘッジ有効性の継続的な評価は、各期末日又はヘッジ有効性の要求に影響を与える状況の重大な変化があった時のいずれか早い方において行っております。

()適格なヘッジ関係の会計処理

ヘッジ会計の適格要件を満たすヘッジ関係については、以下のように会計処理しております。

キャッシュ・フロー・ヘッジ

ヘッジ手段に係る公正価値の変動額のうち、ヘッジ有効部分であるキャッシュ・フロー・ヘッジ剰余金はその他の包括利益として認識し、ヘッジ有効部分以外は純損益として認識しております。

ヘッジされた予定取引がその後非金融資産若しくは非金融負債の認識を生じる場合、又は、非金融資産若しくは非金融負債に係るヘッジされた予定取引が公正価値ヘッジが適用される確定約定となった場合、キャッシュ・フロー・ヘッジ剰余金を直接、当該資産又は負債の当初原価又はその他の帳簿価額に振り替えております。

上記以外のキャッシュ・フロー・ヘッジに係るキャッシュ・フロー・ヘッジ剰余金は、ヘッジされた予想将来キャッシュ・フローが純損益に影響を与えるのと同じ期間に、純損益に振り替えております。

ただし、当該金額が損失であり、当該損失の全部又は一部が将来の期間において回収されないと予想する場合には、回収が見込まれない金額を、直ちに純損益に振り替えております。

ヘッジ会計を中止する場合、キャッシュ・フロー・ヘッジ剰余金は、ヘッジされた将来キャッシュ・フローの発生が依然見込まれる場合には、当該キャッシュ・フローが発生するまでキャッシュ・フロー・ヘッジ剰余金に残し、ヘッジされた将来キャッシュ・フローの発生がもはや見込まれない場合には、純損益に直ちに振り替えております。

金融資産及び金融負債の相殺

金融資産と金融負債は、認識された金額を相殺する強制可能な法的権利が現時点で存在し、かつ純額ベースで決済するか又は資産を実現すると同時に負債を決済する意図が存在する場合にのみ、相殺し、連結財政状態計算書において純額で表示しております。

金融商品の公正価値

各報告日現在で活発な市場において取引されている金融商品の公正価値は、市場における公表価格又はディーラー価格を参照しております。活発な市場が存在しない金融商品の公正価値は、適切な評価技法を使用して算定しております。

(6) 棚卸資産

棚卸資産の取得原価には、購入原価、加工費及び棚卸資産が現在の場所及び状態に至るまでに発生したその他のすべての原価を含めております。

棚卸資産は、取得原価と正味実現可能価額のいずれか低い額で計上しております。正味実現可能価額は、通常の事業の過程における予想売価から関連する販売直接費を控除した額であります。取得原価は主として総平均法を用いて算定しております。

(7) 有形固定資産

有形固定資産は、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した額で表示しております。

取得原価には、資産の取得に直接関連する費用、解体、撤去及び原状回復費用並びに借入費用で資産計上の要件を満たすものが含まれております。ファイナンス・リースの資産計上額も有形固定資産に含まれております。

取得後に追加的に発生した支出については、その支出により将来の経済的便益が当社グループに流入する可能性が高く、金額を信頼性をもって測定することができる場合にのみ、当該取得資産の帳簿価額に算入するか個別の資産として認識するかのいずれかにより会計処理しております。他のすべての修繕及び維持に係る費用は、発生時に純損益として認識しております。

土地及び建設仮勘定以外の有形固定資産は、取得原価から残存価額を控除した償却可能価額について、有形固定資産の各構成要素の見積耐用年数にわたり、定額法で償却しております。

主な有形固定資産の見積耐用年数は以下のとおりであります。

- ・建物及び構築物 : 3～50年
- ・機械装置及び運搬具 : 4～12年
- ・工具、器具及び備品 : 2～15年

有形固定資産の減価償却方法、見積耐用年数及び残存価額は、期末日ごとに見直しを行っております。

(8) 無形資産

無形資産は、取得原価から償却累計額及び減損損失累計額を控除した額で表示しております。

個別に取得した無形資産は、当初認識に際し取得原価で測定し、企業結合において取得した無形資産の取得原価は、取得日現在における公正価値で測定しております。なお、自己創設の無形資産については、資産化の要件を満たす開発費用を除き、その支出額はすべて発生した期の費用として計上しております。

無形資産は、資産の取得原価から残存価額を控除した額について、見積耐用年数にわたり、定額法で償却しております。主な無形資産の見積耐用年数は以下のとおりであります。

- ・ソフトウェア : 5年
- ・開発資産 : 5年

無形資産の償却方法、見積耐用年数及び残存価額は、期末日ごとに見直しを行っております。

(9) リース

当社グループは、契約がリースであるか又は契約にリースが含まれているかについては、リース開始日における契約の実質に基づき判断しております。契約の実質は、契約の履行が特定の資産又は資産グループの使用に依存しているか、及びその契約により当該資産を使用する権利が与えられるかに基づき判断しております。

リースは、所有に伴うリスクと経済価値が実質的にすべて当社グループに移転する場合には、ファイナンス・リースに分類し、それ以外の場合にはオペレーティング・リースとして分類しております。

ファイナンス・リース取引について、リース資産及びリース債務は、リース開始日に算定したリース物件の公正価値と最低支払リース料総額の現在価値のいずれか低い金額により、連結財政状態計算書に計上しております。リース料は、利息法に基づき金融費用とリース債務の返済額とに配分しております。金融費用は、純損益として認識しております。リース資産は、見積耐用年数とリース期間のいずれか短い年数にわたって、定額法で減価償却を行っております。

オペレーティング・リース取引について、リース料は、リース期間にわたって定額法により費用として認識しております。

(10) 非金融資産の減損

当社グループは四半期ごとに、各資産についての減損の兆候の有無の判定を行い、減損の兆候が存在する場合、又は、毎年減損テストが要求されている場合には、その資産の回収可能価額を見積っております。回収可能価額は、資産又は資金生成単位の売却費用控除後の公正価値とその使用価値のうち高い方の金額で算定しております。売却費用控除後の公正価値の算定にあたっては、利用可能な公正価値指標に裏付けられた適切な評価モデルを使用しております。また、使用価値の評価における見積将来キャッシュ・フローは、貨幣の時間価値に関する現在の市場評価及び当該資産に固有のリスク等を反映した割引率を使用して、現在価値まで割り引いております。

減損損失は、資産又は資金生成単位の帳簿価額が回収可能価額を超える場合に、純損益として認識しております。資金生成単位に関連して認識した減損損失は、まずその単位に配分されたのれんの帳簿価額を減額するように配分し、次に資金生成単位内のその他の資産の帳簿価額を比例的に減額するように配分しております。

のれん以外の資産に関しては、過年度に認識された減損損失について、四半期ごとに損失の減少又は消滅の可能性を示す兆候が存在しているかどうかを評価しております。そのような兆候が存在する場合は、当該資産又は資金生成単位の回収可能価額の見積りを行い、その回収可能価額が、資産又は資金生成単位の帳簿価額を超える場合、減損損失を認識しなかった場合の帳簿価額から必要な減価償却費又は償却費を控除した後の帳簿価額を超えない金額を上限として、減損損失を戻し入れております。

(11) 従業員給付

退職後給付

(a) 確定給付制度

当社及び一部の子会社では確定給付制度を採用しております。確定給付制度に関連して連結財政状態計算書で認識される資産又は負債は、確定給付制度債務の現在価値から制度資産の公正価値を差し引いた額であります。確定給付制度債務は、予測単位積増方式を用いて毎年算定しております。割引率は、将来の毎年度の給付支払見込日までの期間を基に割引期間を設定し、割引期間に対応した期末日時点の優良社債の市場利回りに基づき算定しております。

確定給付制度から生じる確定給付資産又は負債の純額の再測定は、発生した期間のその他の包括利益として認識し、直ちに利益剰余金に振り替えております。再測定は、確定給付制度債務に係る数理計算上の差異、制度資産に係る収益(制度資産に係る利息収益の金額を除く)等で構成されております。過去勤務費用は、発生した期間に純損益として認識しております。

(b) 確定拠出制度

当社及び一部の子会社では確定拠出制度を採用しております。確定拠出制度の退職給付に係る費用は、従業員が関連するサービスを提供した時点で費用として認識しております。

その他の長期従業員給付

退職後給付以外の長期従業員給付に対する債務は、従業員が過年度及び当年度において提供したサービスの対価として獲得した将来給付額を現在価値に割り引いて算定しております。

短期従業員給付

短期従業員給付は、割引計算を行わず、関連するサービスが提供された時点で費用として計上しております。当社グループが、従業員から過去に提供された労働の結果として支払うべき現在の法的及び推定的債務を負っており、かつ、その金額を信頼性をもって見積ることができる場合、支払われると見積られる額を負債として認識しております。

(12) 引当金及び偶発負債

引当金は、当社グループが過去の事象の結果として現在の法的又は推定的債務を有しており、当該債務を決済するために資源の流出が必要となる可能性が高く、その金額について信頼性をもって見積ることができる場合に認識しております。

引当金は、貨幣の時間価値が重要である場合には、債務の決済に必要なと見込まれる支出に、貨幣の時間価値の現在の市場評価と当該債務に特有なリスクを反映した税引前の割引率を用いて、現在価値で測定しております。時間の経過による引当金の増加は純損益として認識しております。

製品保証引当金については、製品の品質保証費用の支払に備えるため、過去の発生実績に基づく当連結会計年度の売上高に対応する発生見込額に、発生した品質保証費用の実情を考慮した保証見込額を加えて計上しております。将来において経済的便益の流出が予測される時期は、各期末日より1年以内の時期であります。

事業構造改善引当金は、当社グループにおいて詳細かつ正式な事業構造改善計画が承認され、その事業構造改善を開始した場合又は影響を受ける関係者に対して当該契約の主要な特徴を発表した場合に認識しております。将来において経済的便益の流出が予測される時期は、将来の事業計画等により影響を受けます。

環境引当金は、当社グループに法的義務又は推定的債務が存在する場合に、環境対策の支出に備えるため、必要と認められる額を計上しております。将来において経済的便益の流出が予測される時期は、将来の事業計画等により影響を受けます。

期末日現在において発生可能性のある債務を有しているが、それが期末日現在の債務であるか否か確認ができないもの、又は引当金の認識基準を満たさないものについては、偶発負債として注記しております。

(13) 自己株式

自己株式は取得原価で評価し、資本から控除しております。当初の自己株式の購入、売却又は消却において利得又は損失は認識しておりません。なお、帳簿価額と売却時の対価との差額は資本として認識しております。

(14) 収益認識

物品の販売

当社グループは顧客との契約について以下の5ステップを適用することにより収益を認識しております。

- ステップ1：顧客との契約を識別する。
- ステップ2：契約における履行義務を識別する。
- ステップ3：取引価格を算定する。
- ステップ4：取引価格を契約における履行義務に配分する。
- ステップ5：履行義務の充足時に（又は充足するにつれて）収益を認識する。

当社グループは、自動車用品セグメントにおいては、防振ゴム、ホース、内装品、制遮音品などを国内外の顧客に提供しており、一般産業用品セグメントにおいては、精密樹脂ブレード・ロール、車両用・住宅用・橋梁用・電子機器用防振ゴム、高圧ホース・搬送用ホース、ゴムシール材などを国内外の顧客に提供しております。これらの製品については、顧客に製品を引き渡した時点で、履行義務を充足したと判断し、同時点で収益を認識しております。

また、収益は、顧客との契約において約束された対価から値引等の見積りを控除した金額で算定しております。

役務の提供

役務の提供による収益は、通常の事業活動における役務の提供により受け取った対価又は債権の公正価値で測定しております。また、役務の提供に関する取引の成果を信頼性をもって見積ることができる場合には、その取引に関する収益は、期末日現在のその取引の進捗度に応じて認識しております。

配当収益

配当に係る収益は、配当を受け取る権利が確定した時点で、対価又は債権の公正価値で認識しております。

(15) 政府補助金

政府補助金は、補助金交付のための付帯条件を満たし、かつ、補助金を受領するという合理的な保証が得られた時に公正価値で認識しております。政府補助金が費用項目に関連する場合は、当該補助金で補償することが意図されている関連費用を認識する期間にわたって、定期的に純損益として認識しております。資産に関連する補助金の場合は、資産の耐用年数にわたって定期的に純損益として認識し、未経過の補助金収入を繰延収益として負債に計上しております。

(16) 金融収益及び金融費用

金融収益は、受取利息、受取配当金及びデリバティブ利益(その他の包括利益として認識されるヘッジ手段に係る利益を除く)等から構成されております。受取利息は、実効金利法を用いて発生時に認識しております。

金融費用は、支払利息及びデリバティブ損失(その他の包括利益として認識されるヘッジ手段に係る損失を除く)等から構成されております。

(17) 法人所得税

法人所得税費用は当期税金及び繰延税金から構成されております。これらは、その他の包括利益として認識される項目あるいは資本に直接認識される項目に係る場合を除いて、純損益として認識しております。

当期税金は、当社及び子会社が事業を行い、課税所得を生成している国において、期末日まで施行又は実質的に施行されている税率に基づき算定しております。

繰延税金資産及び負債は、資産負債法により、資産及び負債の税務基準額と会計上の帳簿価額との間に生じる一時差異に対して認識しております。繰延税金資産は、将来減算一時差異、税務上の繰越欠損金や繰越税額控除のような、将来の税務申告において税負担を軽減させるものについて、それらを回収できる課税所得が生じる可能性の高い範囲内で認識しております。一方、繰延税金負債は、将来加算一時差異に対して認識しております。ただし、以下の一時差異に対しては、繰延税金資産及び負債を計上しておりません。

- ・ のれんの当初認識から生じる一時差異
- ・ 企業結合ではない取引で、かつ、取引時に会計上の純損益及び課税所得(欠損金)に影響を与えない取引における資産又は負債の当初認識から生じる場合
- ・ 子会社、関連会社に対する投資に係る将来加算一時差異のうち、一時差異の解消の時点をコントロールすることができ、かつ予測可能な期間内に一時差異が解消しない可能性が高い場合

繰延税金資産の帳簿価額は毎期見直され、繰延税金資産の全額又は一部が使用できるだけの十分な課税所得が稼得されない可能性が高い部分については、帳簿価額を減額しております。未認識の繰延税金資産は毎期見直され、将来の課税所得により繰延税金資産が回収される可能性が高くなった範囲内で認識しております。

繰延税金資産及び負債は、期末日において制定されている、又は実質的に制定されている税法及び税率に基づいて資産が実現する期間又は負債が決済される期間に適用されると予想される税法及び税率によって測定しております。

繰延税金資産及び負債の相殺が行われるのは、当期税金資産と当期税金負債を相殺する法的に強制力のある権利を有しており、かつ、同一の納税主体又は純額ベースでの決済を行うことを意図している異なる納税主体に対して、同一の税務当局によって課されている法人所得税に関連するものである場合であります。

(18) 1株当たり当期利益

基本的1株当たり当期利益は、親会社の所有者に帰属する当期利益を、その期間の自己株式を調整した発行済普通株式の加重平均株式数で除して算定しております。

(19) セグメント情報

事業セグメントとは、他の事業セグメントとの取引を含む、収益を獲得し費用を発生させる事業活動の構成単位であります。すべての事業セグメントの事業の成果は、個別に財務情報が入手可能なものであり、かつ、各セグメントへの経営資源の配分及び業績の評価を行うために、マネジメントが定期的にレビューしております。

4. 重要な会計上の見積り及び判断

当社グループの連結財務諸表は、経営者の見積り及び仮定を含んでおります。これらの見積り及び仮定は、過去の実績及び期末日において合理的であると考えられる様々な要因等を勘案した経営者の最善の判断に基づきますが、将来において、これらの見積り及び仮定とは異なる結果となる可能性があります。見積り及びその基礎となる仮定は、継続して見直しております。会計上の見積りの変更による影響は、その見積りを変更した会計期間及び影響を受ける将来の会計期間において認識しております。

見積り及び仮定のうち、当社グループの連結財務諸表に重要な影響を与える可能性のある、主な見積り及び仮定は以下のとおりであります。

(1) 非金融資産の減損

当社グループは、有形固定資産、のれん及び無形資産について、注記「3. 重要な会計方針」に従って、減損テストを実施しております。減損テストにおける回収可能価額の算定において、将来のキャッシュ・フロー、割引率等について仮定を設定しております。これらの仮定については、経営者の最善の見積りと判断により決定しておりますが、将来の不確実な経済条件の変動の結果によって影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

(2) 法人所得税

当社グループは、複数の租税区域の法人所得税の影響を受けます。世界各地における法人所得税の見積額を決定する際には、重要な判断が必要であります。取引及び計算方法によっては、最終的な税額に不確実性を含むものも多くあります。当社グループは追加徴収が求められるかどうかの見積りに基づいて、予想される税務調査上の問題について負債を認識しております。これらの問題に係る最終税額が当初に認識した金額と異なる場合、連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

また、繰延税金資産は、将来減算一時差異を利用できる課税所得が生じる可能性が高い範囲内で認識しております。繰延税金資産の認識に際しては、課税所得が生じる可能性の判断において、将来獲得しうる課税所得の時期及び金額を合理的に見積り、金額を算定しております。

課税所得が生じる時期及び金額は、将来の不確実な経済条件の変動によって影響を受ける可能性があり、実際に生じた時期及び金額が見積りと異なった場合、翌年度以降の連結財務諸表において認識する金額に重要な影響を与える可能性があります。

(3) 従業員給付

当社グループは確定給付型を含む様々な退職給付制度を有しております。これらの各制度に係る確定給付制度債務の現在価値及び関連する勤務費用等は、割引率や死亡率などの数理計算上の仮定に基づいて算定されております。数理計算上の仮定は、経営者の最善の見積りと判断により決定しておりますが、将来の不確実な経済条件の変動の結果によって影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

(4) 引当金及び偶発負債

当社グループは、製品保証引当金等、種々の引当金を連結財政状態計算書に計上しております。これらの引当金は、期末日における債務に関するリスク及び不確実性を考慮に入れた、債務の決済に要する支出の最善の見積りに基づいて計上しております。

債務の決済に要する支出額は、将来の起こりうる結果を総合的に勘案して算定しておりますが、予想しえない事象の発生や状況の変化によって影響を受ける可能性があり、実際の支払額が見積りと異なった場合、翌年度以降の連結財務諸表において認識する金額に重要な影響を与える可能性があります。

また、偶発負債については、期末日におけるすべての利用可能な証拠を勘案し、その発生可能性及び金額的影響を考慮した上で開示しております。

(5) 金融商品の評価

当社グループは、特定の金融商品の公正価値を評価する際に、市場で観察可能ではないインプットを利用する評価技法を用いております。観察可能ではないインプットは、将来の不確実な経済条件の変動の結果によって影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

5. 未適用の公表済み基準書及び解釈指針

連結財務諸表の承認日までに、主に以下の基準書及び解釈指針の新設又は改訂が公表されておりますが、2019年3月期以前に強制適用されるものではなく、当社グループでは早期適用しておりません。

IFRS		強制適用時期 (以後開始年度)	当社グループ 適用時期	新設・改訂内容
IFRS第16号	リース	2019年 1月1日	2020年 3月期	リースに関する会計処理及び開示を規定

IFRS第16号の適用により、従前、IAS第17号に基づいてオペレーティング・リースとして分類していた借手のリースについて、一部の例外を除いて資産及び負債を認識することとなります。また、同基準の適用にあたり、当社はその累積的影響を適用開始日に認識する方法を選択する予定です。

当基準の適用による当社グループの連結財務諸表への主な影響として、2020年3月期の期首の連結財政状態計算書において、資産及び負債が約9,384百万円増加する見込みであります。

6. セグメント情報

(1) 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、製品・サービス別の管理体制を置き、取り扱う製品・サービスについて国内及び海外の包括的な戦略を立案し、事業活動を展開しております。

したがって、当社グループは、管理体制を基礎とした製品・サービス別のセグメントから構成されており、「自動車用品」、「一般産業用品」の2つを報告セグメントとしております。

各報告セグメント区分の主な製品・サービス又は事業内容は、以下のとおりであります。

報告セグメント	主な製品・サービス又は事業内容
自動車用品	防振ゴム、ホース、制遮音品、内装品等
一般産業用品	精密樹脂ブレード・ロール、車両用・住宅用・橋梁用・電子機器用防振ゴム、高圧ホース・搬送用ホース、ゴムシール材等

(2) 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産及びその他の項目

報告セグメントの会計方針は、注記「3.重要な会計方針」で記載している当社グループの会計方針と同じであります。

報告セグメント間の内部売上高及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

当社グループの報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産及びその他の項目は、以下のとおりであります。

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位:百万円)

	自動車用品	一般産業用品	合計	調整額 (注) 2	連結財務諸表 計上額
売上高					
外部顧客への売上高	393,440	69,445	462,885		462,885
セグメント間の内部 売上高又は振替高	1,481	14,122	15,603	15,603	
合計	394,921	83,567	478,488	15,603	462,885
セグメント利益(注) 1	9,766	3,094	12,860		12,860
その他の収益					1,405
その他の費用					2,069
営業利益					12,196
金融収益					365
金融費用					1,276
税引前当期利益					11,285
その他の項目					
セグメント資産	300,345	92,521	392,866	21,367	414,233
減価償却費及び償却費	22,698	6,068	28,766		28,766
減損損失	41	364	405		405
持分法による投資利益	71	82	153		153
持分法で会計処理されてい る投資	3,901	534	4,435		4,435
有形固定資産及び無形資産 の増加額	24,206	5,902	30,108		30,108

(注) 1. セグメント利益は、売上高から売上原価、販売費及び一般管理費を控除し、持分法による投資損益を含めた金額である事業利益を使用しております。

2. セグメント資産の調整額21,367百万円には各報告セグメントに配分していない全社資産30,070百万円及びセグメント間債権債務の相殺消去 8,703百万円が含まれております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位:百万円)

	自動車用品	一般産業用品	合計	調整額 (注) 2	連結財務諸表 計上額
売上高					
外部顧客への売上高	398,160	71,545	469,705		469,705
セグメント間の内部 売上高又は振替高	1,668	14,784	16,452	16,452	
合計	399,828	86,329	486,157	16,452	469,705
セグメント利益(注) 1	7,771	1,608	9,379		9,379
その他の収益					1,355
その他の費用					9,581
営業利益					1,153
金融収益					693
金融費用					1,146
税引前当期利益					700
その他の項目					
セグメント資産	287,313	90,345	377,658	19,621	397,279
減価償却費及び償却費	23,571	6,210	29,781		29,781
減損損失	7,022	156	7,178		7,178
持分法による投資利益 又は損失()	236	77	159		159
持分法で会計処理されてい る投資	3,415	599	4,014		4,014
有形固定資産及び無形資産 の増加額	24,664	6,926	31,590		31,590

(注) 1. セグメント利益は、売上高から売上原価、販売費及び一般管理費を控除し、持分法による投資損益を含めた金額である事業利益を使用しております。

2. セグメント資産の調整額19,621百万円には各報告セグメントに配分していない全社資産26,112百万円及びセグメント間債権債務の相殺消去 6,491百万円が含まれております。

(3) 主要な製品及び役務からの収益

「(1) 報告セグメントの概要」及び「(2) 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産及びその他の項目」に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

(4) 地域別情報

外部顧客への売上高

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
日本	183,251	184,217
米国	71,108	72,611
中国	71,473	75,318
その他	137,053	137,559
合計	462,885	469,705

(注) 売上高は販売先が所在している国ごとに分類しております。

非流動資産

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
日本	90,723	84,389
米国	21,355	20,361
中国	21,591	22,035
その他	53,669	49,840
合計	187,338	176,625

(注) 非流動資産は資産の所在地によっております。また、金融商品、繰延税金資産、退職給付に係る資産を含んでおりません。

(5) 主要な顧客に関する情報

当社グループの売上高の10%以上を占める顧客グループは、前連結会計年度においては、3グループあり、当該顧客グループから生じた売上高は273,234百万円(自動車用品セグメント)であります。当連結会計年度においては、3グループあり、当該顧客グループから生じた売上高は281,669百万円(自動車用品セグメント)であります。

7. 現金及び現金同等物

現金及び現金同等物の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
現金及び預金 (預入期間3ヶ月以内)	41,973	38,371
合計	41,973	38,371

(注) 前連結会計年度末及び当連結会計年度末の連結財政状態計算書上における「現金及び現金同等物」の残高と連結キャッシュ・フロー計算書上における「現金及び現金同等物」の残高は一致しております。

8. 営業債権及びその他の債権

営業債権及びその他の債権の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
売掛金	80,746	76,327
受取手形	6,173	5,607
電子記録債権	7,588	8,940
未収入金	987	1,592
その他	1,160	854
貸倒引当金	361	428
合計	96,293	92,892

9. 棚卸資産

棚卸資産の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
商品及び製品	13,035	15,181
仕掛品	10,215	10,694
原材料及び貯蔵品	30,349	31,127
合計	53,599	57,002

(注) 当連結会計年度において売上原価に計上された棚卸資産の評価減の金額(は戻し入れ金額)は、373百万円(前連結会計年度は238百万円)であります。

なお、前連結会計年度及び当連結会計年度において、重要な評価減の戻し入れはありません。

10.有形固定資産

有形固定資産の取得原価、減価償却累計額及び減損損失累計額の増減並びに帳簿価額は、以下のとおりであります。なお、負債の担保として抵当権が設定された有形固定資産はありません。

(単位：百万円)

取得原価	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具、器具 及び備品	土地	建設仮勘定	合計
2017年4月1日残高	111,560	254,105	57,509	15,594	9,741	448,509
取得				286	24,442	24,728
処分	246	4,903	2,071	53	75	7,348
建設仮勘定からの振替	2,530	15,372	6,113		24,015	
為替換算差額	133	251	128	16	109	121
その他	29	201	506		33	309
2018年3月31日残高	114,006	264,524	60,917	15,843	10,169	465,459
取得				5	24,102	24,107
処分	796	16,941	3,976		149	21,862
建設仮勘定からの振替	3,060	17,827	6,565		27,452	
為替換算差額	200	1,342	410	19	5	756
その他	1	43	156		138	24
2019年3月31日残高	116,071	266,709	63,252	15,867	6,537	468,436

(注) 取得原価に含めた借入費用はありません。

(単位：百万円)

減価償却累計額及び 減損損失累計額	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具、器具 及び備品	土地	建設仮勘定	合計
2017年4月1日残高	60,541	187,969	45,426	55	35	294,026
減価償却費(注)	3,698	12,945	5,634			22,277
減損損失(注)	0	337	47			384
処分	174	4,508	2,155		10	6,847
為替換算差額	53	295	71	4		167
その他	9	7	512		3	511
2018年3月31日残高	64,109	196,455	48,511	59	28	309,162
減価償却費(注)	3,612	13,325	5,778			22,715
減損損失(注)		1,259	25			1,284
処分	717	16,211	3,712			20,640
為替換算差額	84	1,240	36	3		1,363
その他	10	69	159		21	217
2019年3月31日残高	67,098	196,137	50,797	62	7	314,101

(注) 有形固定資産の減価償却費は、連結損益計算書上の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」、減損損失は、連結損益計算書の「その他の費用」に含まれております。

(単位：百万円)

帳簿価額	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具、器具 及び備品	土地	建設仮勘定	合計
2017年4月1日残高	51,019	66,136	12,083	15,539	9,706	154,483
2018年3月31日残高	49,897	68,069	12,406	15,784	10,141	156,297
2019年3月31日残高	48,973	70,572	12,455	15,805	6,530	154,335

11. のれん及び無形資産

(1) 取得原価、償却累計額及び減損損失累計額並びに帳簿価額

のれん及び無形資産の取得原価、償却累計額及び減損損失累計額の増減並びに帳簿価額は、以下のとおりであります。

なお、耐用年数を確定できない重要な無形資産はありません。

(単位：百万円)

取得原価	のれん	無形資産				
		開発資産	ソフトウェア	顧客関係	その他	合計
2017年4月1日残高	11,253	20,322	17,000	5,823	4,080	47,225
取得			273		1,882	2,155
自己創設		3,215				3,215
処分		2,114	186		24	2,324
為替換算差額	993	174	43		28	189
その他		191	101		109	19
2018年3月31日残高	12,246	21,406	17,231	5,823	6,019	50,479
取得			2,368		857	3,225
自己創設		4,388				4,388
処分		2,348	180		182	2,710
為替換算差額	530	318	31		424	773
その他		311	95		736	1,142
2019年3月31日残高	11,716	22,817	19,293	5,823	5,534	53,467

(単位：百万円)

償却累計額及び 減損損失累計額	のれん	無形資産				
		開発資産	ソフトウェア	顧客関係	その他	合計
2017年4月1日残高	6,074	10,708	9,172	2,567	1,720	24,167
償却費(注)		3,302	2,016	642	529	6,489
減損損失(注)					21	21
処分		2,114	185		15	2,314
為替換算差額	550	45	37		1	83
その他		13	103		109	199
2018年3月31日残高	6,624	11,928	11,143	3,209	2,365	28,645
償却費(注)		3,612	2,274	642	538	7,066
減損損失(注)	4,756			1,000	138	1,138
処分		2,348	177		178	2,703
為替換算差額	309	281	40		12	333
その他		21	1		11	33
2019年3月31日残高	11,071	12,890	13,199	4,851	2,840	33,780

(注) 無形資産の償却費は、連結損益計算書上の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」、減損損失は、連結損益計算書の「その他の費用」に含まれております。

(単位：百万円)

帳簿価額	のれん	無形資産				
		開発資産	ソフトウェア	顧客関係	その他	合計
2017年4月1日残高	5,179	9,614	7,828	3,256	2,360	23,058
2018年3月31日残高	5,622	9,478	6,088	2,614	3,654	21,834
2019年3月31日残高	645	9,927	6,094	972	2,694	19,687

(2) 減損テスト

各資金生成単位に配分されたのれんの帳簿価額は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

報告セグメント	資金生成単位	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
自動車用品	SumiRiko AVSグループ(旧Anvisグループ)	4,992	
	Inoac Tokai (Thailand)	630	645
	合計	5,622	645

のれんの減損テストの回収可能価額は使用価値に基づき算定しております。使用価値は、過去の経験と外部からの情報を反映させて作成され、経営陣によって承認された、最長5年間の事業計画を基礎としたキャッシュ・フローの見積額を、当該資金生成単位の加重平均資本コスト(8.05%~13.47%)により現在価値に割り引いて算定しております。事業計画の期間を超えるキャッシュ・フローは、資金生成単位が属する市場の長期平均成長率等(0%~2.08%)をもとに推定しております。

前連結会計年度において、のれんの減損損失は認識しておりません。ただし、減損テストに用いた主要な仮定が変更された場合に減損が発生するリスクがあります。仮に加重平均資本コストが2%上昇した場合、減損損失が発生する可能性があります。

当連結会計年度において、SumiRiko AVSグループ(旧Anvisグループ)ののれんの減損損失を認識しました。欧州市場低迷の長期化、欧州新排ガス試験法導入の影響による販売時期の遅れ、米国内需拡大政策に対応した一部自動車メーカーのメキシコから米国への生産移管、米中貿易摩擦の影響による中国市場の自動車生産台数減少などをうけ、旧Anvisグループの事業計画の見直しを行った結果、回収可能価額が帳簿価額を下回り、投資回収に長期間を要すると判断しました。Inoac Tokai (Thailand)ののれんについては、回収可能価額が帳簿価格を上回るため、減損損失は認識しておりません。また減損テストに用いた主要な仮定が合理的に予測可能な範囲で変化したとしても、回収可能価額が帳簿価額を下回る可能性は低いと判断しております。

12. 非金融資産の減損

当社グループは、会社別・事業別に、キャッシュ・フローを生み出す最小単位をグルーピングしております。減損損失は、連結損益計算書の「その他の費用」に含まれております。

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

自動車用品を製造する会社の生産設備及び無形資産について、当初想定していた収益性が見込めなくなったことから減損処理を行っております。自動車用品事業の回収可能価額は零として算定されております。

また、一般産業用品を製造する会社の生産設備等について、当初想定していた収益性が見込まれなくなったことから減損処理を行っております。一般産業用品事業の回収可能価額は零として算定されております。

(単位：百万円)

報告セグメント	資産の種類	減損損失の金額
自動車用品	機械装置及び運搬具	20
	無形資産（その他）	21
	小計	41
一般産業用品	建物及び構築物	0
	機械装置及び運搬具	317
	工具、器具及び備品	47
	小計	364
合計		405

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

自動車用品を製造する会社の生産設備及び無形資産、及びのれんについて、当初想定していた収益性が見込めなくなったことから減損処理を行っております。自動車用品事業の回収可能価額は使用価値に基づき算定されております。使用価値の見積に用いた割引率は、加重平均資本コスト（8.05%～20.11%）を使用しております。

また、一般産業用品を製造する会社の生産設備等について、当初想定していた収益性が見込まれなくなったことから減損処理を行っております。一般産業用品事業の回収可能価額は零として算定されております。

(単位：百万円)

報告セグメント	資産の種類	減損損失の金額
自動車用品	機械装置及び運搬具	1,129
	のれん	4,756
	無形資産（その他）	1,137
	小計	7,022
一般産業用品	機械装置及び運搬具	130
	工具、器具及び備品	25
	無形資産（その他）	1
	小計	156
合計		7,178

13. 営業債務及びその他の債務

営業債務及びその他の債務の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
買掛金	63,309	60,684
電子記録債務	2,714	2,754
支払手形	1,787	1,861
未払金	14,756	15,622
合計	82,566	80,921

14. 社債及び借入金

社債及び借入金の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
流動負債		
短期借入金	4,292	5,065
1年内返済予定の長期借入金	5,000	10,000
合計	9,292	15,065
非流動負債		
社債	44,805	44,828
長期借入金	51,950	42,477
合計	96,755	87,305

(1) 社債

社債の発行条件の要約は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

会社名	銘柄	発行 年月日	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)	利率 (%)	担保	償還期限
住友理工(株)	第6回無担保 普通社債	2013年 2月28日	10,000	10,000	0.936	なし	2023年 2月28日
住友理工(株)	第7回無担保 普通社債	2016年 9月6日	15,000	15,000	0.35	なし	2026年 9月4日
住友理工(株)	第8回無担保 普通社債	2016年 9月6日	5,000	5,000	0.63	なし	2031年 9月5日
住友理工(株)	第9回無担保 普通社債	2017年 9月21日	15,000	15,000	0.455	なし	2027年 9月21日
	合計		45,000	45,000			

(2) 借入金

当連結会計年度における「短期借入金」、「1年以内返済予定の長期借入金」、「長期借入金」の平均利率は、それぞれ6.97%、0.51%、0.51%であります。「長期借入金」の返済期限は2020年～2024年であります。

(3) 担保

担保に供している資産及び担保付債務はありません。

15. 引当金

引当金の増減は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	製品保証引当金	事業構造改善引当金	環境引当金	その他	合計
2017年4月1日残高	511	375	516	2,461	3,863
繰入額	342	191	143	2,763	3,439
時の経過による割引の戻入				2	2
減少額(目的使用)	230	400	89	2,017	2,736
減少額(戻入)	48		439	126	613
為替換算差額	31	32	44	1	108
2018年3月31日残高	606	198	175	3,084	4,063
繰入額	125			1,018	1,143
時の経過による割引の戻入				1	1
減少額(目的使用)	283	192	7	1,271	1,753
減少額(戻入)	103			354	457
為替換算差額	15	3	8	35	61
2019年3月31日残高	330	3	160	2,443	2,936

(注1) 各引当金の説明については、「3. 重要な会計方針(12) 引当金及び偶発負債」に記載しております。

(注2) その他には、訴訟等関連費用の引当金が含まれておりますが、当社グループの立場が著しく不利になる可能性があるため、IAS第37号「引当金、偶発負債及び偶発資産」の92項に従い個別に記載しておりません。

16. 従業員給付

(1) 採用している退職給付制度の概要

当社及び一部の連結子会社は、確定給付制度として、企業年金基金制度及び退職一時金制度等を設けております。また、当社及び一部の連結子会社は、確定拠出年金制度及び退職金前払制度を設けております。この他、従業員の退職等に関して、IAS第19号「従業員給付」に準拠した数理計算による確定給付制度債務の対象とされない特別退職金を支払う場合があります。

(2) 確定給付制度

当社グループでは、確定給付制度を設けております。給付額は勤続年数、職能・職務等級、役職などの評価要素に基づき決定されます。

確定給付制度に関するリスク

当社グループは、確定給付制度について様々なリスクに晒されております。主なリスクは、以下のとおりです。なお、当社グループは、制度資産に関して重大な集中リスクには晒されていません。

制度資産の変動	資本性金融資産及び負債性金融資産等への投資は、変動リスクに晒されております。
社債利率の変動	市場の社債利回りの低下は、確定給付制度債務を増加させます。

連結財政状態計算書上の認識額

連結財政状態計算書上の確定給付に係る負債(資産)の純額は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
確定給付制度債務	27,811	28,388
制度資産の公正価値	30,644	28,858
合計	2,833	470
連結財政状態計算書の金額		
退職給付に係る負債	7,962	8,224
退職給付に係る資産	10,795	8,694

連結損益計算書上の認識額

連結損益計算書上の費用として認識した金額は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期勤務費用	1,685	1,790
利息費用の純額	40	42
合計	1,725	1,832

確定給付制度債務

確定給付制度債務の増減は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
期首残高	27,049	27,811
勤務費用	1,685	1,790
利息費用	149	142
数理計算上の差異(注1)	291	300
給付支払額	1,504	1,715
為替換算差額	141	60
期末残高	27,811	28,388

(注1) 数理計算上の差異は主に財務上の仮定の変化により生じた差異であります。

(注2) 確定給付制度債務の加重平均デュレーションは10.5年(前連結会計年度は10.7年)であります。

制度資産

制度資産の投資方針としては、資本性金融資産、負債性金融資産及び保険契約等に分散したポートフォリオを構成し、将来の給付義務を全うできる水準の収益を長期的・安定的に目指しております。

なお、投資方針については、企業年金基金制度の財政状況や運用環境を勘案しながら、必要に応じて見直しを行うこととしております。

また、各資産の運用を実行する際にも、リスク分散に留意し、継続的なモニタリングを通じて運用面の効率性を追及することとしております。

制度資産の公正価値の増減は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
期首残高	28,900	30,644
利息収益	109	100
制度資産に係る収益	1,875	1,462
事業主による拠出	700	715
給付支払額	940	1,139
期末残高	30,644	28,858

(注) 翌年度の予想拠出額は775百万円であります。

制度資産の公正価値の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	活発な市場における公表市場価格があるもの		活発な市場における公表市場価格がないもの	
	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
国内株式	10,724	4,515		
外国株式	4,044	4,378		
国内債券	5,681	9,428		
外国債券	2,791	1,531		
生保一般勘定			3,969	4,025
現金及び 現金同等物			1,556	2,934
その他			1,879	2,047
合計	23,240	19,852	7,404	9,006

数理計算上の仮定

数理計算のために使用した主要な仮定は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
割引率(加重平均値)	0.4%	0.3%

感応度分析

数理計算上の仮定が変動した場合の確定給付制度債務への影響は、以下のとおりであります。本分析においては、その他すべての変数は一定のものと仮定しております。また、本分析は報告期間の末日において合理的と見込まれる変数の変動幅に基づいております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
割引率0.5%の上昇	1,210百万円の減少	931百万円の減少
割引率0.5%の低下	1,283百万円の増加	1,276百万円の増加

(3) 確定拠出制度

確定拠出制度に係る退職給付費用は、従業員がサービスを提供した期間に費用として認識し、未払拠出額を負債として認識しております。

確定拠出制度に係る退職給付費用は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
確定拠出制度に係る退職給付費用	629	608

17. 法人所得税

(1) 繰延税金

繰延税金資産及び負債の変動内訳

繰延税金資産及び負債の変動の内訳は以下のとおりであります。

前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	2017年3月31日 残高	純損益で 認識した額	その他の 包括利益で 認識した額	2018年3月31日 残高
繰延税金資産				
未払賞与	1,413	43		1,456
繰越欠損金	2,003	584		1,419
棚卸資産	1,073	289		784
減損損失	56	109		165
退職給付に係る負債	1,688	65	36	1,659
その他	3,136	73	39	3,024
小計	9,369	859	3	8,507
繰延税金負債				
在外子会社の加速償却	2,679	851		1,828
無形資産	3,382	284		3,098
金融資産の公正価値変動	1,627		254	1,881
退職給付に係る資産	2,914	128	529	3,315
在外子会社の留保利益金	2,203	186		2,017
その他	1,061	395		666
小計	13,866	1,844	783	12,805
合計	4,497	985	786	4,298

(注) 純損益で認識した額と繰延税金費用の合計との差額は、為替の変動によるものであります。

当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	2018年3月31日 残高	純損益で 認識した額	その他の 包括利益で 認識した額	2019年3月31日 残高
繰延税金資産				
未払賞与	1,456	43		1,499
繰越欠損金	1,419	367		1,786
棚卸資産	784	51		733
減損損失	165	12		177
退職給付に係る負債	1,659	2	51	1,712
その他	3,024	90	39	2,895
小計	8,507	283	12	8,802
繰延税金負債				
在外子会社の加速償却	1,828	798		2,626
無形資産	3,098	510		2,588
金融資産の公正価値変動	1,881		231	1,650
退職給付に係る資産	3,315	627	16	2,672
在外子会社の留保利益金	2,017	7		2,010
その他	666	209		457
小計	12,805	555	247	12,003
合計	4,298	838	259	3,201

(注) 純損益で認識した額と繰延税金費用の合計との差額は、為替の変動によるものであります。

当社グループは、繰延税金資産の認識にあたり、将来減算一時差異又は繰越欠損金の一部又は全部が将来課税所得に対して利用できる可能性を考慮しております。繰延税金資産の回収可能性の評価においては、予定される繰延税金負債の取崩、予測される将来課税所得及びタックスプランニングを考慮しております。当社グループは、認識された繰延税金資産については、過去の課税所得水準及び繰延税金資産が認識できる期間における将来課税所得の予測に基づき、税務便益が実現する可能性は高いと判断しております。但し、認識可能と考えられる繰延税金資産の金額は、控除可能である期間における将来課税所得見込が減少すれば、同様に減少することとなります。

繰延税金資産を認識していない将来減算一時差異及び税務上の繰越欠損金

繰延税金資産を認識していない将来減算一時差異及び税務上の繰越欠損金は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
将来減算一時差異	7,699	7,422
繰越欠損金	54,937	53,340
合計	62,636	60,762

繰延税金資産を認識していない税務上の繰越欠損金の失効予定は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年目	853	559
2年目	834	964
3年目	1,101	1,459
4年目	1,580	1,041
5年目以降	50,569	49,317
合計	54,937	53,340

繰延税金負債が認識されていない子会社に対する持分に関する将来加算一時差異

当連結会計年度において繰延税金負債として認識されていない子会社の留保利益に関連する一時差異の総額は6,056百万円(前連結会計年度は5,580百万円)であります。

上記の一時差異は、当社グループが一時差異を解消する時期をコントロールでき、予測可能な期間内に一時差異が解消しない可能性が高いため、当該一時差異に係る繰延税金負債を認識しておりません。

(2) 法人所得税費用

税金費用

法人所得税費用の主要な内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期税金費用		
当年度	6,453	4,567
小計	6,453	4,567
繰延税金費用(注)		
一時差異等の発生及び解消	353	961
税率の変更等	618	
小計	971	961
合計	5,482	3,606

(注) 繰延税金費用には、繰延税金資産の評価減又は以前に計上した評価減の戻入(繰延税金資産の回収可能性の評価)により生じた費用の額が含まれております。これに伴う、前連結会計年度及び当連結会計年度における繰延税金費用の増減額は、それぞれ3,178百万円(減少)及び573百万円(増加)であります。

法定実効税率と実際負担税率の調整表

当社グループの法定実効税率と実際負担税率との調整は、以下のとおりであります。実際負担税率は税引前当期利益に対する法人所得税費用の負担割合を表示しております。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
法定実効税率	30.8%	30.6%
在外子会社税率差異	10.4%	120.0%
未認識の繰延税金資産の増減	28.2%	162.9%
のれん減損		214.6%
税率変更による影響	5.5%	
外国源泉税等	10.4%	117.8%
関連会社持分法投資損益	0.4%	7.0%
在外子会社・持分法適用会社の留保利益金	0.2%	1.7%
永久に損金に算入されない項目	0.4%	119.8%
その他	5.1%	19.6%
実際負担税率	48.6%	514.8%

(注) 当社グループは、主に法人税、住民税及び損金算入される事業税を課されており、これらを基礎として計算した当連結会計年度の法定実効税率は30.6%(前連結会計年度は30.8%)であります。ただし、海外子会社についてはその所在地における法人税等が課されております。

(表示方法の変更)

前連結会計年度において、「その他」に含めておりました「永久に損金に算入されない項目」は、重要性が増したため、当連結会計年度で独立掲記することとしております。これらの表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の注記の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の注記において「その他」として表示しておりました4.7%は、「永久に損金に算入されない項目」0.4%、「その他」5.1%として組み替えております。

18. 収益

(1)収益の分解

当社グループは、自動車用品セグメントにおいては、防振ゴム、ホース、内装品、制遮音品などを国内外の顧客に提供しており、一般産業用品セグメントにおいては、精密樹脂ブレード・ロール、車両用・住宅用・橋梁用・電子機器用防振ゴム、高圧ホース・搬送用ホース、ゴムシール材などを国内外の顧客に提供しております。これらの製品については、顧客に製品を引き渡した時点で、履行義務を充足したと判断し、同時点で収益を認識しております。また、収益は、顧客との契約において約束された対価から値引等の見積りを控除した金額で算定しております。

地域別の収益とセグメント売上上の収益の関連は、以下のとおりです。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

報告セグメント	日本	米州	アジア	欧州その他	合計
自動車用品	131,394	103,728	109,924	53,114	398,160
一般産業用品	52,087	329	16,776	2,353	71,545
合計	183,481	104,057	126,700	55,467	469,705

(注) 金額は、外部顧客への売上高で表示しております。

(2)契約残高

顧客との契約から生じた債権及び契約負債の残高は以下のとおりです。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
顧客との契約から生じた債権	94,507	90,874
契約負債	573	901

連結財政状態計算書において、顧客との契約から生じた債権は、営業債権及びその他の債権に含まれておりません。

当連結会計年度の期首現在の前受残高はすべて、当連結会計年度の収益として認識しております。

(3)残存履行義務に配分した取引価格

当社グループにおいては、個別の予想契約期間が1年を超える重要な取引がないため、実務上の便法を使用し、残存履行義務に関する情報の記載を省略しております。また、顧客との契約から生じる対価の中に取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(4)顧客との契約の獲得又は履行のためのコストから認識した資産

当連結会計年度において、顧客との契約の獲得又は履行のためのコストから認識した資産の額に重要性はありません。また、認識すべき資産の償却期間が1年以内である場合には、実務上の便法を使用し、契約獲得の増分コストを発生時に費用として認識しております。

19. 金融商品

(1) 資本管理

当社グループの資本管理における目的は、株主へのリターンの提供、他の利害関係者への便益の供与、並びに資本コスト削減に向けた最適な資本構成の維持のために、継続企業として存続するためのグループの能力を維持することにあります。

資本構成を維持又は調整するために、当社グループは、株主に対して支払う配当の金額を調整したり、株主に対して資本を償還したり、新株を発行したり、又は資産の売却による債務の削減を行う場合があります。

当社グループは有利子負債から現金及び現金同等物を控除した正味有利子負債及び親会社の所有者に帰属する持分、資本負債比率を管理対象としており、各数値は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
有利子負債	106,663	102,944
控除：現金及び現金同等物	41,973	38,371
正味有利子負債(純額)	64,690	64,573
資本(親会社の所有者に帰属する持分)	164,379	158,319
資本負債比率	39.4%	40.8%

当社グループは、中期経営計画の策定及び見直しの都度、収益及び投資計画に加え、これらの指標についてもマネジメントがモニターし、確認しております。

なお、当社グループが適用を受ける重要な資本規制(会社法等の一般的な規定を除く)はありません。

(2) 金融商品の分類

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
金融資産		
純損益を通じて公正価値で測定される金融資産		
デリバティブ	374	610
その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産		
資本性金融資産	6,386	5,738
償却原価で測定される金融資産		
現金及び現金同等物	41,973	38,371
営業債権及びその他の債権	96,293	92,892
その他の金融資産	1,422	1,269
合計	146,448	138,880
金融負債		
純損益を通じて公正価値で測定される金融負債		
デリバティブ	306	163
償却原価で測定される金融負債		
社債	44,805	44,828
借入金	61,242	57,542
営業債務及びその他の債務	82,566	80,921
その他の金融負債	1,797	3,995
ヘッジ手段として指定された金融負債		
デリバティブ	396	345
合計	191,112	187,794

純損益を通じて公正価値で測定される金融資産、その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産は、連結財政状態計算書における「その他の金融資産」に含まれております。

純損益を通じて公正価値で測定される金融負債及びヘッジ手段として指定された金融負債は、連結財政状態計算書における「その他の金融負債」に含まれております。

なお、当初認識時に、純損益を通じて公正価値で測定される金融資産及び金融負債として指定する取消不能な選択を行った金融資産及び金融負債は保有しておりません。

その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産

当社グループは、投資先との取引関係の維持、強化による収益基盤の拡大を目的とする長期保有の株式について、その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産に指定しております。

報告期間末に「その他の金融資産」に計上されている、その他の包括利益を通じて公正価値で測定される資本性金融資産の公正価値及び受取配当金は以下のとおりであります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	公正価値	受取配当金	公正価値	受取配当金
上場株式	54	1	164	1
非上場株式	6,332	10	5,574	10
合計	6,386	11	5,738	11

期中に処分したその他の包括利益を通じて公正価値で測定される資本性金融資産は、以下のとおりであります。

(単位:百万円)

前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)			当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)		
売却日時点の 公正価値	累積利得 (は損失)	受取配当金	売却日時点の 公正価値	累積利得 (は損失)	受取配当金
2,352	302	75	1,447	17	

資本性金融資産は、保有資産の効率化及び有効活用を図るため、定期的に公正価値や発行体の財務状況を把握し、保有の是非について見直しております。なお、前連結会計年度及び当連結会計年度において、その他の資本の構成要素から利益剰余金へ振り替えた累積利得(税引後)は、それぞれ209百万円、12百万円であります。

(3) 財務リスク管理

当社グループは、信用リスク、流動性リスク、市場リスク(為替リスク、金利リスク及び株価変動リスク)などの様々なリスクに晒されております。また、当社グループは市場リスクをヘッジするために、先物為替予約、金利スワップ等のデリバティブ金融商品を利用しております。デリバティブ取引の執行・管理については、取引権限を定めた社内規程に従っており、デリバティブ金融商品を利用した投機的な取引は行わない方針であります。

また、当社グループは設備投資計画に照らして、必要な資金(主に銀行借入や社債発行)を調達しております。一時的な余剰資金は安全性の高い金融資産で運用し、短期的な運転資金を銀行借入により調達しております。資金調達に係る流動性リスクについては、各社が月次で資金繰り計画を作成するなどの方法により管理しております。

信用リスク

当社グループは、保有する金融資産の相手先の債務が不履行になることにより、金融資産が回収不能になるリスク、すなわち信用リスクに晒されております。当該リスクに対応するために、当社グループの与信管理規程に従い、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、主な取引先の信用状況を定期的に把握する体制としております。さらに、必要に応じて担保設定・ファクタリング等を利用することによって保全措置を図っております。

また、当社グループでは、為替相場の変動に係るリスクを軽減するために、金融機関等とデリバティブ金融商品の取引を行っておりますが、デリバティブ金融商品の取引については、信用力の高い金融機関を相手方として行うことが基本となっており、信用リスクに及ぼす影響は限定的であります。

なお、特定の取引先について重要な信用リスクのエクスポージャーはなく、特段の管理を有する信用リスクの過度の集中はありません。

金融資産については、連結財務諸表に表示されている減損後の帳簿価額が、当社グループの信用リスクに係る最大エクスポージャーとなります。

債務保証については、注記「27.偶発負債」に表示されている債務保証の残高が、当社グループの信用リスクに係る最大エクスポージャーとなります。

これらの信用リスクに係るエクスポージャーに関し、担保として保有する物件及びその他の信用補完するものはありません。

()信用リスク・エクスポージャー

営業債権及びその他の債権に係る当社グループの信用リスク・エクスポージャーは、以下のとおりであります。

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

延滞日数	貸倒引当金を 12ヶ月の予想信用損失 に等しい金額で 測定している金融資産	貸倒引当金を全期間にわたる予想信用損失 に等しい金額で測定している金融資産		合計
		信用リスクが当初認識 以降に著しく増大した 金融資産	常に貸倒引当金を 全期間の予想信用損失 に等しい金額で 測定している金融資産	
延滞なし	3,243		84,103	87,346
30日以内	7		7,414	7,421
30日超60日以内	104		1,599	1,703
60日超90日以内	2		248	250
90日超	231		1,149	1,380
合計	3,587		94,513	98,100

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

延滞日数	貸倒引当金を 12ヶ月の予想信用損失 に等しい金額で 測定している金融資産	貸倒引当金を全期間にわたる予想信用損失 に等しい金額で測定している金融資産		合計
		信用リスクが当初認識 以降に著しく増大した 金融資産	常に貸倒引当金を 全期間の予想信用損失 に等しい金額で 測定している金融資産	
延滞なし	3,417		81,495	84,912
30日以内	9		6,471	6,480
30日超60日以内	50		1,230	1,280
60日超90日以内	81		463	544
90日超	177		1,253	1,430
合計	3,734		90,912	94,646

()貸倒引当金の増減分析

当社グループは、取引先の信用状態に応じて営業債権等の回収可能性を検討し、貸倒引当金を計上しております。貸倒引当金の増減は、以下のとおりであります。

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	12ヶ月の予想信用損失	全期間にわたる予想信用損失		合計
		信用リスクが当初認識以降に著しく増大した金融資産	常に貸倒引当金を全期間の予想信用損失に等しい金額で測定している金融資産	
期首残高		5	345	350
当期増加額(繰入額)			133	133
当期減少(目的使用)		5	67	72
当期減少(戻入)			28	28
当期振替 為替換算差額		0	2	2
期末残高			385	385

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	12ヶ月の予想信用損失	全期間にわたる予想信用損失		合計
		信用リスクが当初認識以降に著しく増大した金融資産	常に貸倒引当金を全期間の予想信用損失に等しい金額で測定している金融資産	
期首残高			385	385
当期増加額(繰入額)			238	238
当期減少(目的使用)			22	22
当期減少(戻入)			105	105
当期振替 為替換算差額			11	11
期末残高			485	485

流動性リスク

当社グループは、金融機関からの借入や社債を発行することにより、運転資金や設備投資資金の調達を行っておりますが、これらの債務の履行が困難となるリスク、すなわち流動性リスクに晒されております。当社グループは、事業を遂行するにあたって必要最小限の手元資金を確保するために、適宜金融機関からの借入、社債の発行を行っており、また突発的な資金需要の発生や市場の流動性が著しく低下した時などの緊急的な事態に備えてコミットメントラインを設定しております。

また、当社は、グループ各社の資金需要を適宜把握した上で、月次ベースの資金計画を作成し、流動性リスクを管理しております。

当社グループの非デリバティブ金融負債及びデリバティブ金融負債の残存契約満期間ごとの金額は、以下のとおりであります。

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

	帳簿価額	契約上の キャッシュ ・フロー	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
非デリバティブ 金融負債								
営業債務及び その他の債務	82,566	82,566	82,566					
社債	44,805	46,973	245	246	246	246	10,238	35,752
借入金	61,242	61,702	9,420	10,112	15,095	14,521	5,020	7,534
その他	1,797	1,797	1,599	172	7	5	4	10
合計	190,410	193,038	93,830	10,530	15,348	14,772	15,262	43,296
デリバティブ 金融負債								
為替予約	306	306	306					
金利スワップ	396	396	145	145	50	31	11	14
合計	702	702	451	145	50	31	11	14

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

	帳簿価額	契約上の キャッシュ ・フロー	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
非デリバティブ 金融負債								
営業債務及び その他の債務	80,921	80,921	80,921					
社債	44,828	46,727	246	246	246	10,238	152	35,599
借入金	57,542	57,839	15,161	15,087	14,050	5,019	1,018	7,504
その他	3,995	3,995	3,817	156	5	7	4	6
合計	187,286	189,482	100,145	15,489	14,301	15,264	1,174	43,109
デリバティブ 金融負債								
為替予約	163	163	163					
金利スワップ	345	345	183	70	47	18	16	11
合計	508	508	346	70	47	18	16	11

市場リスク

()為替リスク

当社グループは、グローバルに事業展開を行っており、一部の原材料の調達及び製品の販売を外貨建取引で実施していることから、当該取引より発生する外貨建の債権債務について、為替リスクに晒されております。当社グループの為替リスクは、主に米ドル、人民元及びユーロの為替変動により発生しております。当社グループは、外貨建の債権債務について、それらから発生する為替リスクが将来的に相殺されることも考慮の上、先物為替予約等を付すことにより、当該為替リスクをヘッジしております。

為替感応度分析

以下の表は、当社グループの為替リスクエクスポージャー(純額)に対する感応度分析であります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
税引前当期利益	11	2

感応度分析は、期末に保有している外貨建の金融商品を対象に、1%円高となった場合に税引前当期利益に与える影響額を示しております。本分析においては、その他すべての変数は一定のものと仮定しております。

()金利リスク

当社グループは、事業活動を進める上で、運転資金及び設備投資等に必要となる資金を調達することに伴い発生する利息を支払っておりますが、変動金利での借入を行っている場合には、利息の金額は市場金利の変動に影響を受けることから、利息の将来キャッシュ・フローが変動する金利リスクに晒されております。当社グループは、原則として、資金用途を設備投資等の目的としている長期借入金のうち、変動金利の借入については、金利の上昇による利息の支払額の増加を抑えるために、利息の受取額を変動金利、利息の支払額を固定金利としてその差額を授受する金利スワップ契約を金融機関と締結しております。

その結果、利息の支払いが当社グループに与える影響は小さく、金利リスクは当社グループにとって重要なものではないと考えているため、金利感応度分析は行っておりません。

()株価変動リスク

当社グループは、事業活動の円滑な推進を目的として、主に業務上の関係を有する会社の株式を保有していることから、株価変動リスクに晒されております。当社グループは、定期的に公正価値や取引先企業の財務状況等を把握し、取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

株式は、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に指定しており、株価変動に対する損益への影響はなく、また、その他の包括利益への影響も軽微です。

(4) 金融商品の公正価値

公正価値の測定方法

(現金及び現金同等物、営業債権及びその他の債権、営業債務及びその他の債務)

これらは短期間で決済されるものであるため、帳簿価額が公正価値の合理的な近似値となっております。

(その他の金融資産、その他の金融負債)

その他の金融資産のうち、3ヶ月超の定期預金等については、短期間で決済されるものであるため、帳簿価額が公正価値の合理的な近似値となっております。

その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産のうち、上場株式については取引所の市場価格、非上場株式については類似会社の市場価格に基づく評価技法等を用いて算定しております。

純損益を通じて公正価値で測定される金融資産及び金融負債並びにヘッジ手段として指定された金融資産及び金融負債であるデリバティブについては、取引先金融機関から提示された価格に基づいて算定しております。

(社債、借入金)

社債及び借入金については、将来キャッシュ・フローを、同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

金融商品の区分ごとの公正価値

償却原価で測定される金融商品の公正価値は以下のとおりであります。なお、公正価値で測定される金融商品については、「(2) 金融商品の分類」において開示しております。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)	
	帳簿価額	公正価値	帳簿価額	公正価値
償却原価で測定される金融資産				
現金及び現金同等物	41,973	41,973	38,371	38,371
営業債権及びその他の債権	96,293	96,293	92,892	92,892
その他の金融資産	1,422	1,422	1,269	1,269
償却原価で測定される金融負債				
社債	44,805	45,301	44,828	45,747
借入金	61,242	61,306	57,542	57,591
営業債務及びその他の債務	82,566	82,566	80,921	80,921
その他の金融負債	1,797	1,797	3,997	3,997

公正価値ヒエラルキー

以下の表は、金融資産及び金融負債に関する経常的な公正価値測定を分析したものであります。これらの公正価値測定は、用いられる評価技法へのインプットに基づいて、3つの公正価値ヒエラルキーのレベルに区分されております。それぞれのレベルは、以下のように定義付けられております。

レベル1：当社グループが測定日にアクセスできる、同一の資産又は負債に関する活発な市場における相場価格(無調整)

レベル2：レベル1に含まれる相場価格以外のインプットのうち、資産又は負債について直接的又は間接的に観察可能なもの

レベル3：資産又は負債に関する観察可能でないインプット

公正価値ヒエラルキーのレベル間の振替は、振替を生じさせた事象又は状況の変化が生じた日に認識しております。

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位:百万円)

	レベル1	レベル2	レベル3
純損益を通じて公正価値で測定される金融資産 デリバティブ		374	
その他の包括利益を通じて公正価値で測定される 金融資産			
上場株式	54		
非上場株式			6,332
資産合計	54	374	6,332
純損益を通じて公正価値で測定される金融負債 デリバティブ		306	
ヘッジ手段として指定された金融負債 デリバティブ		396	
負債合計		702	

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位:百万円)

	レベル1	レベル2	レベル3
純損益を通じて公正価値で測定される金融資産 デリバティブ		610	
その他の包括利益を通じて公正価値で測定される 金融資産			
上場株式	164		
非上場株式			5,574
資産合計	164	610	5,574
純損益を通じて公正価値で測定される金融負債 デリバティブ		163	
ヘッジ手段として指定された金融負債 デリバティブ		345	
負債合計		508	

「金融商品の区分ごとの公正価値」で開示している、償却原価で測定される金融商品の公正価値ヒエラルキーはすべてレベル3であります。

前連結会計年度及び当連結会計年度において、レベル1と2間の振替はありませんでした。

レベル2、3に区分される公正価値測定に関する情報

(a) 評価技法及びインプット

レベル2の金融資産及び金融負債は、デリバティブ金融資産及びデリバティブ金融負債であります。これらの公正価値は、取引先金融機関から提示された価格に基づき算定しております。

レベル3の金融資産は、主として非上場株式であります。非上場株式の公正価値は、類似会社の市場価格に基づく評価技法等を用いて算定しております。非上場株式の公正価値測定にあたっては、評価倍率等の観察可能でないインプットを用いております。

(b) 評価プロセス

レベル3の金融商品に係る公正価値の測定は、関連する社内規程に従い実施しております。公正価値の測定に際しては、対象となる金融商品の性質、特徴及びリスクを最も適切に反映できる評価技法及びインプットを用いております。また公正価値の測定結果については上位役職者のレビューを受けております。

(c) レベル3に区分される経常的な公正価値測定

経常的に公正価値で測定されるレベル3に分類される金融商品の公正価値の測定に関する重要な観察可能でないインプットは、EBIT倍率及び非流動性ディスカウントであります。公正価値はEBIT倍率の上昇(低下)により増加(減少)し、非流動性ディスカウントの上昇(低下)により減少(増加)します。

レベル3に分類される金融商品について、観察可能でないインプットを合理的に考え得る代替的な仮定に変更した場合の公正価値の増減は重要ではありません。

レベル3に分類された金融商品の期首残高から期末残高への調整表

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
期首残高	5,397	6,332
購入		
利得又は損失合計 その他の包括利益(注)	935	758
売却・決済		
その他の変動		
期末残高	6,332	5,574

(注) その他の包括利益に含まれている利得及び損失は報告期間末時点に保有する市場で取引されていない株式等に関するものであります。これらは「その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産」に含まれております。

(5) デリバティブ金融商品

キャッシュ・フロー・ヘッジ

当社グループは、変動金利の借入に関するキャッシュ・フローの変動をヘッジするために金利スワップを利用しております。

キャッシュ・フロー・ヘッジとして指定されたデリバティブ取引の公正価値の変動は、その他の包括利益として認識し、その他の資本の構成要素に含まれており、ヘッジ対象が純損益に認識された時点で純損益へ振り替えております。

当連結会計年度末において、キャッシュ・フローが発生すると見込まれる期間及びそれらが純損益に影響を与えることになると見込まれる期間は2年から6年であります。

ヘッジ会計を適用していないデリバティブ

当社グループは、ヘッジ関係がヘッジ会計を適用する要件を満たさない場合も含め、デリバティブを利用することが経済的に合理的である場合に、デリバティブを利用しております。

当社グループは、外貨建資産・負債に係る為替変動リスクを回避するために為替予約を利用しております。当該デリバティブ取引にはヘッジ会計を適用せずに、公正価値の変動はすべて純損益に認識しております。

前連結会計年度末及び当連結会計年度末における、ヘッジ手段として指定されたデリバティブは以下のとおりであります。

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

	ヘッジ手段の 想定元本	ヘッジ手段の帳簿価額		ヘッジ手段の連結 財政状態計算書上 の表示科目	ヘッジ非有効部分 の計算に用いた 公正価値変動
		資産	負債		
キャッシュ・フロー・ヘッジ					
金利リスク					
金利スワップ	23,500		396	その他の金融負債 (流動・非流動)	

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

	ヘッジ手段の 想定元本	ヘッジ手段の帳簿価額		ヘッジ手段の連結 財政状態計算書上 の表示科目	ヘッジ非有効部分 の計算に用いた 公正価値変動
		資産	負債		
キャッシュ・フロー・ヘッジ					
金利リスク					
金利スワップ	24,138		345	その他の金融負債 (流動・非流動)	

前連結会計年度末及び当連結会計年度末における、ヘッジ対象として指定された資産又は負債は以下のとおりであります。

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

	ヘッジ非有効部分の計算に用いた 公正価値変動	キャッシュ・フロー・ヘッジ 剰余金
キャッシュ・フロー・ヘッジ		
金利リスク		
借入金		276

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

	ヘッジ非有効部分の計算に用いた 公正価値変動	キャッシュ・フロー・ヘッジ 剰余金
キャッシュ・フロー・ヘッジ		
金利リスク		
借入金		240

前連結会計年度及び当連結会計年度における、ヘッジ会計の適用による連結損益計算書への影響は以下のとおりであります。

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	その他の包括利益に認識されたヘッジ手段の価値の変動(注)	純損益に認識した非有効部分	純損益における表示科目(ヘッジ非有効部分を含む)	キャッシュ・フロー・ヘッジ剰余金から純損益に振り替えた金額(注)	振替により純損益における影響を受けた表示科目
キャッシュ・フロー・ヘッジ					
金利リスク					
金利スワップ	127			150	金融費用

(注) 税効果調整前の金額であります。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	その他の包括利益に認識されたヘッジ手段の価値の変動(注)	純損益に認識した非有効部分	純損益における表示科目(ヘッジ非有効部分を含む)	キャッシュ・フロー・ヘッジ剰余金から純損益に振り替えた金額(注)	振替により純損益における影響を受けた表示科目
キャッシュ・フロー・ヘッジ					
金利リスク					
金利スワップ	52			155	金融費用

(注) 税効果調整前の金額であります。

前連結会計年度末及び当連結会計年度末における、ヘッジ会計を適用していないデリバティブの公正価値は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)	
	資産	負債	資産	負債
ヘッジ指定されていないデリバティブ：				
為替予約	374	306	610	163
合計	374	306	610	163

ヘッジ手段であるデリバティブの公正価値全額は、ヘッジ対象の満期までの期間が12ヶ月を超える場合には非流動資産又は負債に、また12ヶ月を超えない場合には流動資産又は負債に分類しております。

20. キャッシュ・フロー情報

財務活動に係る負債の変動

財務活動に係る負債の変動は以下のとおりであります。

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	期首残高	キャッシュ・フローを伴う変動	キャッシュ・フローを伴わない変動			期末残高
			取得	償却原価測定	為替変動	
短期借入金	6,367	1,981			94	4,292
長期借入金	56,146	45		8	841	56,950
社債	44,853	79		31		44,805
リース債務	702	651	563		2	616
合計	108,068	2,756	563	39	749	106,663

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	期首残高	キャッシュ・フローを伴う変動	キャッシュ・フローを伴わない変動			期末残高
			取得	償却原価測定	為替変動	
短期借入金	4,292	1,020			247	5,065
長期借入金	56,950	4,012		8	469	52,477
社債	44,805	-		23		44,828
リース債務	616	554	513		1	574
合計	106,663	3,546	513	31	717	102,944

21. 資本及びその他の資本項目

(1) 資本金及び資本剰余金

授權株式総数及び発行済株式数の増減は、以下のとおりであります。

	授權株式総数 (株)	発行済株式数 (株)	資本金 (百万円)	資本剰余金 (百万円)
2017年4月1日残高	400,000,000	104,042,806	12,145	10,729
増減				
2018年3月31日残高	400,000,000	104,042,806	12,145	10,729
増減				1,322
2019年3月31日残高	400,000,000	104,042,806	12,145	12,051

(注1) 当社の発行する株式は、無額面普通株式であります。

(注2) 発行済株式は、全額払込済であります。

(2) 自己株式

自己株式数及び自己株式残高の増減は、以下のとおりであります。

	株式数 (株)	金額 (百万円)
2017年4月1日残高	212,483	269
増減	1,169	1
2018年3月31日残高	213,652	270
増減	757	1
2019年3月31日残高	214,409	271

(注1) 自己株式数及び自己株式残高の期中増加は、単元未満株式の買取等によるものであります。

(注2) 関連会社が保有する自己株式は、前連結会計年度末、当連結会計年度末において、それぞれ37百万円、38百万円であります。

(3) その他の資本の構成要素

その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産

その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産の公正価値の変動額であります。

キャッシュ・フロー・ヘッジ

当社グループは将来キャッシュ・フローの変動リスクを回避するためのヘッジを行っており、キャッシュ・フロー・ヘッジとして指定されたデリバティブ取引の公正価値の変動額のうち有効と認められる部分であります。

在外営業活動体の為替換算差額

外貨建てで作成された在外営業活動体の財務諸表を連結する際に発生した換算差額であります。

確定給付制度の再測定

確定給付制度債務に係る数理計算上の差異、制度資産に係る収益(制度資産に係る利息収益の金額を除く)等で構成されております。

(4) 配当金

各年度における配当金支払額は、以下のとおりであります。

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2017年6月22日 定時株主総会	普通株式	1,038	10.00	2017年3月31日	2017年6月23日
2017年10月30日 取締役会	普通株式	1,038	10.00	2017年9月30日	2017年12月1日

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2018年6月21日 定時株主総会	普通株式	1,038	10.00	2018年3月31日	2018年6月22日
2018年10月30日 取締役会	普通株式	1,038	10.00	2018年9月30日	2018年12月3日

また、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるものは、以下のとおりであります。

前連結会計年度(自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日)

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2018年 6月21日 定時株主総会	普通株式	1,038	10.00	2018年 3月31日	2018年 6月22日

当連結会計年度(自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月31日)

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2019年 6月20日 定時株主総会	普通株式	415	4.00	2019年 3月31日	2019年 6月21日

22. 費用の性質別内訳

売上原価、販売費及び一般管理費の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月31日)
原材料及び消耗品消費高	232,746	239,558
人件費	103,935	107,085
減価償却費及び償却費	28,766	29,781
外注加工費	28,530	27,871
研究開発費	11,581	10,614
その他	44,620	45,258
合計	450,178	460,167

23. 金融収益及び金融費用

(1) 金融収益

金融収益の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月31日)
受取利息		
償却原価で測定される金融資産	242	242
その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産	5	
受取配当金		
その他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産	86	11
為替差益(注)		411
その他	32	29
合計	365	693

(注) 通貨デリバティブの評価損益は、為替差益に含めております。

(2) 金融費用

金融費用の内訳は、以下のとおりであります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
支払利息		
償却原価で測定される金融負債(注1)	986	1,047
為替差損(注2)	167	
その他	123	99
合計	1,276	1,146

(注1) 金利デリバティブの評価損益は、支払利息に含めております。

(注2) 通貨デリバティブの評価損益は、為替差損に含めております。

24. その他の収益及びその他の費用(金融収益及び金融費用を除く)

(1) その他の収益

その他の収益の内訳は、以下のとおりであります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
固定資産売却益	142	126
スクラップ売却益	118	136
その他	1,145	1,093
合計	1,405	1,355

(2) その他の費用

その他の費用の内訳は、以下のとおりであります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
固定資産除売却損	314	636
減損損失	405	7,178
事業構造改善費用	310	50
その他	1,040	1,717
合計	2,069	9,581

25. その他の包括利益

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他の包括利益を通じて公正価値で測定される 金融資産		
当期発生額	1,130	774
組替調整額		
税効果調整前	1,130	774
税効果額	347	236
その他の包括利益を通じて公正価値で 測定される金融資産	783	538
確定給付制度の再測定		
当期発生額	1,567	163
組替調整額		
税効果調整前	1,567	163
税効果額	493	67
確定給付制度の再測定	1,074	96
持分法によるその他の包括利益		
当期発生額	182	220
組替調整額		
税効果調整前	182	220
税効果額		
持分法によるその他の包括利益	182	220
在外営業活動体の為替換算差額		
当期発生額	109	404
組替調整額		
税効果調整前	109	404
税効果額		
在外営業活動体の為替換算差額	109	404
キャッシュ・フロー・ヘッジ		
当期発生額	23	103
組替調整額	150	155
税効果調整前	127	52
税効果額	39	16
キャッシュ・フロー・ヘッジ	88	36
その他の包括利益合計	2,236	414

26. 1株当たり当期利益

基本的1株当たり当期利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
親会社の所有者に帰属する当期利益 (は損失)(百万円)	3,528	5,022
期中平均普通株式数(千株)	103,830	103,829
基本的1株当たり当期利益(は損失)(円)	33.98	48.37

27. 偶発負債

当連結会計年度における偶発債務の内容は以下のとおりです。

(1) 訴訟等

自動車用品事業において、同分野の競争法違反行為により被害を被ったとして、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

なお、当社及び当社子会社の立場が著しく不利になる可能性があるため、IAS第37号「引当金、偶発負債及び偶発資産」の92項に従い、訴訟等に係る詳細な開示は行っておりません。

28. 関連当事者との取引

(1) 親会社

当社グループは、当社株式の50.7%を保有する住友電気工業(株)(日本で設立)によって支配されております。残り49.3%の株式は分散して保有されております。

(2) 従業員のための企業年金等

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

種類	会社等の名称又は氏名	取引内容	取引金額
従業員のための企業年金	住友理工企業年金基金	退職給付信託資産の返還	1,674

(3) 経営幹部に対する報酬

当社グループの経営幹部に対する報酬は、以下のとおりであります。

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	報酬等の総額	報酬等の種類別の総額	
		基本報酬	賞与
経営幹部に対する報酬	387	332	55

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	報酬等の総額	報酬等の種類別の総額	
		基本報酬	賞与
経営幹部に対する報酬	312	312	

29. 子会社

(1) 主要な子会社の状況

当社グループの主要な子会社は「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載のとおりであります。
なお、当連結会計年度末における子会社持分に関する主な取引の概要は、次のとおりです。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

株式会社住理工ファインエラストマーの完全子会社化について

当社は2018年10月に当社の連結子会社である株式会社住理工ファインエラストマー（以下、SRK-FE）の発行済総株式総数の4%を取得いたしました。また、同年11月にSRK-FEは発行済総株式総数の20%を自己株取得致しました。

これらの取引により、当社グループはSRK-FEの発行済み株式総数の全てを所有することとなります。

当社グループはこれらの取引の直前において、SRK-FEの発行済株式総数の76%を所有していたことから、本取引は資本取引として会計処理しております。本取引に伴う資本剰余金の増加額及び非支配持分の減少額は、次の通りです。

資本剰余金の増加額	1,322百万円
非支配持分の減少額	2,783百万円

(2) 当社グループにとって重要な非支配持分がある子会社の要約財務情報等

SumiRiko Eastern Rubber (Thailand) Ltd.

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非支配持分が保有する持分の割合(%)	34.00%	34.00%

なお、SumiRiko Eastern Rubber (Thailand) Ltd.の前連結会計年度末及び当連結会計年度末現在の資産合計は、それぞれ28,682百万円及び30,376百万円、負債合計は、それぞれ3,842百万円及び3,959百万円です。また、前連結会計年度及び当連結会計年度の当期利益のうち非支配持分に配分された金額は、それぞれ913百万円、825百万円、非支配持分に支払われた配当金は、それぞれ489百万円、475百万円です。

30. 持分法で会計処理されている投資

持分法で会計処理されている、個々に重要性のない関連会社に対する当社グループに帰属する持分の帳簿価額は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
帳簿価額	4,435	4,014

持分法で会計処理されている、個々に重要性のない関連会社の要約財務情報は、以下のとおりであります。なお、これらの金額は、当社グループの持分比率勘案後のものであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期利益(継続事業からの純損益) (は損失)	153	159
その他の包括利益(税引後)	182	220
当期包括利益合計	335	379

(注) 前連結会計年度及び当連結会計年度において、当社グループの持分の認識を停止している関連会社に対する重要な累積投資損失は該当ありません。

31. 後発事象

記載すべき事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	118,093	231,370	350,429	469,705
税引前四半期(当期)利益 (百万円)	2,581	4,046	6,459	700
親会社の所有者に 帰属する四半期 (当期)利益又は 損失() (百万円)	997	1,093	1,736	5,022
基本的1株当たり 四半期(当期)利益 又は損失 (円)	9.61	10.53	16.72	48.37

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
基本的1株当たり 四半期利益 (円)	9.61	0.92	6.19	65.09

訴訟

当社は、マツダ(株)から訴訟を提起され、2014年6月に訴状を受領いたしました。訴状によりますと、マツダ(株)は、パワーステアリング装置向けの当社部品の不具合が原因で、乗用車3車種について市場改善措置を実施した件につき、不具合の原因が当社にあるとして、訴額16,270百万円の損害賠償を求めてきております。

当社といたしましては、訴訟において、不具合の発生原因が当社にはないとする立場を主張してまいります。

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	23,684	20,375
受取手形	3 100	3 125
電子記録債権	1, 3 1,988	1, 3 4,170
売掛金	1 38,425	1 34,625
商品及び製品	2,872	2,912
仕掛品	3,372	3,349
原材料及び貯蔵品	1,932	1,939
未収入金	1 10,863	1 13,856
関係会社短期貸付金	29,292	37,776
その他	1 319	1 723
貸倒引当金	0	0
流動資産合計	112,847	119,850
固定資産		
有形固定資産		
建物	13,915	13,605
構築物	1,070	1,043
機械及び装置	14,586	13,385
車両運搬具	62	67
工具、器具及び備品	2,697	2,619
土地	7,076	7,081
建設仮勘定	1,324	1,472
有形固定資産合計	40,730	39,272
無形固定資産		
営業権	620	380
ソフトウェア等	5,701	5,065
無形固定資産合計	6,321	5,445
投資その他の資産		
投資有価証券	244	354
関係会社株式・出資金	94,960	73,901
関係会社長期貸付金	10,342	13,779
前払年金費用	6,013	5,215
繰延税金資産	2,015	2,416
その他	2,228	3,165
貸倒引当金	39	36
投資その他の資産合計	115,763	98,794
固定資産合計	162,814	143,511
資産合計	275,661	263,361

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	1 42,695	1 40,331
短期借入金	1 19,150	1 27,343
未払金	1 7,981	1 8,036
未払費用	1 4,608	1 4,400
未払法人税等	251	187
預り金	580	585
引当金	184	169
その他	1 240	1 128
流動負債合計	75,689	81,179
固定負債		
社債	45,000	45,000
長期借入金	51,055	41,587
退職給付引当金	3,103	3,186
その他	608	518
固定負債合計	99,766	90,291
負債合計	175,455	171,470
純資産の部		
株主資本		
資本金	12,145	12,145
資本剰余金		
資本準備金	10,867	10,867
その他資本剰余金	0	0
資本剰余金合計	10,867	10,867
利益剰余金		
利益準備金	1,456	1,456
その他利益剰余金		
特別償却準備金	44	43
固定資産圧縮積立金	239	237
別途積立金	74,593	74,593
繰越利益剰余金	1,404	6,948
利益剰余金合計	77,736	69,381
自己株式	270	271
株主資本合計	100,478	92,122
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	4	9
繰延ヘッジ損益	276	240
評価・換算差額等合計	272	231
純資産合計	100,206	91,891
負債純資産合計	275,661	263,361

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当事業年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
売上高	2 175,064	2 177,439
売上原価	2 155,117	2 156,999
売上総利益	19,947	20,440
販売費及び一般管理費	1,2 23,018	1,2 22,436
営業損失()	3,071	1,996
営業外収益		
受取利息及び受取配当金	2 8,809	2 18,965
その他	2 756	2 873
営業外収益合計	9,565	19,838
営業外費用		
支払利息	2 684	2 659
減損損失	453	95
固定資産廃棄損	118	255
社債発行費	81	
その他	74	206
営業外費用合計	1,410	1,215
経常利益	5,084	16,627
特別利益		
退職給付信託返還益		3 273
関係会社株式売却益	2,265	
投資有価証券売却益	297	
特別利益合計	2,562	273
特別損失		
関係会社株式・出資金評価損		22,422
減損損失	363	145
特別損失合計	363	22,567
税引前当期純利益又は税引前当期純損失()	7,283	5,667
法人税、住民税及び事業税	1,649	1,031
法人税等調整額	42	420
法人税等合計	1,607	611
当期純利益又は当期純損失()	5,676	6,278

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金	
					特別償却準備金	固定資産圧縮積立金	
当期首残高	12,145	10,867	0	10,867	1,456	43	260
当期変動額							
剰余金の配当							
当期純利益又は当期純損失()							
特別償却準備金の積立						16	
特別償却準備金の取崩						15	
固定資産圧縮積立金の取崩							21
自己株式の取得							
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)							
当期変動額合計						1	21
当期末残高	12,145	10,867	0	10,867	1,456	44	239

	株主資本					評価・換算差額等		純資産合計
	利益剰余金			自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	
	その他利益剰余金		利益剰余金合計					
	別途積立金	繰越利益剰余金						
当期首残高	74,593	2,215	74,137	269	96,880	77	364	96,593
当期変動額								
剰余金の配当		2,077	2,077		2,077			2,077
当期純利益又は当期純損失()		5,676	5,676		5,676			5,676
特別償却準備金の積立		16						
特別償却準備金の取崩		15						
固定資産圧縮積立金の取崩		21						
自己株式の取得				1	1			1
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)						73	88	15
当期変動額合計		3,619	3,599	1	3,598	73	88	3,613
当期末残高	74,593	1,404	77,736	270	100,478	4	276	100,206

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金	
					特別償却準備金	固定資産圧縮積立金	
当期首残高	12,145	10,867	0	10,867	1,456	44	239
当期変動額							
剰余金の配当							
当期純利益又は当期純損失()							
特別償却準備金の積立						13	
特別償却準備金の取崩						14	
固定資産圧縮積立金の取崩							2
自己株式の取得							
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)							
当期変動額合計						1	2
当期末残高	12,145	10,867	0	10,867	1,456	43	237

	株主資本					評価・換算差額等		純資産合計
	利益剰余金			自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	
	その他利益剰余金		利益剰余金合計					
	別途積立金	繰越利益剰余金						
当期首残高	74,593	1,404	77,736	270	100,478	4	276	100,206
当期変動額								
剰余金の配当		2,077	2,077		2,077			2,077
当期純利益又は当期純損失()		6,278	6,278		6,278			6,278
特別償却準備金の積立		13						
特別償却準備金の取崩		14						
固定資産圧縮積立金の取崩		2						
自己株式の取得				1	1			1
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)						5	36	41
当期変動額合計		8,352	8,355	1	8,356	5	36	8,315
当期末残高	74,593	6,948	69,381	271	92,122	9	240	91,891

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 満期保有目的の債券.....償却原価法

(2) 子会社株式及び関連会社株式.....移動平均法による原価法

(3) その他有価証券

イ. 時価のあるもの.....事業年度末日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定しております。)

ロ. 時価のないもの.....移動平均法による原価法

2. デリバティブ等の評価基準及び評価方法

デリバティブ.....時価法

3. たな卸資産の評価基準及び評価方法

主として総平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定して
おります。)

4. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づき定額法を採用して
おります。また、営業権については、見込存続期間を償却年数(5年)とする定額法によっております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リースに係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

5. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権に
ついては個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上
しております。

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給
付算定式基準によっております。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(15年)による定
額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(15年)による定
額法により按分した額をそれぞれ発生翌事業年度から費用処理しております。

6. 外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、事業年度末日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しておりません。

7. 重要なヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理を採用しております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段...金利スワップ

ヘッジ対象...借入金利息

(3) ヘッジ方針

デリバティブ取引は、内規に基づき、為替変動リスク及び金利変動リスクを回避するために行っております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジの有効性の評価は、ヘッジ対象とヘッジ手段を明らかにした上で、ヘッジ対象の相場変動又はキャッシュ・フロー変動とヘッジ手段の相場変動又はキャッシュ・フロー変動を比較し、両者の変動額を基礎として継続的(原則3ヶ月毎)に行っております。

ただし、名目金額、満期、基礎数値など、ヘッジ手段とヘッジ対象の重要な条件が完全にもしくはほぼ一致しており、両者の経済的な相殺効果が明らかである場合には、事前判定をもって有効性の判定に代えることとしております。

8. その他財務諸表作成のための重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっており、控除対象外消費税及び地方消費税は、当事業年度の費用として処理しております。

(表示方法の変更)

(貸借対照表)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」1,695百万円は、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」2,015百万円に含めて表示しております。

(貸借対照表関係)

1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分掲記したものを除く)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期金銭債権	16,906百万円	19,388百万円
短期金銭債務	28,661百万円	30,713百万円

2. 保証債務

下記の関係会社の金融機関借入金等に対し、次のとおり債務保証を行っております。

	前事業年度 (2018年3月31日)		当事業年度 (2019年3月31日)
PT.Tokai Rubber Indonesia	993百万円 (128,900百万インドネシアルピア)	SumiRiko do Brasil Indústria de Borrachas Ltda.	1,821百万円 (63,999千リアル)
住理工山形㈱	900百万円	PT. Tokai Rubber Indonesia	1,292百万円 (165,600百万インドネシアルピア)
東海化成(天津)汽車部品有限公司	674百万円 (39,805千元)	住理工山形㈱	900百万円
SumiRiko Hose Otomotiv Sanayi Ticaret ve Pazarlama Limited Sirketi	593百万円 (5,260千リラ) (3,450千ユーロ)	大興住理工橡塑材料(塩城)有限公司	857百万円 (51,998千元)
Tokai Rubber Auto-Parts India Pvt. Ltd.	574百万円 (350百万インドルピー)	その他(10社)	2,631百万円
Sumitomo Riko Europe GmbH	548百万円 (10,000千ズロチ) (7,937千ランド) (6,000千レイ)		
その他(10社)	2,422百万円		
計	6,704百万円	計	7,501百万円

上記のうち外貨建保証債務は、事業年度末日の為替相場により円換算しております。

3 期末日満期手形及び電子記録債権

期末日満期手形及び電子記録債権の会計処理については、手形交換日又は決済日をもって決済処理しております。なお、期末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形及び電子記録債権が期末残高に含まれております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
受取手形	9百万円	8百万円
電子記録債権	29百万円	3百万円

4. その他

前事業年度(2018年3月31日)

自動車用品事業において、同分野の競争法違反行為により被害を被ったとして、米国等において集団訴訟が当社及び当社子会社に対して提起されているほか、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

当事業年度(2019年3月31日)

自動車用品事業において、同分野の競争法違反行為により被害を被ったとして、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

(損益計算書関係)

- 1 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度23%、当事業年度24%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度77%、当事業年度76%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
荷造運送費	4,938百万円	4,857百万円
従業員給料賃金	4,960百万円	5,130百万円
減価償却費	1,948百万円	1,881百万円
その他の引当金繰入額	58百万円	34百万円

- 2 関係会社との取引に係るものが次のとおり含まれております。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
関係会社に対する売上高	35,077百万円	35,115百万円
関係会社からの仕入高	45,079百万円	49,500百万円
関係会社との営業取引以外の取引高	11,301百万円	19,142百万円

3 退職給付信託返還益

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

当社において年金資産が退職給付債務に対して積立超過であり、今後もその状態が継続すると見込まれることから、退職給付信託の解約を行っております。

これに伴い未認識数理計算上の差異を一括処理したものであります。

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式 54,588百万円、関連会社株式2,582百万円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式69,276百万円、関連会社株式4,408百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
未払賞与	1,093百万円	1,116百万円
製品保証引当金	42百万円	38百万円
たな卸資産評価損	311百万円	313百万円
有価証券評価損	94百万円	89百万円
未払費用	233百万円	140百万円
減損損失	533百万円	523百万円
退職給付引当金	950百万円	975百万円
関係会社株式・出資金評価損	9,861百万円	16,729百万円
繰越欠損金	832百万円	1,034百万円
その他	2,930百万円	2,995百万円
繰延税金資産小計	16,879百万円	23,952百万円
評価性引当額	12,842百万円	19,752百万円
繰延税金資産合計	4,037百万円	4,200百万円
繰延税金負債		
前払年金費用	1,840百万円	1,596百万円
その他有価証券評価差額金	2百万円	4百万円
固定資産圧縮積立金	106百万円	104百万円
その他	74百万円	80百万円
繰延税金負債合計	2,022百万円	1,784百万円
繰延税金資産の純額	2,015百万円	2,416百万円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.8%	- %
(調整)		
評価性引当額の増減	13.6%	- %
住民税均等割等	0.5%	- %
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	34.4%	- %
交際費等永久に損金に算入されない項目	3.4%	- %
外国源泉税	8.1%	- %
税額控除	0.8%	- %
その他	0.9%	- %
税効果会計適用後の法人税等の負担率	22.1%	- %

(注) 当事業年度は、税引前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。

(重要な後発事象)

(連結子会社の吸収合併)

当社は、2018年10月30日開催の取締役会において、当社を存続会社、株式会社住理工ファインエラストマーを消滅会社とする吸収合併を行うことを決議し、2018年11月29日付で合併契約を締結しました。この契約に基づき、2019年4月1日付で株式会社住理工ファインエラストマーを吸収合併いたしました。

1. 取引概要

(1) 結合当事企業の名称及び当該事業の内容

結合当事企業の名称	株式会社住理工ファインエラストマー
事業の内容	ゴムシール材の製造および販売

(2) 企業結合日

2019年4月1日

(3) 企業結合の法的形式

当社を存続会社とする吸収合併方式で、株式会社住理工ファインエラストマーは解散いたしました。

(4) 企業結合の目的

当社の、ファインエラストマー事業(以下、「本事業」という)において、本事業にかかる製品を製造販売する株式会社住理工ファインエラストマーを吸収合併することにより、開発体制の強化及びグローバル営業体制の強化並びに管理業務の一層の効率化を図るものです。

2. 実施する会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」(企業会計基準第21号)及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第10号)に基づき、共通支配下の取引として会計処理を行っております。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	期首 帳簿価額	当期 増加額	当期 減少額	当期 償却額	期末 帳簿価額	減価償却 累計額
有形 固定 資産	建物	13,915	678	46 ()	942	13,605	29,629
	構築物	1,070	103	5 ()	125	1,043	4,514
	機械及び装置	14,586	3,688	1,747 (211)	3,142	13,385	78,910
	車両運搬具	62	30	1 ()	24	67	389
	工具、器具及び備品	2,697	1,806	81 (25)	1,803	2,619	24,219
	土地	7,076	5	()		7,081	
	建設仮勘定	1,324	5,665	5,517 (3)		1,472	
	計	40,730	11,975	7,397 (239)	6,036	39,272	137,661
無形 固定 資産	営業権	620			240	380	
	ソフトウェア等	5,701	1,125	2 (1)	1,759	5,065	
	計	6,321	1,125	2 (1)	1,999	5,445	

(注) 1. 当期増加額のうち主なもの(建設仮勘定の増加額の多くは本勘定に振替られているため、記載を省略しております。)

機械及び装置	小牧製作所	防振製造用設備	1,124
工具、器具及び備品	小牧製作所	防振製造用工具	1,003

2. 「当期減少額」欄の()は内数で、当期の減損損失計上額であります。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	39		3	36
その他の引当金	184	177	192	169

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

訴訟

当社は、マツダ(株)から訴訟を提起され、2014年6月に訴状を受領いたしました。訴状によりますと、マツダ(株)は、パワーステアリング装置向けの当社部品の不具合が原因で、乗用車3車種について市場改善措置を実施した件につき、不具合の原因が当社にあるとして、訴額16,270百万円の損害賠償を求めてきております。

当社といたしましては、訴訟において、不具合の発生原因が当社にはないとする立場を主張してまいります。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 名古屋市中区栄三丁目15番33号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告により行います。ただし、電子公告によることができない事故その他のやむを得ない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載して行います。
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、法令により定款をもってしても制限することができない権利、株主 割当による募集株式及び募集新株予約権の割当てを受ける権利並びに単元未満株式の買増請求をする権利以外の権利を有しておりません。

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

[事業年度(第130期)] 自 2017年4月1日 至 2018年3月31日]
2018年6月22日 関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類 2018年6月22日 関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

[(第131期第1四半期)] 自 2018年4月1日 至 2018年6月30日]
2018年8月2日 関東財務局長に提出

[(第131期第2四半期)] 自 2018年7月1日 至 2018年9月30日]
2018年11月2日 関東財務局長に提出

[(第131期第3四半期)] 自 2018年10月1日 至 2018年12月31日]
2019年2月1日 関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書 2018年6月27日 関東財務局長に提出

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2の規定に基づく臨時報告書であります。

2018年10月30日 関東財務局長に提出

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第7号の3の規定に基づく臨時報告書であります。

2019年4月26日 関東財務局長に提出

金融商品取引法第24条の5第4項並びに企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第12号及び第19号の規定に基づく臨時報告書であります。

(5) 発行登録書(普通社債)及びその添付書類 2018年6月28日 関東財務局長に提出

(6) 訂正発行登録書(普通社債) 2018年10月30日 関東財務局長に提出

2019年4月26日 関東財務局長に提出

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年 6月20日

住友理工株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	福 井 淳 印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	川 口 真 樹 印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	金 原 正 英 印

< 財務諸表監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている住友理工株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結財政状態計算書、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結持分変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及び連結財務諸表注記について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則第93条の規定により国際会計基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、国際会計基準に準拠して、住友理工株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

< 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、住友理工株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、住友理工株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- 1．上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が連結財務諸表及び内部統制報告書に添付する形で別途保管しております。
 - 2．XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月20日

住友理工株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 福 井 淳 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 川 口 真 樹 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 金 原 正 英 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている住友理工株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第131期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、住友理工株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が財務諸表に添付する形で別途保管しております。
 2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。